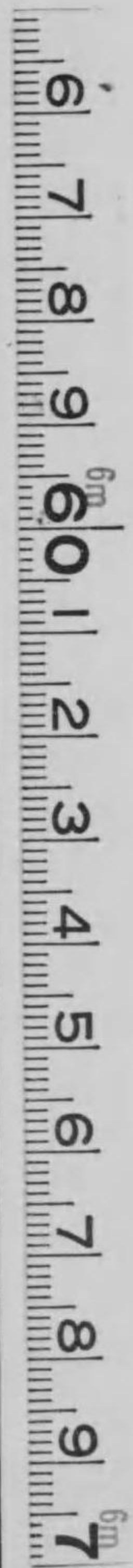


252.5  
51



始



トエ1W-7

白井規一著

兒童の精神生活と教育

東京 目黒書店發兌

大正  
5. 4. 26  
内交

## 自序

兒童の精神生活は單に大人のを小規模に縮寫したるものとして見るべきではなく、寧ろその量に於ても、又その質に於ても、兩者の間には大なる徑庭の存するといふ事は、兒童研究家の一般に承認する所の事實である。故に成人の心理研究とは別箇の見地に立ちて徹底せる研究をするてなければ、單なる比較論位で推定し得べきものではない。これ近時兒童心理研究の聲の年と共に高まりつゝある所以である。思ふに夫のモキマン氏などによりて高調せらるゝが如く、將來の兒童教育學の建設は、如何にしても兒童心理學の基礎の上に立たなければならぬ。この意義に於

て兒童心理學はゆく／＼師範教育に於ける必須科目として重視せらるゝ日の遠からざるを信ずるものである。同じく兒童心理學の中にありても、嬰兒心理學の研究に就ては、注意深き母の日記や、想像富贍なる記者の幼時に關する回想談乃至自叙傳といふ類のものがあつて、餘程發生心理學の方面に光明を投げて居る。然るに學校兒童を對象とする心理研究に至りてはその成績甚見るべきもの少なく、前途尙遼遠の感がある。これ蓋し學校兒童の精神生活の内容は漸く複雑となり多様となつて、その觀察を容易ならしめぬものがあると共に、一方日頃兒童と絶えず接觸する人々も雲烟過眼視して更にその觀察眼を養ふを爲さざるの致す所であらう。

若し現時の教育界に於て根本的研究を要するものがありとすれば、正しくこの學校兒童の心理研究の如きも亦その一であると思はれる。故にこの方面の缺陷を充すに於て歩一步を進むるは、兒童教育の全局面より眺めて甚緊要なる事業と言はねばならぬ。余は常に斯様な考を懷いて兒童にも接し、又多少關係ある著書にも親しみ、只管學校兒童を中心とせる心理研究の材料を獲得せんことに努めたのであつた。

此の如くにして歐米の學者によりて試みられたる研究法を移して我國の學校兒童の上にも適用し、以て彼此研究の結果を對照したならば、嘗に興趣深きのみならず、比較心理の上にも多大の貢獻を爲し得る所以であるが、如何せん、

余はこの種實驗的研究に着手後日猶淺く、且つ中には纏りたる成績を收めたるものゝないではないが、何にせよ實驗の範圍極めて狭きに失するから、直ちに此者を取りて彼此比較の材料とするは無謀であり大早計であると信じ、故らに本書には主として彼地學者の研究の方法及結果に就て叙述し、間々自家の經驗と研究の所得を挿入するの程度に止めたる次第である。

本書は又更に兒童心理上の事實を事實として記載するに満足せず、教育的見地より如何に之を導き如何に之を待つべきかに就いても論及せんことを期した。唯才疎にして識の淺き、事志と違ふ所多きは、轉た忸怩に堪へない。偏へに大方諸君子の叱正を賜はんことを祈る。

終りに本書の編著に際し、主として参考せる書目を左に掲げ、謹んで著者諸先生に對し甚深の敬意を表します。

鯉城臥虎山下の寓居に於て

大正五年三月

白井規一識

主要参考書目

- 小西重直氏 現今教育の研究  
三澤糾氏 國民性と教育方針  
塚原政次氏 青年心理  
野上俊夫氏 叙述と迷信  
中島泰藏氏 個性心理及比較心理  
中島力造氏・元良勇次郎氏 青年期の研究  
速水滉氏・青木宗太郎氏  
Ament—Die Seele des Kindes.  
” —Forschritte der Kinderseelen Kunde.  
Gaup—Psychologie des Kindes.  
Groos—Das Seelenleben des Kindes.  
Hellwig—Die vier Temperamente bei Kindern.  
Heymans—Psychologie der Frauen.  
Höfler u. Witasek—Hundert psychologische Sehnversuche mit Angabe der Apparate.

- Jean Paul—Levana oder Erziehlehre.  
Lay—Experimentelle Didaktik.  
Lay—Experimentelle Pädagogik.  
Mennann—Vorlesungen zur Einführung in die Experimentelle Pädagogik und ihre Psychologischen Grundlagen.  
Mourou—Die Entwicklung des sozialen Bewusstseins der Kinder.  
Piggot—Grundzüge der sittlichen Entwicklung und Erziehung des Kindes.  
Rein—Handbuch der Pädagogik.  
Salzmann—Krebstbüchlein.  
Schreiber—Das Buch vom Kinde.  
Stern—Differentielle Psychologie.  
Störting—Die Hebel der sittlichen Entwicklung der Jugend.  
Baldwin—Mental Development in the Child and the Race.  
Kirkpatrick—Fundamentals of Child Study.  
O'shea—Social Development and Education.  
Pyle—The Outline of educational Psychology.  
Stanley-Hall—Adolescence.  
” —Aspects of Child Life and Education.

# 兒童の精神生活と教育

## 目次

第一章 兒童心理學の任務	一
第一節 最も愛好すべき科學	一
第二節 兒童心理學と關係科學	五
第三節 兒童心理學二方面の任務	二
第二章 兒童心理觀察の方法	二〇
第一節 科學的方法學	二〇
第二節 自己觀察と他人觀察	二二
第三節 個人觀察と多衆觀察	二七
第四節 自然的觀察と人爲的觀察	三三

第三章 兒童の精神生活の特質……………三九

第一節 兒童精神發達の三階段……………三九

第二節 兒童の特質に關する種々の解釋と之が批評……………四三

第三節 兒童の發達に關係ある特殊現象……………四五

第四章 兒童個性の四大型……………六三

第一節 浮性兒の精神生活……………六三

第二節 熱性兒の精神生活……………六六

第三節 鬱性兒の精神生活……………六九

第四節 冷性兒の精神生活……………七三

第五節 個性觀察上の着眼點……………七四

第六節 指導者の個性……………七六

第五章 兒童の道德意識の發達……………八二

第一節 兒童の社交性の發達……………八二

第二節 兒童の言動に見はるゝ推移……………一五三

第三節 兒童と從順……………一五九

第四節 兒童の義務觀念……………一六三

第五節 兒童の正義に對する考……………一七一

第六節 兒童と尊敬……………一八〇

第六章 兒童の道德的判斷……………一八五

第一節 兒童の年齢と操行との關係……………一八五

第二節 同輩の上に加ふる道德的判斷……………一八九

第三節 處罰と兒童の道德的判斷……………二〇三

第四節 學級責任と兒童の道德的判斷……………二一〇

第七章 兒童の虚言……………二一九

第一節 虚言と誤謬……………二一九

第二節 虚言は先天的か後天的か……………二二一

目次……………三



第三節 虚言の種類……………二三四

第四節 虚言の教育的處理(其一)……………二三五

第五節 虚言の教育的處理(其二)……………二三七

### 第八章 兒童と暗示作用……………二四三

第一節 暗示の意義……………二四三

第二節 暗示の種類……………二五一

第三節 暗示の効力……………二五五

第四節 暗示と環境……………二六二

第五節 兒童被暗示性の實驗……………二六八

第六節 暗示の教育上の適用……………二八四

第七節 教育者の暗示力……………二九五

### 第九章 兒童の所有欲……………二九八

▽第一節 所有欲の起源と發達……………二九八

第二節 兒童の金錢觀と教育……………二九九

### 第十章 兒童の社交定型……………三〇九

第一節 概 說……………三〇九

第二節 適應型と非適應型……………三一二

第三節 豁達型と通達型……………三二六

第四節 自誠型と戯曲型……………三三〇

第五節 侵犯型と順良型……………三三三

第六節 要 結……………三三八

### 第十一章 兒童と嗜好……………三四三

第一節 玩具の好みの上に見はるゝ兒童心理……………三四三

第二節 友人の好みの上に見はるゝ兒童心理……………三五〇

第三節 職業の好みの上に見はるゝ兒童心理……………三六〇

### 第十二章 兒童と自然……………三七三

第一節	兒童と日月星雲	三七三
第二節	兒童と火風水	三七九
第三節	兒童と岩石花木	三八二
第四節	兒童と動物	三八七
第五節	自然と教育	三九二
<b>第十三章 兒童知能測定の標準</b>		
第一節	ビネー、シモンの調査法	三九六
第二節	ボーベルタツハの調査法	四〇四
第三節	テルマン、チャイルドの調査法	四〇八
第四節	モキマンの調査法	四一三

目次終

兒童の精神生活と教育

白井規一著

第一章 兒童心理學の任務

第一節 最も好愛すべき科學

兒童心理とし、言へば最も興味あり且つ最も愛すべき研究の一對象であることは蓋し争ふべからざる所であらう。試みに夫の遊戯と悦樂とに充てる爽快晴朗の世界たる兒童界に就て見るに、固より時に驟雨一過の現象も少なからぬが、それもホンの束の間、黒闇々と見えし雲間から、早くも熾々たる陽光がさし出でてやがて光明に包まれるのである。吾等成人の間



には決して避くべくもあらぬ陰鬱にして厭ふべく、重苦しくして堪へ難き憂愁悲痛の雲霧や霖雨やは殆ど兒童界の興り知らざる所であつて吾等成人が此兒童界から發散せられる光明に眩耀して心魂の飛揚する思のするものも實に至極尤な事である。獨逸の心理學者スチュンブが伯林に於ける最初の兒童心理學會の席上の講話中に曰く、

スチュンブ氏の言

夫のリンネ氏が植物學を以て最も愛すべき科學と言つたのは有名な話であるが、それも今日の植物學にはもはや相應しからぬ。蓋し今日の植物學者の所爲を見よ。彼等はこれ迄の如く、單に採集箱を腰にし、野に出て採集せる植物を彙類したり、又は花藥を數へたりするやうな事はなさぬ。寧ろ彼等は無殘にも細胞組織以外には何物をも殘さぬ迄に小刀で野の子供の稱ある植物を切りさいなみ、或は回轉器や壓搾器様なものを以て壓抑を加へ、或は日光より遠けて任意に冷熱を與へ、又は暗處に幽閉し、若しくは電光に觸れしむるといふ風に、冷遇至らざるなき者がある。然るに吾人は兒童に對してかゝる取扱は爲さぬ。

好事的研究家

縱令兒童が時に幽閉せられたり、檢束を加へられたりするやうな事があるにしても、その場合は少くとも兒童自身の爲に慮りて爲さるゝのであつて、單に兒童心理の考察上から故らにかゝる事は爲さぬのである。故にこの點に於て兒童心理學者の兒童に對する態度は、植物學者の植物に對する態度と趣を異にするものがある。若し今日の科學中他に比して愛らしいといふ名稱を冠すべきものがあるとするれば、それは兒童心理學である。實にや兒童心理學は現世界に存する科學の中で最も愛らしく最も無邪氣なる部類に屬するものであるから、吾人は之を保護もし、養護もし、又研究もし、理解もせなければならぬのである。と。しかし斯の如く人を誘惑し、眩耀する方面には、普通亦多くの危険を伴ふが常であるが、兒童心理學の如く成立後日猶淺き科學にありては、特に然りと云はねばならぬ。夫の新發見に係る金産地には、さる方面の素養を有する人も、然らざる人も、誰彼れの差別なく、我勝ちにと推し寄せるのである。此等の人々は燦爛目を射る計りの金塊をえようと望むのであるが、多

くは缺くべからざる知識と、採礦上必要なる器具類の準備とを持たないが爲め、折角寶の山に入りながら、手を空しうして歸るのである。猶それよりも感むべきは外觀光光りのする、しかも其實何等の價値なき鑛滓様の發掘物を擱んで得たりとする輩である。故に心ある多數の心理學者は異口同音に、如上の科學上の黃金熱に浮されぬやう警告を與ふる必要を切實に感ずる旨を述べて居る。ペンノ、エルドマンの如きは『兒童の心理と學校』なる著書中に、

エルドマン氏の警告

吾人は現時兒童の方面に關し事を共にする熱心家が邪路に踏み入りぬやう警戒する事の必要を感ずるものである。固より熱狂者を有することは喜ぶべきである。併しながら熱狂家は動もすれば不確定なる事實を確定せるが如く考へ、假定をば完璧と早合點するが如き誘惑に罹り易きは、大に考慮を要する所である。

と言つて居る。必要なる知識と準備とをなさないうで、この未開の領土に猪進しやうとする世の好事家には慥かに頂門の一針である。

## 第二節 兒童心理學と關係科學

上級二概念の檢察

精神科學特に心理學の概念と種々の關係に立てる所から、此等との混同を避けんが爲め、今茲に兒童心理學は兒童の精神生活を科學的に攻究するにあるといふ單純なる定義から出發する事にする。然るときは、此科學の對象とする兒童の精神生活なる語は、二つの異なる上級概念即ち兒童研究と心理學とに接觸を保つて來る。故に以上兩者に就て先づ略述をなさう。

兒童研究

兒童研究は人類學と同様に、對象たる兒童の身體及精神の兩方面に亘りて之を取扱ふのである。されば兒童の精神的方面に關係を有する限りに於ては、兒童研究は兒童心理學と交渉する所が多である。兒童研究の他の一方面は、至極廣汎なる意義に於て、之を兒童の生理學と名づくるのも敢て不可なしとする。そは兒童といふ有機體を研究し、兒童と成人との間に存する差異を比較すると共に、兒童から成人に移りゆく有機體の發達階段を發生學的に説明しやうと試みるものである。斯の兒童生理學の特殊的

の一分派は病的の身體狀態を研究するもので實際上の必要から有力なる發達を遂げつゝある。兒童心理學の研究者に取りては此一分派の方面に於ける生理的研究の結果を借り來つて有効に利用することが少しとせぬ。

一般的心理學　リップスに從へば所謂「意識的經驗の科學」はその研究範圍の上より兒童心理學とは密接なる關係に立つが故に稍立ち入りて記述する。

十九世紀の前半までは認識論や形而上學が優越なる地位を占めて居たので心理學は見る影もなき甚だ慙れな状態にあつたのである。従つて心理學上の現象を測るべからざる廣大無邊の分野に於てすら至極狹隘なる範圍に踞踏せる研究を見たのみである。當時心理學に携はれる人々も研究法の未しき自己觀察や他人に就ての直觀やを利用する事位に満足したのである。従つて一般的の心理學といふ銘こそ打つて居たれ研究は主として教育ある成人の精神的生活に限られし觀があつた。これが儘かに心理學上最重要なる對象者である事は如何なる時代にも動かぬ所であら

う。しかしながらこれが心理上吾人に與へられたる唯一の對象物ではな

い。而してこの對象物と雖も在來の研究を以てしては満足が出来ず更に一層精密の度合を以て整理を加ふる餘地が多いのである。

十九世紀の後半には一大變化が起つて爲めに精神科學の領域は實に於ても量に於ても異常なる發達を見るに至つたのである。これが最大要因は蓋し近代の自然科學の勃興に負ふ所が多い。これも二様の點から考察を爲し得る。一はダーウソンの假定説たる進化論が一世を風靡し有機的

生活の種々の階段の比較にも之が適用を見たる事である。他の一は自然科學的の實驗法が目覺しい結果を齎して影響を與へたるに因る。以上兩者の心理學に對する刺戟たるや恰も顯微鏡と望遠鏡とを同時に贈られたるに類する趣がある。即ち實驗法は在來の心理學では容易に到達すべくもあらざる個々の精緻細微の點に迄侵入するを得しめたのである。亦心理的方面に於ても生活の種々の階段に立てる者を比較し之が精神の發達を研究しやうとする努力は恰も望遠鏡にて天涯を望むが如く多くの新領土

を開拓するに至らしめたのである。此領土たるや、以前は高々で僅かな人が一寸覗いて見たる位のものに過ぎなかつたが、以來系統的の研究により、その内容が漸時闡明せらるゝに至つたのである。

兒童心理學の意義を明かにするに資するが爲め、心理學の比較及發生的方面に關し、二三の注意を促したい。ヴントの所謂『精神的發達』に關する研究よりして、心理研究の特殊の分派が派生し來つたのである。これは一般的心理學の結果を前件として、重要な特殊の範圍の開拓に向つたのである。吾人は先づ動物心理學を擧げねばならぬ。これは既に前世紀に於て培はれたる精神研究の一分派であるが、久しい間全く物數奇のする仕事の範圍を脱することが出來ず、餘りに珍奇なる事や、餘りに可笑味のある事に傾き過ぎ、且亦半ばは諷刺的、半ばは眞面目な敘述法を以て、動物に種々の知能作用あることを示さうとしてゐる。しかしこれとても科學的の見地から言へば、夫の枝垂柳に悲哀の情緒を、迅雷に憤怒の情緒を、寓するが如き意味に於て動物を付度するに過ぎぬ。一體動物心理に於ける最重要なる

問題の、一は、少くとも、人類の知能に對立する所のもの、即ち動物本來の面目を見はす、先天的の本能に關する研究である。蓋し動物の本能に關する知識は人類の本質を理解するが上に、重要な寄與を爲すによる。かゝる考は移して以て兒童心理の上にも應用しうる所である。猶他の新生面には民族心理學がある。これは獨逸にありては、シュタインタールやラッアルス等によりて建設せられたのであるが、以來ヴントの手に之が開拓を見るに至つてから、以前とは頗る異なる徑路に向つたのである。即ち民族心理學は、ヴントの所謂『心理的社會學』として人類の共同生活上の最重要の精神的產物たる言語とか神話とか風習とかの類を研究し、これによりて種々開化史上の問題と接觸し來つて居るのである。亦一面發生上の理解を必要とする所から、民族心理學は所謂『心理的人類學』として、原始的種族の研究にも遡つて見るのである。恰も兒童を研究することが、個體發生の發達に關して教ふる所あるが如く、現存する未開の人類を調査するときは、人類の種族發達史に關し、心理學上の説明を與へられることが多いのである。蓋

し實際の人類の始期に就いては、直接に確乎たる何物をも知る事が出来ぬが、如上の方法によりて唯間接的に之を推定し得るのみである。故に今後とも人類學が最古の人類又は類人的生物の身體的存在に關し、猶一層新たな研究を進むるの日を期待すること切である。此等の研究によりて原始人の身體的狀態が頗る明かとなつたとしても、その精神的存在は非常に制限せられたる程度に於て、知り得らるるのみである。蓋し有形の武器や調度や種々の技巧的の活動に成れる實物の存在する所にして、始めて此等に基づき、間接的に精神上に歸結し得るのみであるに因る。尤もかゝる際に於ても現存する未開人との比較をなさば、その歸結する斷案も、茲に色彩と生命とを得るのである。従つて生活狀態の外面的類似は、亦内面的、精神上の類似に相應するものであるといふ假定を真ならしむる限りに於て、野蠻人の民族的、心理的研究は、甚重要なものである。固よりこの假定は、自明の理と考へらるゝ程の權威をもつものにあらざること知らねばならぬ。

吾人は兒童心理學に於ても、之が徹底的の研究は夫の進化的思想の幾多有力なる問題を刺戟するに足る領土の存するを承認せなければならぬ。宜なるかな、テイデマンが逸早く此種の問題に觸れてより以來、現時何處の文明國にありても此方面の進況顯著なることを示してゐるのである。

### 第三節 兒童心理學二方面の任務

兒童心理學の任務とする所は、一面には學理的なると共に、他の一面は實際的の性質を具ふるにある。嚴密に學理的の目的を追求する限りに於て、之を「純正兒童心理學」として表はしうるのであるが、實際上の必要殊に教育上から之を問題として討究する限り「應用的兒童心理學」となるのである。

學理的の任務に關しては、先づ以下の事を切言して置くのは必ずしも無用の業ではない。即ちこの世の中に於て苟くも精神的生活の象徴を認め色彩を具ふる現象に對しては、何處迄も立ち入りて之が討究に當る事が疑

もなく心理學の任務であるといふことである。従つて、兒童心理學の領域に於ても、亦その攻究せる新結果は、第一に、兒童心理學、其れ自身、の爲めに價値あるものである。この研究ありしが爲めに、成人の心理状態を理解し易からしむる上に資する事があれば一層幸とする所であるが、さなくとも毫もこれが價値を輕重する所以のものにあらざるを知らねばならぬ。斯の如くこの科學を獨立的に記載すべき價値は特に明言するの要を認める。

然しながら吾等成人のとは著しい相違が表はれて居る様な兒童精神上の事實は、之を吾人自身で觀察したる所とさして異らぬ風な事實に比すれば、多大の注意を拂ふを要するといふ事は固より自然の數である。この種の傾向は、兒童心理學をして、比較科學の任務を負はしむるに導くのである。言ふ迄もなく此「比較」なる語は單に一致的の性質を抽出するに止らず寧ろ類似中に於ける差異を發見せんとする上に、より多くの意義が存するものである。故にこの兒童心理學に於ても單純なる比較に立ちて満足すべき譯のものではない。

比較科學としての任務

發生的説明科學としての任務

其一個體發生

其二種族發生

多くの點に於て甚だ區々なる兒童の精神生活から、心理學上の主要なる對象、即ち成人の精神生活が發達を見るのである。従つて兒童心理學は發生的説明科學の一任務あるを拒否する事が出来ぬであらう。かゝる發生的説明の要求は、兒童心理學の場合に於て、二重の意義を生じて來る。

第一に吾人は兒童精神の研究によりて、如何にして教育ある成人が發達し來るかの徑路を経験することを期待し得るのである。詳言すれば一方にありては一般心理學的の考察により如何にして兒童は普通的一般的の發達を遂ぐるものであるかを見、他方にありては趨異心理學的の考察により如何にして非常に多様な人類の定型や個性やが發達するかを見るのである。上述せる範圍内に於て、吾人は、個體發生の説明を爲さねばならぬ。第二に吾人は亦兒童心理の研究によりて個體精神の發達と初期人類の間に於ける種々の連絡關係を發見しやうとする希望をもつ事が出來るであらう。夫の個體發生と種族發生との間に或種の類似の存すとする假定は、既にヘルバルト派の所謂「開化史的階段説」の根柢を作り、開化史的の進



程に従つて教育の進程を律しやうとしたのである。然るにヘッケルの「個體發生は種族發生の縮寫である」とする生物學上の根本法則の樹立を見たる以來、兒童心理學のこの種の任務に對する問題は、益々一般的普遍的の意義を有するに至つたのである。即ち兒童心理學は、夫の動物心理學及民族心理學と共に、人類の精神的發達の秘密を攻究するに、缺くべからざるものとして迎へられ、翻つて亦吾人が種族發達の上から知りえたるものは、兒童生活の色々な現象の上に、光明を投ぐるを認められたのである。

さはいへ此際十分明確なる識見に訴へて警戒を加へねばならぬ事がある。例へば一研究家が乳兒の自動的に同時に手を動かすのを以て、吾人の祖先が嘗て水中に住んだる頃の事を回想するのであるとして考察するが如き報に接する時、吾人はかゝる考の如何にも大膽である事に驚愕するが先となつて、それが正否の如きは念頭にも浮ばぬのである。其他言語の方面に於て、亦此種の並行的の關係を強度に言ひ顯はすなどは、稍過ぎたるの思ひあらしめたる事が少からぬのである。如上の發生的の視點は動も

すれば兒童心理學を評價すること重きに過ぎ易からしむるに至る點は警告すべき所である。かゝるが爲めに兒童心理學にさして好意を有たぬ者をして非常に手厳しい攻撃を加ふるの機會たらしめる場合少しとせぬ。

兒童心理學は成人の意識現象をば發達の途にある兒童の精神現象の研究によりて説明しやうと力むるのであるから、正に心理學中の主要事項であるといふ主張は、夫の進化論にかぶれて居る兒童心理學者によりて唱道せらるゝ所である。斯の如き妄想者に對しては、精神的の方面に於ける比較研究なるものは身體的の方面に於けるものに比して非常に不完全不都合なる條件の下に爲さるゝものであるといふ争ふべからざる事實を指示することにより、根本的に其迷を解きうる事と思ふ。見よ、下級の發達階段にあるものの身體的機能も、高級の發達階段にあるものの身體的機能も、何等異なる所なく、同様に研究の對象として直接に吾人の眼前に提供せられるではないか。精神生活は之と異り唯吾人の自己意識として、即ち成長せる文明人の意識として、直接に提供せらるるのみである。而して吾人が若し成

長せる文明人の意識から兒童心理の討究に歩を進めやうとする場合に於ても、矢張り唯身體的なるものが、吾人の眼前に表現するを見るのみである。身體的なるものとは何ぞや、發表運動や表出舉動やである。詳言すれば吾人自身が兒童と同様な運動と舉動とによりて經驗したやうな精神状態を比較論を以て説明をなし、以て兒童身體上の象徴の觀察から、その内的生活の上に間接に推及しうるに過ぎぬのである。夫の久しき以前に經驗せる自己の兒童期の回想の如きも、高々かゝる比較論による説明をなす際の幾分の助けをなすに過ぎぬ。かゝる幼時の回想は誰れにもあるが、その信用の價値たるや、極めて僅少である。蓋し記憶は殆んど錯誤によりて支配せられるからである。故に兒童心理學は一般心理學の本來の基礎たる價値を有するとする意見は決して許容すべからざる所である。寧ろ兒童心理學の反對者は次の如き事を提言する。曰く兒童心理學は一般心理學に利用せらるゝことは甚稀であるが、之に反して彼れは細大これの力を借りて存在を維持するのであると。

上述せるが如き反對論者の與ふる批判は甚だ冷酷なるものではあるが、これとても兒童心理學者が餘りに自己の領域を脱して、誇大的にその價値を提唱する所の激成せしめたるものである。故に吾人は前に述べたる争ふべからざる事實に省み、兒童心理學者は謙抑自ら守る所あるべきを警告する。一般心理學はあらゆる精神的研究の出發點にして、且つ中軸たるべきものであることは、是認せなければならぬ所である。何となれば、一般的心理學に於てのみ研究の對象は自己の經驗内に存し、直接研究者に提供せられるからである。さはれ一般心理學は徹頭徹尾如上の堅實なる根柢の上に立つものであると假定するならば首肯し難い所である。蓋し一般心理學は、例令ば學者とか農夫とかいふ一個人としての精神裡に行はれる現象を叙述するではなく、何人にも剽當する様な特質や法則を知らうとするにある。かかる所から最早直接的の實證を離れるに因る。

一般心理學から進んで野蠻人や兒童や動物やの心理上の理解に到達することに於て、始めて比較論の方向に一步を進めたるのである。吾人が

自己の直接經驗から遠ざかること多きにつれて、その心理上の結論の益、不確實となるは争ふべからざる所である。吾人は比較論に於けるかゝる不確實なることを意識しながらも、猶重ねて次の言をなすのである。即ち何處にても能ふ限りは飽くまでも進んで心理的の攻究に従ふは、心理學の義務であり、責務であると。又かゝる比較論の攻究に際しては、絶えず一般的心理學に待つ所がなければならぬ。しかも此種の方面に於ける所得の結果は、翻つて成人の精神生活の上にも、光明を投ぐることに、より、其借錢が利息を舉げて元利共清算せらるゝを期待する。

實際上の任務

終りに兒童心理學の實際上の任務に關する問題に就きて一言する。即ち單に兒童心理學は教育學の缺くべからざる補助科學であるといふ事實を指示するに止める。ヘルバルトは彼れの『教育學講義要綱』の中に『科學としての教育學は倫理學及心理學に依從す。前者は教育の目的を、後者は之が進路方法及障害を示す』と言つて居る。これに従ひ、若し精神科學が教育學の建設に對する材料を供給するものとすれば、自然その分科の中で兒

童心理學が最も重要と言ふことになつて來る。近時の心理學の精緻なる方法、わきても實驗や統計やを兒童の研究の上にも利用するに至りし以來、如上の事は益々明白に認容せられ、加之今やヘルバルトの教育學以上に進展しようとする傾向の一は、正しく兒童心理學によりて教育學の新根柢が作られねばならぬといふ確信の中に存する。恰もツントの研究の心理學に於けりしが如く、またモイマンの實驗教育學的の研究は、教育學の發展に對して同様重要なものとなるであらうとは、強ち過言ではあるまいと思ふ。

## 第二章 兒童心理觀察の方法

### 第一節 科學的方法學

科學的方法學とは何ぞやと言は、畢竟研究によりて發達したる技術を叙述したるもの、謂である。學者の研究といふ活動も他の活動と擇ぶ所なく、矢張り精神身體の反應の總計として考へらるるのである。故に斯様な活動は、亦完全なる反應的模式の三の筋道を経過する。即ち(一)刺激を攝取すること、(二)攝取せるものを内部的に修整すること、(三)興奮作用を運動的に發散すること、これである。兒童心理學を研究するに當つても亦三樣の方法として

- (一)觀察すること
- (二)觀察せるものを論理的に修整すること
- (三)修整せるものを叙述すること

所謂方法學  
の意義

等に區別することが出来る。

さて兒童心理學の觀察法につきては、觀察の三對項に依るが最も宜しきに適することと思はれる。蓋し三對項とは(甲)自己觀察と他人觀察(乙)個人觀察と多衆觀察(丙)自然的條件及作爲的條件下に於ける觀察をいふのである。如上各對項を爲せる概念を結合して、各項亦一方法を生ずべき可能がある。以下此等に基づいて觀察上の諸方法の綱領を擧げる。

### 第二節 自己觀察と他人觀察

自己觀察、ブレントノに従へば自己知覺と稱するが、さらに善い。これは自己の意識の經驗を振り返つて觀察するの言ふ。自己觀察といふ方法の弱點は既にヒュームやカント等によりて充分道破せられて居る所であるが、それにも拘はらず、あらゆる心理上の方法根柢を爲すのである。何となれば唯自己觀察といふ方法のみが、研究者にその研究の對象を直接に提供するからである。コルデスの『自己教育の事實の心理的解剖』中に見ゆ

自己觀察

兒童期の回想

るがごとく、此自己觀察法は、種々の形式に之を區別することが出来る。それ等の内、唯一つの者が、兒童心理學に取りて利用し得らるゝのみである。何ぞや、自己の久遠の過去に屬する兒童期の經驗を追懐することである。此種の回想なるものが如何に不完全にして且つ不確實でありがちであるといふ事については、事新らしく言ふ迄もない。さはれ吾人は夫の多くの心理學者のごとくに、此の回想なるものに全然科學的の價値を與ふるを拒否するを欲せぬものである。夫の特に種々の方面から成人とは大に相違する所のある兒童期の感情や、外界に對する努力の状態やは、矢張り多くの場合に於て、吾人の心裡に、可なりの敏活さと確實さとを以て記憶に保持されるものであることに想到するがよい。且つや吾人が兒童の精神生活に對する他人の解釋をば、或は適當と認め或は不自然と批難するが如き場合には、何時も自己の過去の回想がかゝる賛同や否認の根柢を爲すのである。他人の觀察、他人の觀察と言ふことになれば、心理學上より眺むれば、最早間接的研究法となる。間接的とはいへ、他を觀察するといふことは、自分

他人觀察

表出作用と精神状態

といふ個人より進んで、總ての人といふ普遍的價値の結果に到達すべき唯一の手段である。さればこれが兒童心理學にとりて缺くべからざる研究法たるは言ふ迄もない。研究の對象者たる兒童は、彼等の内的生活の象徴乃至表出と認められるやうな身體上の變化状態を示すものである。再言すれば兒童の身體の發表運動表示とによりて、彼等の内的生活の或ものを間接に知りうるのである。かゝる身體上の表出作用は、感官の尋常なる兒童にありては主として視覺的に現はれるが、盲者にありては觸覺上の印象より精神状態に歸結するやうな能力が強く發達するは著しい事實である。而してかゝる表出作用の一部は、一時的の性質のものであり、一語は過去の表出作用の繼續的結果たる性質のものがある。拳を握るが如きは前者の實例で、口の周邊に於ける一種脈ふべき表示の存するが如きは後者の實例である。

此等の表示作用には、先天的及後天的反應の二つの比較的の差別あるを知らねばならぬ。例へば視覺的にして且つ先天的なるは笑ふ際に於ける

口の運動の如きもので、同じく視覺的にして後天的なるは人を招く際の手振りや繼續的結果によりて獲得せる書方やの如きものである。夫の叫ぶこと泣くこと笑ふことの如きは聽覺的にして且つ先天的のものであるが、談話する如きは同じく聽覺的であるとはいへ、後天的のものである。嬰兒にありては如上の表出作用の中で最も重要な部分、即ち言語とか書方とかいふ類のものが猶缺如して居る。さはいへ間接的の觀察をなすに當りては、それ等以外に猶多様の可能が存するのである。唯斯る觀察の際常に陥り易き危険を伴ふを豫知してかゝらぬと思はぬ不覺を取ることが屢々である。他なし成人の比較論に従つて日常の精神現象を解釋することこれである。例へば一嬰兒に單にボンヤリとせる不機嫌が見られたる際に、恐怖といふ複雑なる情緒を假定するが如き類である。更に甚しきは先天的の表出作用をなすに際し、實際心理上の伴生現象がなくて單に生理上の機官が働くが如き場合にも、精神現象を假定するに誘はれ易い事などである。例令ば事實嘔吐を感ずる事なくして、しかも嘔吐の際に爲すが

一步を進め  
たる比較論

如き澁面をなす類である。兒童の腦髓の未成熟に關する近時の研究は、かかる點に警戒を與ふるが上に、至極適切にして有力なるものがある。併しながら、兒童の精神生活を間接に解釋するに際し、比較論に依りて類推することも、方法用意の如何によりては、さばかり不確實のものではないといふ事も一言して置く要がある。若し吾人が怒つて居る様に見える兒童に憤怒の情緒を歸するが如き場合は、單に普通の意味に於ける比較論の結論に外ならぬ。之に反し、若し吾人が如何にも不機嫌らしく見える小兒に砂糖の一塊を與ふるや否やさも喜ばし氣な表示をなせるが、これを其手中から奪ひ去るや更に元の不機嫌に立ち戻り或は泣き出すといふが如き現象に遭遇せんか、これ亦かゝる解釋の根柢をなすものは飽く迄比較論である。さはいへ前の場合とはちがひ、此場合は吾人と兒童との間に於ける相互の關係は單に或種の心理作用を假定することによりてのみ始めて解釋がつく様に思はれる事情にある。而してかゝる事情は比較論の遣り方に一層大なる確實性を附與するものである事を附言せねばならぬ。

兩對項の結合、如上の兩對項を結合しての方法と言へば、他人の自己觀察を利用するといふ事である。詳言すればこれは他人が直接に自己の精神状態の知覺中に發見せるものをば、間接に言語や文書の表出作用によりて傳ふる所のものである。此種の方法の最も發達せる形式は、科學上の交際殊に専門雜誌によりて各種の専門家が自己の兒童時代の回想に關する自己觀察の交換乃至相互の批評が爲される場合である。とはいへ、斯道の學者は必ずしも自己の幼時の經驗に關して善い記憶を整理して提供するとは限らぬ。是に於てか夫の科學的目的を以て記載せられたものではな

いが、文學的の才能ある人の自敘傳記中に、亦は詩人の作品中に、敘述せられたる如き自己觀察上の豊富なる材料は甚だ重要である。思ふに藝術家の奔放なる想像力は、假令純傳記體の目的を有する記載に於いてすら種々の點に於て實際とは相違せる様な事がないとは限らぬが、しかも彼等詩人は普通人に比して兒童期の心理状態を充分なる敏活さを以て實現しうる能力を有すると共に、且つ此等の兒童期の特徴を最も明瞭なる表出に齎らすべ

き天才を有するからである。

其他談話を爲しうる兒童ならば、簡單なる自己觀察に就きての談話をば科學的に利用することが出来るのである。唯幼き兒童に自己觀察に關する問題を與ふるに當りてや、その返答には大人ですらも答へ兼ねるといふ風な困難なるものを以つてするが如きは慎むべき所である。さはいへば何なる玩具が兒童には最も好ましか、或は商店に於て何が最も氣に入るか、といふ様な問題の解答には、差し當り兒童の自己觀察を利用するの外に途がないのである。而して充分簡易なる性質のものゝ場合にありては、かゝる問答法は唯年長の兒童にのみ限るの要はない。

### 第三節 個人觀察と多衆觀察

研究法の第二の對項には、個人觀察と多衆觀察とがある。

個人觀察、これは一個人を引き續いて觀察するのであつて、上述せる自己觀察の形式に於て爲さるゝか、或は他の個人を間接に研究する形に於てか

我兒に關する日記類

行はれる。唯後者の研究法が兒童心理學者に取りて最も廣く行はれて居る。この部類に屬するものでは自分の子供の發達を觀察して、非常に尊重すべき傳記體の記録をなせるのがある。就中ブライエールやシンによりて發表せられて居るのは最も價値の多いものである。此の如く個人を繼續的に觀察するは、極めて有意義のものである。蓋しかくすることによりて多様の問題を關係的に研究したり、或は絶えず新たなる觀察によりて既到達せる結果に確證を與へ、又は之を改善するといふ様な好都合な機會を生起するからである。特に兒童心理學の發生的の任務に關しては、一個人を繼續的に研究することが缺くべからざるものとなつて居る。唯此種方法に於て、輕視すべからざる危険は、他なし、個人的の特種なる事項をば、直ちに以つて一般的の現象と考へるといふ風に誘はれ、易い事に存する。例へば一兒童に於ける子音の初めて見はれたる事實や乃至色覺の發生やを取りて之を普遍的の現象とするが如き類である。此等の事實たるや、猶一層廣き徵檢を経るにあらざれば、しかく輕易にかゝる斷定に到達すべからざ

多衆觀察の目的と方法

るものたるや論なき事である。

多衆觀察個人觀察に對立する多衆觀察とは、單に個人に該當するものより普遍的價値あるものに進まんが爲めに出來得る限り人の多衆に亘りて試みようとする事から出發する方法である。この方法の最も重要な形式には多衆の實驗と問答法とがある。夫の上に述べたる繼續的の個人觀察と同様に、亦此方法も特に兒童心理學に於ては用途が多いのである。例へば多衆實驗の如きは、兒童の過重負擔の問題に關する研究の際などには著しい貢獻を爲して居る。亦問答法を多衆に利用することは、佛蘭西ではピネーの指導の下に、亞米利加ではスタンレー、ホルルの指導の下に、長足の進歩を遂げ來つた。抑々兒童に於ける多衆實驗の發達の由來を見るに、恰も夫の新兵などには主として包括的なる人體測定の研究を行ふと同様な身體上外形上の事項から發生し、漸次精神上内部上の研究に及んで居る迹が窺はれる。

多衆觀察の長所は、一方に於いては兒童の定型の差違に關する暗示を與

多衆觀察の利弊



へ他方に於いては稍々不確實不安定なるものより進んで一般的價値あるものを發見せしむる可能の存するにある。併し此多衆觀察の研究が益々擴張し従つて之れに参加する人の數が増加するにつれて觀察上の確實性と整理に於ける信頼性とが著しく低下し多く水平線以下に達するといふ危険に瀕することが屢々である。かゝる理由から、獨逸にありては最初の内は多衆に利用する問答法なるものは頗る不信用の地位にあつたのであるが、近時その弊所には周密な警戒を加へ、これが用途益々多きを加ふるに至つたのである。

兩者の結合以上兩者の研究方法の理想的結合法は如何にせば出来るかと言へば多くの學識ある觀察者が個人の多數に亘りて出来る丈け繼續的に一人々々研究し而してその得たる結果を漸次取纏めて總括するといふ事にある。かく個人々々の觀察が長くして且つ多様なるにつれ、また其結果の國際的の交換が機關雜誌其他の方法によりて益々完全なるにつれ、いよ／＼益々この理想は實現せられる事になる。猶亦多數の兒童をば適

兩對項の理想的結合法

宜幾多の小團に分ち、此等小團の人數は相當實驗者の注意と監視とが行き届きうる位にし、實驗も度々繰返しうる様にし、且つ各小團にてえたる實驗の結果は別々に處理して行く様に注意し、かくて多衆觀察をば或意味に於て個人觀察に近づけるといふも望ましいことである。亦ウキリヤム、シテルンによりて要求せられて居る所であるが種々の心理學上の研究の中心が問題の種類性質に従ひ、相互連絡を保ち歩調を一にし、系統的に共同研究に従事する如きも確かに如上の理想に近づかしむる所以である。實にや十人の心理學者が進歩せる系統的の方法に従ひこれを十人の兒童に試みて發見したる如き結果たるや、これを彼處此處に散布して解答をえたる數百數千の所得に比し、その量に於て劣る所あるとは言へ、その質に於ては同日にして語るべくもならぬ利用の價値を含むのである。伯林に於ける應用心理學及心理上の集成研究所はかゝる運動に對する一中心たる抱負を以つて生れたものであるが、我が國に於てもかゝる舉の早晚實現せられんことを期待する。

第四節 自然的觀察と人爲的觀察

研究上の第三の對項として吾人は自然的及び人爲的條件の下に於ける觀察に入らう。

自然的觀察  
の一長一短

自然的條件の下に於ける觀察これは觀察せんとする對象をば有りの儘に置いて觀察するのである。即ち觀察者は故意的に觀察をされる對象に影響をも與へねば亦特種の人爲的の補助手段によりて自然の把握や知覺やをより精緻にしようなどはせぬのである。この自然的條件下の觀察は自己觀察の際にも他人觀察の際にも共に用ひられるのであるが兒童心理學の場合には多く後者の形式が主となつて見はれる。夫の兩親が自己の子供に關して記述せる日記類の大部分は自然的條件下の記載である。この方法に依れる觀察は兒童本然の性質と状態とを保持するのであつてこの點が兒童心理學上には非常に重視せられる所以である。併し亦著るしい不利なる點が相並んで存するのは餘儀ない次第と言はねばならぬ。

人爲的觀察  
の二様式  
其 一

其 二

何ぞや吾人は研究の對象をば自己の支配の下に置くことが出來ず却つて好都合なる偶然の事情が認識を欲するものゝ上に見はれて來る迄手を空しうして待たねばならぬといふ不便を忍ばねばならぬからである。猶亦眞の出來事なるものはこれを自然の發生の儘にして置いては普通研究者の要求に對し餘りに多様複雑なる條件の下に見はれ研究せんとする要項のみを孤立し簡單にするといふ要求に副はぬことが多い遺憾がある。

人爲的條件の下に於ける觀察これは二様の形式に於いて見はれる。

第一の形式とは種々の人爲的の補助手段によりて吾人の觀察を一層精緻にし完全にしやうとするもので各種の測定に適用せられるものである。マルベ氏は判斷に關する彼の研究中に於いてこの種の方法をば人爲的觀察と名づけて居る。曰く、「技巧的人爲的の補助手段と相結んで行ふ所の觀察や知覺は其の如何なる種類たるを問はず吾人は之れを人爲的の知覺乃至人爲的の觀察と言はんと欲する」と。

第二の形式とは所謂實驗といふ概念を指すのである。實驗をば廣義に

解すれば對象者に有意的に影響を與へるといふ特徴を擧げることが出来る。かゝる廣義の上から眺めると、若し吾人が植物の根をば觀察せんがため之れを地中より抜き取りたる時、亦は兒童の怒るといふ状態を見んがために嬰兒の手から物を奪ひ去るとき、此等を實驗と名づけうることになる。さはいへ本然の科學上の實驗なるものはかゝるものを指さず、三つの特性を有してゐる狹義に解釋せられるのである。三つの特性とは何んぞや。

實驗に於ける三特性

- (一) 條件を簡易にすることである。これは研究すべき對象を孤立せしめんとし、或はこれを要素に還元せしめんとする努力となつて見はれる。
  - (二) 同様な條件の下に幾度でも反覆し得ることである。
  - (三) 以前とは異なる條件の下にも研究し得ることである。この變更は固より故意的に起さるゝのである。
- 心理學上殊に兒童心理學や教育學上の實驗に於いては確かに實驗法が有効なる結果を示して居るとはいへ、亦その困難も他の科學に比して著る

實驗と識見

しく大なるものがある。これ主として心理上の方面にありては、條件の孤立といふことが非常に困難であるといふ事情に因るのである。エツピングハウスは中學校の種々の學科目に於ける疲勞の度合を研究し、その實驗の結果は『知的能力の調査に關する新方法に就て』といふ興味ある論文の中に收められて居る。これに依れば著者は驚くべき結果に到達して居る。即ち多數の人が確かに最もよく疲勞するものと豫定せる古典の語學教授の後が他の學科の教授後よりも、より善き成績を擧げて居るといふ事である。この實驗によつて吾人は此中學校の學生を實際に古典語の授業後が他學科に比して最も清爽なる心理状態にあるといふ結論に到着し得るのであらうか。かゝる結論に對して識見ある研究家たるエツピングハウス其人は次の如き事を述べて居る。曰く、『種々の學科の教授の結果が疲勞を來すに就ては、單に學科其者の性質に止まらず、亦特に之を擔任する教師の人物如何が著しい關係を有するといふ點の着眼を逸してはならぬ。例へば或學級に於て羅典語の教授後に唯二十七、七といふ書取の誤謬の數を

示せるに、宗教教授後には四十二、四といふ劇増を見るといふ事實に遭遇せんか、かくも突發的に成績の悪くなるといふのは畢竟宗教教授をなす教師の人物の善からぬといふに歸結しても敢へて不當な事ではなからう」と。以て實驗の結果の過信せられない事も分れば、亦如何に實驗者の卓越なる識見を要するものであることも知られる。

實驗と經驗

兒童心理學や教育上の實驗にありては、それが吾人の普通の經驗を確かめるとか、亦は之を一層精密にするとか、いふ時にのみ信用する傾向あるは尤至極の事と言はねばならぬ。これに反し、日常の經驗と相反するが如き場合にありては、何處迄も疑を深くし、飽く迄其の根據を衝くを要する。去りながら實驗によりて、普通の經驗に基く事實とは全く相反するが如き重要にして且つ確實なる結果を見るに至ることあるも注意せねばならぬ所である。夫の學習の全體的方法に關する實驗の如きは即ちこれである。兩者の結合以上兩對項の連結は或程度迄可能であるかと言ふに、以下の事情を考ふることが出来る。即ち大人にありては、頗る困難な事であるが

被験者の心理状態の三階段

兒童にありては、自然の條件の觀察とさして、擇ぶ所なき迄に、實驗を近接し、うる場合のあるを知ることが出来る。この實驗の場合に於いては、主として次の三階段に區別して考へることが出来る。

(一) 兒童は實驗の目的を知つて居るか、又は少くとも實驗の意義に關して自分だけの考へを持つて居ることを彼の舉動に示せる場合。

(二) 兒童は實驗の目的をも知らねば、又心理學者が企圖せる事項に關し、さして推量をも有たぬ。併し實際これは實驗であつて自分はそれを受けつつあるといふ事を意識せる場合。此れは第一の場合に於けるよりも餘程有利である。何となれば研究者の企圖せる目的が前者の場合に於けるが如く、容易に發見されぬからである。よし兒童が疑を挾んで之に關し質問を提起しても、大人などとは違ひ、容易に否定して惑を解くことが出来る。

(三) 被験者は自己が實驗上の研究の對象であるといふ事を全く氣附かぬ場合。かく全く實驗といふことに付ては、何等意識せないから従つて其れに囚はれるといふ事がなく、實に理想的の場合であるが、これは最初の兒

童期には常に存する状態である。併しその後に至りても猶かゝる状態が妨げられずに持續しうるのである。グロースは五歳から六歳迄の兒童に對し、彼等が簡易なる規則的の圖と不規則的の圖とに就きて如何なる程度迄美的に反應するのであらうか、乃至それが氣に合つたり合はなかつたりする理由としては如何なる事を言ふであらうかといふ事に關して試みた。此際實驗者は單に以下の事を言明するのみであつた。曰く、私は此處に一對の圖をもつて居る。その中で私は自分で一番美しいと思ふ方を上の方に揚げ、さうでないのを下に降す。それが若し正しくなかつたならば、直様申出なさいと。斯様な方法に出づれば、兒童は自分が實驗を受けるといふ様な事に就いては、些の感じもない中に、實驗の目的を達しうるのである。から、以上兩方法の結合に就いて工夫する所に、實驗者の巧拙が見はれる。と言はねばならぬ。

### 第三章 兒童の精神生活の特質

#### 第一節 兒童精神發達の三階段

兒童にありては、經驗界を把捉し、理解し、而して之を内部的に類化し、統合するには、大概以下の三階段を経過することが知られるのである。

(一) 想像的の綜合期。この階段に於ては綜合が主となつて居る。即ち各物體は何れも全體として把捉せられ、且つ亦まさしく全體として命名もされる。然るに之に反し、事物の個々の特質の如きは單に全く不完全なる様にのみ知らるゝのである。尤も偶々個々の状態や特性やが思ひがけなく、靜かに觀察せられる事のないとは限らぬが、併し徹底的なる分解的の觀察は猶全然缺如すると言つて不可がない。かくして僅かに觀察せる特性から、大早計にも事物に對する全體觀やその相互關係やを構成するが常である。言ふ迄もなく、此種の全體觀たるや多くの點に於て當らぬ所が多く、且

想像的の綜合期

つその一部分は全く幻想的にして色々の擬人法や或種の挿入やによりて補はれるのである。これこの精神發達の階段に對して想像的綜合期の名を與へられる所以である。

分解的の觀察期

(二)分解的の觀察期。以上の時期に次げる約八九歳の年輩の兒童で、分解が主となる時期である。この期に至れば事物の各部分やその特性や相互關係やが益々觀察せられて、兒童は事物に對して可なり詳細な知識を得るのである。彼れの知覺せる事は最早想像に馳せたる意義を有せずして、却つて外界を冷靜に觀察するのである。此等の状態を最も能く見はす者は他なし、即ち彼等の使用する言語の意義は、最早前時期に於けるが如く十把一束的に用ひらるゝといふことがなく、寧ろ無數の特性の上に冠せられたものなることを示すのである。

合理的の綜合期

(三)合理的の綜合期。第二期に次いで見はれて來るのは即ちこの合理的の綜合期である。しかもこれは第一期の想像的の綜合期に於けるとは全然異なる性質を有するを知らねばならぬ。即ちこれにありては最早夫の想

像に富める擬人的の綜合といふ風なことは全く減じて、寧ろ一部分には既に第二期に於て得たる事物の特性や特徴やの綜合で、若干の論理的實際的の確實性を以て、合理的に事物の真相を把握せんと努むるのである。兒童の精神生活の此の第三階段の處よりして成人の理性的の世界觀が構成されるに至るのである。上述せる第一階段の時期中にありては、兒童は御伽噺の世界に住むのであるが、此の第三階段の發達期にありては、既に實際感が一般に主となつて居るのである。

兒童の精神發達と適應の法則

更に猶兒童の精神發達上に於て觀過すべからざる興趣に富める一般の傾向があるを知らねばならぬ。何ぞや、即ち兒童の精神裡に最初獲得せられるものは、一切夫の生存競争に取りて必要缺くべからざるものであるといふ事實である。故に兒童の自己保存に對しての機能が重要な度多きもの程最初に見はれ來て、他は漸次之に次ぐといふ有様である。實際兒童に於ける空間的の知識は多くの場合に於て、時間的の知識よりも早く發達するのである。蓋し空間的の事柄に就ては兒童は屢々自分自身で處理す

ることを爲さねば時に危害に瀕することを生じないとも限らぬのであるが、年とか月とかといふ時間的事物になれば、自己の生活を處理してゆくに當り最初は兩親が代つて呉れるので、さして緊急を感じないからである。又事物の形態に關する知識は其の有する色彩の知識よりも早く發達する。前者の知識は事物の再認や使用の際には缺くべからざるものであるが、後者は生活の實際に取りては多く裝飾的の附加物たるの意味を有するところが屢々であるによる。又直線的の廣がりを目測することは距離を測定することよりも早く發達する。觸覺的の性質は音調よりも早く、大なる關節の感受性は小關節よりも以前に知られる。言語を理解することは自然の談話に比して先つて居る。總て以上の事柄は、外部の生活條件に適應するといふ法則の支配を受けて居るといふことで、注目すべき事象である。

第二節 兒童の特質に關する種々の解釋と

これが批評

兒童精神の發達の時期、即ち如何なる精神状態が何時頃見はれるかといふ報告も必要であるが、より重要なるは兒童の精神の特質、別言すれば兒童の精神の發達は之れを大人に比して如何なる特異點を有するかを研究するにある。此等については種々の解答もあるが、就中主要と認めらるる四説を述べ併せてこれが適否に論及せうと思ふ。

第一説 兒童の精神生活は最初大人の有する様な或る作用を全然有つて居ないと主張するものである。

第二説 兒童に於ける精神能力の分布従つて其の複雑なる精神作用の結合は大人のと別様である。即ち大人の精神中に支配して居る多くの機能は兒童にありては退歩して居る。反對に兒童にありて主として見はれて居る多くの機能も大人にありては其後與る所が少ないといふものがある。従つて精神生活の總體としての特質は、兒童に於けると大人に於けるとでは相異なるものがあらねばならぬ。例へば精神生活の總特徴として感情が知的作用よりも主となつて居るとか、類化が知覺よりも優つて居る

とかいふが如きは、之に反したる精神作用の主となつて居る成人とは異つて居ると言はねばならぬといふが如き類である。

第三説 第三の解答としては、意識内容の性質、特に基本的のものに於ては、兒童と大人とでは定型的に差異があるとするものである。

第四説 最後に兒童の精神作用は其の分量乃至強度に於て大人のに比して少ないとする説である。従つて兒童は單に量の上に於ける働きは少いのであるが質の上より見れば、大人のと區別が比較的僅少であるといふのである。

以上の四説に對しては、吾人が先に、兒童精神發達の三階段といふ項目の下に、兒童の一般的發達状態を略述したるものと關係をつけて、之を學校兒童の上に當てはめて攻究することとする。

第一説の批評

第一説に就きて。此の説は決して事實に充當せぬと言はねばならぬ。蓋し吾等大人は學校兒童の所有せない様な精神上の能力を有するといふことを立證することは出来ないからである。學校兒童は七歳頃既に成人

の所有する總ての能力を見はして居るのである。唯々其の能力の多くは發達の程度に於て非常に弱く、且つ不完全であると言ふに過ぎないのである。

併し、此の一説を除いては、他の第二、三、四説は、何れも至當なる解釋であるから、以下各説に就き其の然る所以を明らかにする。

第二説の批評

第二説に就きて。先づ兒童に於ける精神能力の分布は、成人のと違ひ、従つて又精神活動の全性質も大人と頗る趣を異にする點を明らかにする。

吾人は兒童の精神能力の全體を通じて、如何なる所に如上の精神發達の三階段の跡方を見出しうるかを調べて見よう。兒童の感覺的知覺に於ける最初の内は類化觀察の作用が餘程知覺する實物より以上に優勢であるやうに思はれる。即ち兒童の知覺たるや、大人に比すれば著しく主觀的色彩を帯びて居るといふことである。此の兒童の知覺に於ける特質たる主觀性は、彼れが知覺せるものを唯粗笨に大體のみを荒擱みにし、他は大膽なる綜合によりて説明を試みる所に見はれるのである。猶兒童は大人に



比すれば其の過去の經驗を眺めることが多い。且つ彼れの想像に富める觀念は事物の中に自己を没入する。故に彼れが事物を知覺するに際し、自己が知覺せしことと、其れに就いて自分の想像せし事との間の區別が明瞭に立たぬのである。彼れは大人よりも知覺に對しては批評的ではない。此等は兒童の叙述や讀書などに關する實驗の際に、明らかに見ることの出来る諸點である。兒童が若ければ若い程、兒童に於ける此の種主觀的の附加物の爲めに知覺の錯誤は益々増大するのである。而して年を加ふるにつれて、益々其の度が減じて來ることと分る。兎に角知覺が主となつて働いて居る心理作用の實驗に於ては、如何なる種類のものであれ、如上の事實を認めえらるゝ。換言すれば、兒童の知覺に於ては、類化觀念の働きは實に受容せんとする知覺以上に重きを爲して居る。しかも此の類化作用は同時に又著しく無具案的のもので、夫の大人の場合に於て見うるが如く、意欲や、注意や、によりて、猶未だ適當に導かれざるものである。

大人が自己の注意を集注して實際的の觀察に入らうとする態度を取る

際は、絶えず或重要な視點に従ふものである。例へば景物を眺めるにしても何れの山容が此の景色中の主であるとか、或は此景色の描寫的の價値は圖にするにあるか、繪にするにあるかといふ類である。建築について言へば、其の形態は如何釣合は如何、目的の適否如何、用材は如何といふ風に各種の視點の下に觀察することが出来る。總て如上の場合に於て、吾人は或主要なる觀念に従つて之れを觀察する。此の主たる觀念なるものは實に吾人をして具案的の觀察と知覺とを遂ぐるをえしむるのである。兒童の知覺や觀察やには、最初此の如き主たる視點なるものが全然缺けて居る。漸次歩一步と此の視點が見はれるのであるが、しかし他人の範疇に従つて觀察するには、猶未だ適せざるものがある。且つ兒童の發達中の或年齢間には、知覺に對し、主たる定型的の視點乃至範疇が存するものゝ如くである。兒童の知覺の働きと大人との間に存する最も著しい區別は、以下の點に存する。即ち兒童は約十二歳迄は年齢によりて種々の程度こそあれ、客觀的に與へられたるものを總括するといふ能力、即ち與へられたる個々の

ものを總合して全體觀を構成するといふ能力を缺けることである。兒童は部分的の瑣細なことに拘泥し全體に對する總括は、かく瑣細なことを知覺することによりて蔽はれて仕舞ふ。しかし總合が見はれることもあるが實に自由勝手に爲せるもので實際に相應しからぬものである。此の事は任意の複雑なる知覺物にも見はれて來る。六歳頃の兒童は普通繪畫を見るときには、其處に描き見はされたる場面といふことには注意せずして、單に關係のない個々のことをのみ擧げたり書いたりする。之に反し描き見はされたる事とは全く關係のない没交渉な風な任意的のものをば想像もて自在に附加するのである。此等は夫の直觀教授に用ひられる様な込み入つた知覺物體に見はるゝばかりでなく、至つて小さき關係や瑣細の事柄に於ても之を立證することが出来る。例へば各點間の距離を比較して目測の發達に關する實驗をする際に、六七歳頃の兒童は距離なるものを比較することが出来ないことを屢々發見する。これ兒童の目は單に點其のものに固定し各點を見るのみであつて點の總合をなし兩點間を結び付け

て空間的の廣がりとすることを爲さぬからである。しかもこれは點を種種の地位に齎らして、或は水平と或は垂直との距離を比較せしむるといふ風に、特に比較を困難ならしむる事情に置いた結果でもないのである。同様なことは、又兒童が形體を把握する場合にも見はれる。若し茲に一寸複雑なる圖形を兒童の面前に提供せんに、彼れの把握は關係連絡なき個々の上に立てるを知るであらう。兒童の繪畫に於ても又同様なことが言へる。兒童は記憶畫を好むものであるから、學校に於ける圖畫教授に對して特に記憶畫を推奨したいものである。さてかゝる記憶畫に就いて見るも、總括に對する兒童の缺陷は遺憾なく見はれる。描かれたる個々のものを綜合するは甚だ不完全である。即ち兒童の把握は個々の部分に執着し、此等をば他の事物と正當の關係に置くことなしに、卒然として筆を下すのである。故にその畫かれたる物體の大きさの關係等は比較的の釣合を以て見はされない。各物體は兒童の把握せるまゝ、各自の大きさの釣合を以て見はされ立的に立つて居る。瑣細なことに拘はるといふことは以下の如き事の中

にもよく見はれる。即ち煙突を以て家を見はすが如き類である。煙突は彼れに取りては、最も重要なものである。或は石段を有する家、或は鼻のみを有する人等を描く。此等に於ては如上の細かい點のみが把握せられ、其の他の全部面は此の一些事の爲めに存するもの、如く、單に一抔すれば事足りるのである。故に電車や家や寺やの一部をば、相互に何等の關係を保たせることなく、平氣で畫いて居る。

兒童の感覺的知覺に於ける綜合の缺如せる事に或種の並行關係を有するは、又彼れの意志衝動の中にも發見することが出来る。外部的の行爲となる衝動も、兒童にありては最初は個々のものである。大人はこれと異り、殆んど常に全衝動の中に行動する。

兒童に於ける精神能力の分布に於て、差違ある事は、單に把握や類化やの全體の性質を變ぜしむるに止まらず、又此等は、その影響をば、精神生活の知的方面若しくは知的以外の方面にも及ぼすのである。故に例へば、兒童の觀念の作用は、大人のに對して、二つの顯著なる差違を示して居る。蓋し大

人は多く言語に於て思考する。大人の思考は即ち沈黙せる言語である。かゝる事は何時でも、吾人自身で觀察しうる所である。かく吾人は主として言語の形に於て思考するのであるが、兒童はこれに反して寧ろ個々の性質を有する直觀的事物の觀念に於て之を思考するのである。而して言葉に於て考へるといふことは、兒童が若ければ若い程退歩して居る。尤も兒童も又言葉に於て思考することの出来るは實驗によりても證明しうる所であり、それと同時に大人と雖も又直接的な實際觀念に於て考へうるのである。併しながら如上觀念の兩種類の區別は大人と小人とに於ける定型的の相違と言つて宜しい。この結果として觀念の作用の分布に於ても、第二の區別が生じて來る。何となれば大人は多く言語に於て考へるから、兒童よりも多く抽象的に考へねばならぬことになる。蓋し言語なるものは吾人の抽象的の觀念の擔保者であるに由る。吾人の抽象的の思考は主として言語における思考であつて、この際直觀的の觀念の内容は單に僅かに意識に響くに過ぎぬ。之に反し兒童にありては思考は多く具體的觀念

の活動に外ならぬ。併しながら六歳乃至十四歳の兒童は決して抽象作用をなすことが出来ぬとは言はぬ。譬へ屢々抽象的の言語の意味が兒童に分らないことがあるにしても、抽象のよりて起る知識や經驗の範圍やが、彼れに取りては不可解ではないといふことは明らかである。

此の如き兒童の具體主義の結果は、又意志的行爲の上にも見はれる。何となれば兒童は主として個々の觀念に於て思考すると同様に、又主として個々の具體的の目的や動機のために行爲する。之に反し、大人は多く普遍的の決意乃至根本主義の上に立ちて行爲する。

第三説に就きて。兒童の發達を考ふべき第三の解釋としては、意識内容の性質、殊にその基本的のものは兒童にありては大人のと異つて居るといふことである。此事は又一部分學校時代に至る迄も、之を證明することが出来る。吾人は之を感覺的知覺に就いて見るに、夫の外部の刺激を受け受動的の知覺によりて受容せる印象や、感覺や、基本的の空間乃至時間的の印象やについて言へば、此等は何れも兒童にありては大人とは趣を異にし

て居る。就中感覺の性質及強度に對して、之を精緻に區別する事は、兒童は大人よりも少ない。即ち兒童は大人が爲し得るよりも感覺の性質を區別することが少いので、これは感覺的知覺のあらゆる方面に於て、然るを認むるのである。兒童は入學後猶數年間は色調や色の階段や、明るさや、を區別することは大人に劣る。吾人に於て容易に認識しうる或種の色合や、乃至明るさの區別も、氣附かないのである。同様なことは音や律動的の關係を聞かしむる際にも該當する。此等の現象を生ずる意義に至りては固より全く單純ではない。蓋し兒童の感官は鋭敏なる感覺の區別を認識する丈けに充分なる分化を遂げて居らぬから、兒童は大人よりも分化の程度の少い感覺を有するものであると言はれるかも知れぬ。併し又比較や區別やの際に見はれる高尚なる精神活動の精緻さの足りないことや、注意の集注力の不足なることや、知覺せることに關し叙述の熟練に乏しいことや、如上の副的原因を爲すのであらう。此等は又空間的殊に時間的の關係を精緻に把握する場合にも言ひうる。夫の短い時間を直接に知覺することや

乃至長い時間の廣がり把握する事はその發達極めて徐々たるものがある。

第四説の批評

第四説に就きて。吾人は猶一瞥を第四説即ち兒童の發達は大人に比して量的にも、將た質的にも、その働きが少い點に存するといふことの上に投げやうと思ふ。吾人は先づ若き兒童は精神及身體の作用の各方面に亘りて、その機能の度合が大人より少いことを示しうるのである。思ふに小學時代の兒童の爲したる所にして、大人が苟くも之を能くしえざる風の精神的や身體的の活動はあるまい。否中學校の最高の生徒と雖も大人の如き精神的の活動の繼續と強度とは猶達することが出来ぬ。この事は夫の兒童はあらゆる活動に於て大人よりは甚しく疲勞すること、同一の活動に於ても兒童疲勞の程度は兒童が若ければ若い程大であるといふ事實によく見はれる。しかし事柄により大人がより多くの活動をするといふことに對して疑を挟むことが出来るかも知れぬ。例へば器械的の學習に對するが如きである。人は普通言ふ器械的のこと、即ち全く無意義な材料、單語、

年數等に對し、兒童は大人よりも容易に之を學習しうるものである。しかしモキマンなどの實驗によれば、大人にありては單に練習の損失のあることを證しうるのみであることをいふ。蓋し大人は最早や器械的の記憶をさのみ多く利用するを要せぬのである。何となれば此等は一般に論理的の關係を記憶することによりて把握しえらるゝからである。しかし、若し大人にして器械的の學習を練習すれば、學生よりも善き成績を擧げらるのである。即ち器械的の記憶に最も長ずるが如くにみゆる兒童よりも、大人の成績は、五倍乃至六倍事情によりては十倍にも上ることが出来るといふ。

兒童の精神作用が、精神的生活の各方面に於て、大人の下に立つといふことに関しては、幾多の例證もあれど、此等は有り觸れたることであれば、省略する。

### 第三節 兒童の發達に關係ある特殊現象

上述せる所は兒童の精神的の發達をば一般的に討究したのである。而して以下恐らくは兒童の發達と關係あらんと思はるる二三特殊の現象を捉へて、如上の記述を補はうと思ふ。

年間律動の現象  
先づ、兒童の身體及精神上的の働きは、一年の中に於ても、又或動搖を示すといふ現象である。之を稱して年間律動と云ふ。言ふ所は一般に身長及體重は一年内同様ではなくて、規則正しく反覆する律動的の異動を以て進むものであるといふ事である。この年間律動は全然發達の異動であるか否かは未だ明らかではない。併し兒童は大人よりも一層強く年間律動に關係あることは確かであり、従つて吾人は此等一年内の律動をば一部分は發達律動の現象と見做なければならぬ。この年間律動は身體的の方面にも、亦精神方面にも、何れにも之を兒童に觀察することが出来る。併しこの年間律動は、身體發達と精神的發達とに於ては、絶えず並行せずして、却つて一部は全く相反せる方向に走るといふ事は、注目すべきである。それらに關しては次の事實を知るの必要がある。

兒童の身體的生活は秋と冬とに於て向上する。詳言すれば十月より一月迄の間に於ける身體的の機能の發達即ち其の身長と體重とは増加する。それから三月と四月とには退歩が現はれ、再び七月迄増加の時期が来る。この如き年間律動といふ現象は、最初、丁抹の聲、啞教師、マリ、ング、ハンゼンによりて舉證せられた。かゝる事の發見せられた機會は實に偶然であつた。氏の學校の兒童は今迄とは一種異なる新營養状態に入ることゝなつた。而して氏はこの機に於て三年間續けて至七十二人の兒童の體重と身長とを毎日測定して、この新營養状態の効果を明らかにせんことを求めた。氏はこれによりて、兒童の體重と身長とは全年或る律動的の動搖を受けることを發見した。氏はこの現象をば三ヶ年間追求して、さてかゝる時期は同様に反覆するものなることを發見した。氏の測定の結果は次の様に包括することが出来る。兒童の身長は八月の終から十一月の終迄は増加することが最も少い。それから三月の終迄は多少宛は増加する。而して最末期は三月の終から八月の中頃迄にある。故に、兒童は夏期に於て最も伸

張、す、る、こ、と、に、な、る。し、か、し、體、重、は、大、約、身、長、の、發、達、と、反、對、の、現、象、を、呈、す、る。即ち體重は正に秋季八月乃至十一月に最も多く増加すると。ハルレに於ける校醫シユミット、モンナードはハルレに於ける小學校で、右の觀察を遂げたのであるが、それによれば、ハンゼンの研究は其の主點に於て確かめられたのである。しかし氏は年間律動をば二時期に分けて居る。氏は身長増加の時期は二月乃至八月とし、不良期を九月乃至一月とし、體重の停滞期を二月乃至六月とし、増加期を七月乃至一月とする。かく長さや重さの發達の變化をば成長の律動と名づけるのである。この觀察の補全をば、スクイテンはアントワーブに於て、ロブジンはキールに於て、レイマンとペーデルセンはコペンハーゲンに於て、試みたのである。中にもスクイテンとロブジンはこれ等の身長體重兩者の外に、児童の筋力及或二三の精神上の作用を學校時代の間研究を續けたのである。これに依れば、筋力は八月より一月迄は絶えず増加するが、正月より三月迄は減退する。而して又四月より六月に増加し、再び七月より九月迄は減退する。故に筋力の發

達、に、對、し、て、不、利、な、る、月、は、男、兒、に、あ、り、て、は、正、月、と、三、月、と、に、し、て、女、兒、に、あ、り、て、は、三、月、と、四、月、と、で、あ、る。

此外に、又一年間に於ける児童の精神的發達は同様に動搖を受け、この動搖たる一部は頗る身體的の發達と並行してゐるが、しかし一部分は正しく正反對の方面に、走ることを知つたのである。精神作用を試みんがため、スクイテンは児童の注意力の集注を利用し、ロブジンは全年間児童の記憶の測定をなしたのであつた。スクイテンは八歳乃至十歳の男女兒の二群をば一年間通じて毎日午前と午後との授業時の前後五分間宛、兒童の曾て習へる事柄を讀み且つ書かしたためたのである。ロブジンは十歳乃至十四歳の男女兒各四學級に對し、各月の十五日に直接の記憶の實驗を行つた。此れは視覺及聽覺的内容の十の言語が前に話され、學生によりて直ぐ後に之を書き出さしむるのであつた。而して兩人は児童の集注力及記憶力に取り、十月より一月迄は特に有利であつて、兩者はこの時期間絶えず増加するを認めた。正月より三月迄は之に反して集注力と記憶力とは減

退する。故に此時期迄は身體と精神との作用は正に相一致せるを見る。しかし此點よりして兩者は相分離し、心身の發達は正反對の方向を取る。即ち筋力は夏期に増加するのに、記憶力と注意の集注力とは同時に減退する。反言すれば夏の暑さは注意と記憶力とを低下せしむるのに、身體の發達は向上する。身體は精神を不利なる状態に壓迫しつゝ、夏期に發達を遂げる。之を生理學的の言語を以て言へば、人は夏期に於て、筋肉の働きを爲すことは、腦髓の働きを爲すことに優ると。

併し如上の結果は悉く自餘の觀察者の試みと一致したるものではないのである。コペンハーゲンに於けるレイマン及ベデルゼンは大人及十二乃至十三歳の兒童をばエルゴグラフにて、又モキマンはダイナモメートルにて筋力を計り、又無意義の綴を學習せしむることによりて記憶力を調べ、續け様に加法を行はしめてその早さを測定したのであつた。而して同時に氣候や氣壓や日光の化學的影響やを計つたのである。これに依れば、化學的に影響を與ふる光線は筋力を催進し、之に反し熱は個人により相違は

あれど、熱い氣候寒い氣候共に、何れも筋力を妨げるのである。思ふに、この光と熱との兩要素の共働によつて筋力の年間の律動的變化が起るのであらう。加算の進度は光線の強さや氣壓には關係なく、却つて著しく氣候に依從する。即ち沈める天候には速度がまし、晴天は之に反する。記憶の成績も同様に筋力に似て、氣象の關係によりて影響を受ける。

總て如上の實驗に於て注意すべきは、他なし、心身の機能の或種の動搖が事實上、天候状態と密接の關係があるといふ事である。これが主たる因果關係の何たるかは、(一)總て天候以外の出來うる限りの影響を支配しうる迄(二)此等の關係に相應はしい説明を與ふる迄は知ることが出來ぬ。思ふに、此等の現象は二重の意味を有してゐるのであらう。即ち一は兒童の發達と關係を有するといふことである。蓋し未成熟にして成長の途にある身體は大人の如く成熟せる身體に比し、總てこの如き律動的に反覆する外界の影響には鋭敏に反應するのである。他の一は、此等の現象たるや全く人間の身體に於ける勢力の新陳代謝といふ根本的の條件に歸すべきであら



うといふ事である。

## 第四章 兒童個性の四大型

### 第一節 浮生兒の精神生活

浮生兒の特徴

浮生兒の特徴此種の兒童は陽氣であり、浮氣であり、外出好き、遊び好きである。輕快といふ語は其の性情を寫すに最も近きものであらう。

人生は若し尋常の経過を取るものとすれば、心身の素質や能力の生々發展に始まり、それが漸次低減衰凋して遂に死に至るまでの一大圓周を描くものと見られる。肉體上の不斷の變化が、人生の各期に於て著しきものあるが如く、性情も亦同様である。同一人は生時より死するに至るまで、同じて同一の性情例へば浮性に止まることがある。併しながら當人の兒童としての浮性と、青年壯年若しくは老年としての浮性とは、頗る趣を異にするのである。通じて言へば、人生の各時期は、浮性、熱性、鬱性、冷性に、該當する觀がある。之を兒童期に就いて言へば、其見たり、聞いたり、或は感じたりするあ

らゆる事が、其の精神裡には物新らしくして興味がある。故に彼れは愉快に、清新に、現在の瞬間を楽しむ。しかも知覺は早く變化するから、今迄甲の表象情調であつたものが、直ちに乙の表象情調と早變りをする。一言すれば兒童の性情には固より主たる流れが明かに認めうべしとしても、兒童期にありてはその性情の何たるを問はず、常に浮性の色彩を帯びてゐる。即ち熱性の兒童も浮性的熱性であり、冷性の兒童も浮性的冷性であり、鬱性の兒童も浮性的鬱性であるといふことを知らねばならぬ。

浮性兒は非常に興奮性を有して居る。彼れは眼と言はず、口と言はず、手と言はず、足と言はず、常に活動して居る。故に起きるにも、坐するにも、殆んど安靜といふ状態を見出すことは出来ぬ。若し二三分間でも彼れを沈黙せしめやうとしても、不可能に終る場合が多からう。彼れは徐行することとをせないで飛び廻つて居る。他の兒童が走る際には、彼れは駆ける。彼れが笑ふ時は腹筋を燃らせ御臍の宿換をするばかりで、其の全身や手足やは皆此の笑ふといふことを助けて居るものゝ如くである。彼れは又能く泣

概

説

くのであるが、これまた涙滂沱たりといふ様に泣き崩れる。されど若し可笑味のことか眼前にか又は胸中にか閃いたならば、涙は頬を傳つて居るに拘はらず、既に眼許に、口許に、最早包むとして包まれぬ笑の影を漂はせて居る。嘗て一兒童が教師から痛く詰責せられて居る場合に遭遇したことがある。その時彼れは座に堪へぬ程に泣き出したのであるが、突然聲高に洪笑破顔した。何故かと吟味すれば、教師の顔面に墨汁の附いて居るのを發見したに因ることが分つた。此等は浮性兒に有勝ちの事實である。彼れは概して多辯にして、頓才機智に富み、模倣的、技倆に長けて居る。此の如くにして彼れは隨時隨所に愉快を見出して之に耽溺するから、彼れの在る處、即ち必らず春風駘蕩和氣洋洋たるものがある。彼れは級中に於ける滑稽家である。従つて教師の居ない時、教室内で可笑な身振や言語などを弄して同輩を抱腹絶倒せしむるのは、彼れの御手の内の事である。若しかの如くにして同輩を笑の渦中に釣り込めば、彼れの満足此上なしとする所である。夫の寄席や見世物などで見開した事柄を、翌日教師の來ない前、己が同

輩に面白く可笑しく、眞事虚事打ち交せて、嘯々紹介の勞を取るのも彼れである。實に模倣的技倆は彼れに特に恵まれたる賜物であつて、一度目に觸れたもの、耳を拂つたものは、殆んど眞に迫るが如く、眞似るを難しとせぬ。故に此模倣的技倆と輕妙とは、彼れをして其の機會だにあれば同儕間の中心點たらしめる。彼れは樂觀的であつて、恰も胡蝶の花から花へと飛び廻るが如くに、二六時中快樂を追求して止まる所を知らぬ。同じ快樂でも、より強き度合のものを夫から夫へと轉々追ひ廻つて居る。かくて熱中の結果は義務や命令などを全く心裡から忘失することは少しとせぬ。彼れの場合調は決して繼續的不變的ではなく、寧ろ火山質的である。時に依り處に應じ冷熱常なき所から、或は輕浮と言はれ、或は反覆家と目せられることも生じて來る。

知的生活

知的生活、心理的に言へば、此種の兒童は、刺戟に應ずることが弱くして、速

感受性

感受性は甚だ活潑である。殊に女兒に於ては左様である。その小さき

記憶

眼球は四方八方に配られ、所謂「皿眼」を爲して居る。彼れは有らゆるものを見、有らゆるものを聞かねば止まぬ。苟くも多少見るべきもの聞くべきものあれば、何處までも追つて行く。遠近や事情やは敢へて問ふ所ではない。受業中にも其の眼は全教室内に輝いて居る。故に壁上蠅が一つ止つて居る事柄でも、直に注意は奪はれ、窓外に一寸した響きが開えても、一大事でも起りたらんが如く、起つて窓の下に駈けやうとする。此の如く彼れの目や耳やは一切の出來事を聞き漏さざらんとし、見漏さざらんとして居る。しかも所謂「早呑込早合點」で見るとも早く、聞くにも早く、言ふにも早いから、飛んでもない間違ひや見違ひをしたり、馴も及ばぬ事を喋舌べり散したり、餘り急いで用もない處へ飛び込んだりする類の事が少なからぬ。

かく彼れの注意は終始動搖して水の流れの止まざるが如くであるから、印象は至極鮮明を缺き、記憶は従つて淺薄といふことになる。たゞ事柄の滑稽的であり、可笑味を帯びて居る方面のみが比較的他方面よりもよく把握せられ、確實に記憶せられて居るから、再現の際にも至極容易である。併

想 像

しながら教師や両親が認めて重要とし多大の価値を置いて丁寧反覆したる事項に關しては、殆んど何等の手答へもなく、其の記憶の量に於ても、又質に於ても、大に失望の嘆聲を漏すを禁ぜざらしむることが多い。

想像は富瞻にして多方面である。故に出發點を忘れて彷徨歸るを知らぬ様は、天馬空を行くの趣きがある。彼れと對話すれば話題は轉々として殆んど窮る處を知らず、今書物の話をして居るかと思へば、早や遊戯に移り、食事に變るといふ風であるから、假令注意深き觀察者でさへも、この放縱なる想像を捕捉することは困難である。

聯 想

若し觀念聯合の規則を犯すものがあらば、それは正しく此種の児童であらう。談話の最中でも、教授の進行中でも、或は頻りに舉手して發言を求め、或は藪から棒の奇問を發する。しかし許可をえて起立する迄には、自分が何を言はんとして手を挙げたかは早くも忘れて口にする事が出來ぬ。かくまでに彼れの思想の流れは瞬時も活動を止めず、喋々不爛の舌を弄して居る有様は、一見他の児童とは異つて騒然たるものがある。

情 意 生 活  
同 情

情意生活、浮性兒は、一時的の情に制せられて、直ちに意志が動くのである。彼れは環境の満足するのを以て自ら快とする。利己とか我利とかいふ風の事はなく、友達にはその持てる林檎でも玩具でも分け與へ、甚しきに至りては直に必要を感じずるもの迄を割き後悔することさへ少しとせぬ。貧者や薄倖者に對しては厚き同情を有し、時には自己の小さな財布の底を叩いて迄此等不幸の人を恵まうとするのであるが、かかる場合にも、その舉動や態度やに於て若干の滑稽味、可笑味を帯び、自己の快感を買ふ資料にしやうとする形跡が認められる。彼れは美しい繪畫、妙なる音樂に心奪はれ、物を詩的に解することが出来る。言はゞ優しい心根を有し、物の哀を知つて居る。家禽を愛して飼育し、家畜なども睦び合つて嬉戲する。この如く彼れは社交的にして圭角がないから、人にも好まれ氣受けも宜しい。しかし其の同情も悪く言へば婦人の仁であつて合理性のものではない。彼れに對して重厚とか堅實とか、深刻とか、いふ事を期待すれば、案外の思をなす事が多い。

彼れの情は兎角極端から極端に走る傾向がある。故に朝に賞讃して頭上に翳したのも夕には足下に蹂躪して顧みぬ。さりとて翌日は又舊に復する事なきを保せぬ次第である。斯様に賞讃に於ても非難に於ても中庸を保ち公正を持することは彼れの最も難しとする所で、若し美と思つたものは極端に美と感じ、非難する者はあらゆる嘲罵の中に葬り去らうとする。

若し學校廢止といふ事があつたとするならば、就中最も喜ぶものは此種の兒童であらう。彼れは眞善美のあらゆるものに對して感じ易い性質を有して居るが大體から言へば、何れも精深にあらずして皮相であり、透徹にあらずして淺膚である。彼は思考力よりも想像力に訴ふるもの、推理力よりも記憶力を要するもの、眞面目なものよりも可笑味を帯びたるもの、根氣を出すものよりも多少息拔きの出来る様な學科を好むのである。故に唱歌習字、歴史、圖畫等に於ては同輩を壓して優良な成績を擧ぐる事が出来るかも知れぬが、不斷の努力を要する様な事柄に於ては、常に人後に落つる

を免れぬ。

要するに、浮性兒は、輕浮、單純、反覆、放心、耽溺、放縱、饒舌、滑稽化、薄志、弱行等を短所とし、快活、從順、親切、同情、濶達等をその長所とする。

身體的生活、概言すれば、優しくして細い體格、輕快な歩態、花やかな類色、輝ける眼を有し、循環系統の發達良好なるを示して居る。

浮性兒の取扱。一體教師にして人生の春にも比ふべき兒童に對し、何時も威嚴と莊重とを以て臨むとしたならば、恐らく彼等の堪ふる所ではあるまい。別けて鹿爪らしい眞面目さは浮性兒の最も厭忌する所である。元來快活にして無邪氣なる兒童と遊ぶのは愉快なものであるが、特に此種の兒童に對しては事情の許す限り、その地位に身を下して共に遊び親しむことを先とせねばならぬ。しかし、彼れの輕浮なる直ちに圖に乗つて教師も自己も同一視して、厚顏憚る所なく、動もすれば教師の權威をも輕んずるのである。此點に於て教師は適切なる方法を取りだにすれば、兒童の信頼と好愛とを得るのであるが、若しその道を誤れば、教師の權威は動かされる。

管理上

權威が一旦地に墜つれば其他は言ふに及ばぬ。さりとて児童の輕卒と快活とより生じ勝ちな非行に對しては、餘りに嚴峻な措置、冷酷な言語を以て臨んではならぬ。教師自身では充分愛情と親和との眼で見居る積りでも、児童は常住左様取つて呉れるとは限らぬから、教師は出來うる限り、善意を以て児童に接し、決して惡意を以て待つやうなことがあつてはならぬ。

浮性兒を誘惑する引力は彼等の内部に存せずして寧ろその外部にある。環境のあらゆるものは彼れを誘うて、感興を起さしめる。これがため教授に於ては注意の散漫を來すが故に、教育若は管理上に於て非常の勢力を奪はれる。

校舎や教室の位置、室内の装置、別けても窓の位置状態などは教授の効果を擧ぐるが上に輕視すべからざる意味を有つのである。校舎は獨立的に建設せられ、其の地位が他とかけ離れて居れば居るほど、如上の目的に副ふことが出来る。騒々しい街頭や、往來頻繁なる箇所や、汽車電車の沿道やは、一方教師の負擔を重からしめると共に、他方児童の柔き神經を刺激して非

常に有害である。就中最も多く、の損害を享けるものは浮性兒である。故に注意を散漫にする風のものとは出來うる限り、學校及其の環境から撤回するの用意が肝要である。

教室内に於ても児童の視聽を動かすが如きものは、遠ざけねばならぬ。夫のさして害のないと思はれる小鳥を教室の一隅に飼ふことすら、感受性の早い彼れにとりては注意を攪き亂される料となるのである。この意味に於て教室内の彼れの座席は窓外を容易に見通しえざる位置に就かしめねばならぬ。さらば空飛ぶ鳥の一羽でも見餘さじとする彼れを抑止することが出來ぬ。

如何なる教科も出來うる限り具體化して取扱ひ、常に直觀的教辨物と相伴ふことによりて教授の効果を大ならしめることは言を待たぬ。特に此種の児童に對しては單調を避け變化を多からしめるが爲めに、或は繪畫を示し、或は標本を與へて、其の注意の散漫を防止せねばならぬ。教師が黑板畫を能くして臨機に之を利用する技術を有するが如きは、更に一般の妙味

教授上

其 一

共 二

を添ふる所以である。

浮性兒は概して記憶することも早ければ忘るゝことも早いのであるから反覆練習せしむることは彼れに取りて教授上極めて重要なことを忘れてはならぬ。今や實驗教育學に於ても練習の價値の甚大なることを唱導してゐるのであるが、わきて浮性兒には割當すべきことである。出來うべくんば土曜日位は全週の課程の總復習日に充てたいものである。

浮性兒を指導するに際し訓練上特に意を致すべきは彼れの輕浮性を矯めて物事に秩序規律の慣習をえしめることである。彼れは輕々しく快諾を與ふるけれども實行をせない。始めは脱兎の如き勢で事に當れども、克く其の終を全うする事が少ない。未だ一の仕事を手に持つて居るに拘はらず、新なる第二第三の仕事を始めやうとする。若しも愉快の度合がより強ければ着手半ばであるなどのことは更に頓着せない。かゝる場合に於て繼續完了せぬならば、教育者は宜しく正當なる干渉を加へてこれが遂行を期せしめねばならぬ。例へば一課を全く復習し終らざれば他の課に及ば

訓練上

共 一

共 二

しめざる類である。返す／＼も新らしきを追うて仕掛けた仕事を中絶せしむるやうなことを許してはならぬ。

教育上特に語氣を強めて戒めなければならぬ弱點は、彼れの好奇癖である。彼れに取りては不撓の穿鑿を續けることは殆んど不可能のことであり、精思潛心することは其の短とする所である。未だ習ふを要しない何物をも早く知らうとするのであるが、正に學ばねばならぬ事項については毫も喜ばない。長きに亘つて同一事に拘はるといふことなどは、特に彼れの堪へずとする所である。若し新教科でも授けられる際は最も喜んで一時間の輕過の餘りに早いのを啣つのであるが、一週間後は果して如何。『實に詰らない』といふ嘆聲は先づ彼れの唇頭より漏れるのである。故に最初の二時間位は以後の數時間にも増して收得の分量の勝るといふ結果を示すのである。かゝる初物喰の惡傾向は早晚恐るべき威力を以て彼れの身上に報い來るのである。換言すれば好奇心は彼れをして自守自營の念、自信、自重の精神を消磨せしめ、あらゆる事に興味と器用とを有して間には合ふ

其 三

が、何一つこれぞといふ中心點のない表滑りの人たらしめる虞れがある。以前に浮性兒は極端に物を賞讃し若しくは批難するといふことを述べたが此の兩者は共に眞を去るものでやがては虚偽に誘はれ易いのである。實にや彼れは概して此の惡徳に傾き勝ちである。故に彼れの誇張浮華の言葉に對しては教師は熟練なる質問適切なる處理によりて虚偽の惡むべく眞實の好愛すべき所以を了得せしめねばならぬ。虚偽を喜ぶものは又盗みを喜ぶものである。宜なるかな此種の兒童の中には往々にして手癖が惡く且つ家庭に於て「摘み喰」などをするものを發見する。彼れの輕浮性と好奇癖とは彼れを驅りて臺所の隅々迄も善き獲物もがたと探し廻らせる。其處此處で發見せられた獲物は彼れの活躍せる想像力によりて遊戯や歡樂の資に利用せられる。彼れは盗むといふことを希圖するではなく、寧ろ之を以て玩具を得、愉快を追はんとするに急なるの致す所である。所謂目的の爲めに手段を擇ばぬ遣り方が度重なるにつれて、不知不諷の間に彼れを墮落せしめ、遂に救ふべからざる深淵に驅る。指導者は此種の傾

良教育の結果

向ある兒童に對しては嚴重なる監視を怠つてはならぬことは言ふ迄もないが、さりとて峻烈その度を過ぎてはならぬ。況んやかゝる傾向を理由として直ちに盗人呼ばはりをするなどは重々慎むべき事である。彼れは自己の富贍なる想像を實現することはやがて善であると思つて居る。故に吾人は必要なる材料を彼れに供給してこの欲望を或程度迄満足せしめねばならぬ。若し此種荒誕無稽に近き欲望を絶對的に禁止し威歴しやうとしたならば兒童は歪んで偽善に陥る恐れがある。夫の嚴酷な訓練法を取れる家庭に於て屢々外見上柔順な偽善的の兒童を見るのであるが見掛けによらぬ表裡ある行爲をして案外の感に打たしめることがあるに省る所がなければならぬ。

良教育の結果以上の概略によりて取扱の要を盡したのであるが、かゝる用意を以て浮性兒を待つたならば彼れは家庭に於ても學校に於ても愉快にして生々したる兒童らしき兒童である。彼れの言語は特に外國語の修得に長け、その友情は彼れに接する人々をして春風裡にある思あらしむ。



彼れは善美なるものを理解し、憧憬し、最も陶冶性に富んで居る。此上仕事に對する耐忍持久の精神にして養成されるれば、彼れの美德は、又なく世の尊重を受けるであらう。眞面目と快活の精神とは固より並び存することが出来るのであるから、教育法宜しきを得て、この如き有用の材たらしめねばならぬ。

## 第二節 熱性兒の精神生活

概説、此種の兒童は積極的に言へば勝氣消極的に言へば負け嫌の性情を具へて居る。倨傲尊大といふ語は、彼れを顯はすに最も對當せるものであらう。

熱性兒は常に自ら高く止まらうとする。男兒であれば、同輩中に於て自己は一頭地を抜ける君主の如く考へ、女兒にありては他を率ゐる女王の如くに思つて居る。故に彼等が子供扱をされる事は、最も苦痛と感ずる所である。一見しても其の勃發せる英氣は一種の英雄的、豪傑肌の色彩を帯び

て居る事は蔽ふべからざるものがある。彼れは同輩よりも自ら許して勝れて居ると信ずる。而してその步態其の言語その舉動に於て常に異色あるを示して他の注意を惹かうとする。若し彼れが年の割に大きいなど、言はるれば得意満面といふ體たらくである。闘の下に立つ機會でもあれば、爪立ちをしても、自己の身長をより高く見せやうとする。彼れは動もすれば權威に對して頑強に抵抗するを以て得たりとし、かくて與黨を作りて其の頭目たらうとする。懲罰を加へられる際などは、時に暴力を以て反抗的氣勢を示さうとする事すらある。此の意味に於て彼れは教師の苦手であつて終始其の心を痛める資料を供給する。彼れは如何なる痛苦に遭遇しても決して泣かうとはせぬ。涙は彼れに取りて弱者の所爲と思ふのである。故に涙を流すには彼れは餘りに暴慢不敵である。若し彼れが泣く場合ありとするも、それは苦痛から來るのではなくて、残念、無念から來るのである。その傾向は往々狂暴に近く、強情と剛愎とは始末に終へぬ事をする。甚しきに至りては狂犬の如く猛り立て、捨鉢的の事をも敢へてし、威嚇も

恐るるに足らず、生命をさへ輕んずる風がある。兒童を觀察する機會を有する人々には、如上の言辭が決して誇張のものにあらざる事實を首肯するであらう。彼れは自己中心のであつて、己を信ずること極めて篤く、自己の所爲は常に正當であり、公明であると認めて居る。従つて假令悪いことをしても、決して悪いとは言はぬ。却つてあらぬ理窟を構へても、尙正當なる行爲であると、強辯大に力むるのである。思ふにこの種の兒童は偉人、女丈夫の卵である如く、悪くすれば犯罪者や革命者や破廉耻者の前身をなすのである。

知的生活、此種兒童の知的生活に就いて言へば、一般に刺激に應ずることが強くして、且つ早い。

感受性は、浮性兒の如くに多方面ではない。即ち浮性兒の如く多くを見又多くを聞かぬ。かく感受性の範圍に於ては劣るけれども、其の量に於ては優つて居る。故に一旦彼れに見聞せられたるものは浮性兒に於るよりも深い印象を止める。従つて此れに比して強い把持力を有するのである。

知的生活

感受性

想像力

思考力

彼れは浮性兒の如く、荒誕無稽奔放なる想像に耽ることなく、何れかと言へば、實際的の着色を帯びて居るといふ特性がある。

彼れの思考力は、すでに早くも深さと鋭さを示してゐる。自己の力を發展しようとすることに着眼し、皮相的の知識を以て満足せぬといふ風が見える。その小なる敢爲の氣象は彼れをして事物の本質に入らしめようとする。故に教師の一わたりの説明位を以て嫌らずとし、その言の正否に就いて疑を挟み、兎や角と異議を唱へる。若し彼れが教授せられた事項について或種の誤謬を發見するか、又は其質問によりて少くとも一時教師を狼狽の地に陥れることが出来れば、彼れの得意想ふべしである。しかし此種行爲の中には、單に教師を窮地に陥れて何よりの樂みとするのもあれば、又絶えざる勤勉と綿密なる注意とによりて教師の講義を妨止し、その主張を枉げしめようとする動機に出づるものもある。

情意生活、彼れは情の人と云ふよりも、知の人、知の人と言ふよりも、意志の人である。

情意生活

自己を中心とする彼れは同輩に對しても冷酷であり、時に残忍に流れる。自己の氣力が雄邁で、精力が横溢して居る所から、より弱い仲間には同情することが出来ぬ。何だ意氣地なし、骨無し、野郎といふ風に、テンド眼中に置かぬ。仲間が十里の道を歩んだと言へば、其位はなんだ、自分は十五里も歩けると出る類である。殊に禽獸等に對しては頗る残忍なる仕打ちをする。この點は彼れが浮性兒に一籌を輸する所である。彼れの手中は多くの場合に於て木片、小石の類を放さぬ。而して途上に遭遇する鳥でも、犬でも、猫でも、見當り次第無事には彼れの眼前を通過せしめぬ。試みにかれの袂を搜れば、大方二三の小石を發見せぬことはなからう。

若しかれが書物を好まないならば、全くこれを手にしようとはせぬ。しかしまた好むとなれば、非常に愛讀して爲めに寢食を忘れる位、根本的に了得しようとする。別ても激怒と復讐の念と愛憎の情とは強烈である。これ彼れの尊大にして名譽心の強い所から來るのである。所謂一飯の恩も必らず報い、睚眦の怨も必らず酬ゆるといふは彼れの如きをいふのであら

う。

彼れは體力旺盛にして精悍の氣に満ち、常に敢爲と冒險と機敏とを以て得意とし、同輩に絶えずその強みを感じしめようとする。彼れは同輩の中で最も恐れられ、最も賞讃せられる好闘家である。常に弱い者、苛めをして此等を威壓しつゝ配下とし、或種の權威を手中に收めようとするのである。故に級中の平和を好む者は御無理、御尤もとして彼れに逆らはぬ。彼れは如何なる難苦に遇つても、涙一つ落さぬといふ種の事の中に自己の名譽を見出さうとする。夫の往々教師に對して反抗的態度を示すのも、此種名譽心に媚びるの致す所である。

決斷は甚だ早く、電光石火、直ちに行爲となる。拳を握つたかと思つ間に、早くも他の頭上に加はり、其間殆んど髪を容れぬ。此點において夫の生粹な江戸兒氣質に類するものがある。且つ意志力は頗る強く、一旦手に握つたものは破れようが、裂けようが、放さうとはせぬ。轉んだならば、土でも掴んで起さるのである。

大膽を過ぎて、狂暴に至るのも彼れである。如何なる障礙も彼れを恐れしむるに足らず、困難が加はれば加はる程彼れの勇氣は倍加して来る。如何なる木も彼れには高からず、如何なる溝も彼れには深くない。彼れは何物をも恐れぬ。否若し恐れるにしても、少くとも之を口にせない。此種性情の女兒は本來男兒に適する様な遊戯に興味を有し、或は木馬に跨り、或は兵隊遊をする。夫の近時婦人解放とか女子參政權の運動とかに熱中して狂奔する女子は蓋し此種性情の男性的女子であらう。要するに彼れは勇敢、決斷、敏捷等大なる活力を要する様な事柄に多大の興味を有し、満身の精力を傾倒する。

遊戯の際に彼れを観察すれば、著しく異彩を放つことが知られる。遊戯中此種兒童の舉措を仔細に観察することは、わけて感興を惹くのである。彼れは熱烈に遊ぶのであるが、常に自己を以て中心的のものとし、他兒童に對して總指揮官の位置に立たうとする。彼れは遊戯に於ける立法者であると同時に、又執行官である。若し意の如く俄鬼大將たる地位に立つこと

が出来ぬとすれば、寧ろ全く自己を此渦中から退かしめ、惡意をふくむ嘲笑を浴せ、猛烈なる罵詈を逞うし、極力妨害に力め、他兒童をして遊戯の樂を享けざらしめようとする。

上述せる所を一括すれば、熱性兒は一方に於て、剛、復、尊、大、僭、越、冷、酷、殘、忍、不從順、狂、暴、野心、自己本位等の短所を包藏するが、他方に於て、公明、男子的、深刻、剛健、不吝、統轄の才等の長所を具へて居る。

生理的に言へば、肝臟の發達の良い兒童である。小さきは小さきなりに引き締りたる筋肉、表出に富みて一癢あるべき面魂、爛々として燃ゆるが如き眼光、確乎たる舉動、力ある歩態をなしてゐるのである。

熱性兒の取扱として以下の如きは、教育者の特に意を致すべきものであらう。

教育者と雖も、兒童の性情を全然根柢から改造するは不可能のことである。寧ろ性情の存する所に随つて處理せねばならぬ。それで一面性情の缺陷を緩和するとともに、反面其長所は益々助長し開展するや、個別的に

指導するのは、教育者の重大なる任務である。先きに浮性兒の取扱に就きては第一義として兒童と親和すべしと要求したのであるが、熱性兒に對しては一層眞面目にして且つ權威あるを必要とする。別言すれば教育者は彼れから畏敬せらるゝ事が肝要である。此ためには教師は知力に於ても情意に於ても彼れとの間隔の大であることを感知せしめなければならぬ。夫の知識の量も少なく且つ應用的の才能のない人は決して此種兒童の教育的指導を有効ならしめることが出来ぬ。若しかゝる人がその衝に當れば、日として苦しい經驗を味ふことになる。特に教育者の意志力は極めて堅實で、其の命令は充分透徹せられ、其の言語は明瞭にして、前後矛盾する所があつてはならぬ。訓誨を與へ戒飾を加ふる際なども沈着にして言辭は極めて簡潔でなければならぬ。彼れの大膽にして謀叛氣に富める教師の刺戟的興奮的の心的状態の下、顯はし勝ちなる缺陷を見出し、これに乗ずることに長じて居るのである。嘗て一教師が此種兒童の非行に對し激越せる口調もて喋々誨告を加へたる末、彼れの所感はと尋ねると當人は一向平

氣なもので、反つて教師の揚足を取りにかゝつたことを目撃した。教師はその折これに對する答辯を豫期せなかつたため、非常に狼狽して全級兒童の失笑を招いたのであつた。

かくては此種兒童の心を動かすに足らざるのみならず、他兒童に對しても教師の威嚴は一朝にして地に墮つることゝなるから戒めねばならぬ。

此種兒童の取扱に關し、訓練上特に注意すべき事項を列擧すれば、先づ成るべく世話干渉を差控へよといふことである。夫の英國、ラグビーの學校に於て、トーマス、アーノルドは總て信を根柢として、薰化の實を擧げ、以て今日の英國の紳士氣質を建設するに力あつたといふことは、教育史上有名な事實であるが、概して兒童を信賴してかゝるのは好ましい成績を收むる所以である。特に此種の兒童に對しては放任に亘らざるかぎり、その人を信じて或種の責務と仕事をあたへ、彼れ自身の手をして其成果を收めしめるやうに仕向けるのは、一面自治自重の念を養ふ最良の方法であると共に、他面全精力を傾倒して愉快に活動する動機を促す所以である。之に反し

とやあらんかくやあらんと疑念を夾んで彼れを迎へたり、些細の點まで肘を掣したりしては、偶々彼れの反感を挑發し、益々惡傾向に驅るのみで、到底失敗の教育たるを免れぬ。

固より悪い意味の名譽心は飽くまで禁壓し、苟くもこれを是認し若しくは默許するやうなことのあつてはならぬのみならず、時にのぞんで之が戒飭を愆らざらんことを期すべきであるが、さりとて適當の機會を逸して善い意味の名譽心までその發露を妨げようとするのは、兒童心理上極めて不自然な措置であつて、所謂若年寄を養成する所以である。此意味において彼れの成績を公衆の面前に於て發表せしむるとか、賞詞を與へて激勵するとか、共同事務を處理せしむるとか、いふ類のことは、彼れの衷心欣喜し満足する所で、またこれを階段としてより高き路をたどる新たなる力を得しむるのである。故に、慧眼なる教育者は、彼れの名譽を追求する念を利用するのであるが、反面あまりにこれを刺戟して、所謂野心満々たる俗物の素地を作らぬやう警戒を加へねばならぬ。この邊の呼吸乃至手心は教育者の實

名譽心の利  
用

際的技倆に待たねばならぬ所で、到底文字言語の明らかにせられぬ所である。

同情心の扶  
植

彼れは知識も比較的正確であり、意志の力も頗る強いのであるが、たゞ情的方面に於て冷酷、殘忍、酷薄等の缺陷が潜んで居る。長上同輩に對する關係に於て、隨所此等惡徳の閃きを認むるのであるが、殊に家庭の僕婢などを遇する有様と言つたら、殆んど小暴君の如き態度を以て臨むのである。故に特に温かなる家庭の空氣によりて、彼れの病所に同情の流れを注ぎ、長い年月の力を藉りて、不知不識の間之が涵養を期せねばならぬ。最も自然の感情教育所たる家庭にして、不幸圓滿なる關係を缺き、冷たい空氣の漲ることもあらんか、互に因となり果となつて、彼れの短所は益々助長せられるのみで、假令學校の腐心努力を以てするも、矯正の期は恐らく永久に見ることが出来ぬであらう。

熱性兒はその暗黒面たる倨傲、冷酷等の惡傾向にして、矯められたらば、此處に局面は一變して、彼れは亦道徳上に於ても偉大なる人格となること

良教育の結  
果

が出来る。彼れは人々の福利を増進せんがために善を爲し、眞價を認めて學習にも努力する。彼れの一旦口にしたることは如何なることがあつても之を食まぬ。彼れは亦自己の信念を維持し、且つ之を貫徹するに於て極めて忠實なる態度を取る。故に世を傾けて、彼れは嘲罵の矢面に立つとも、その勇氣は決して彼れを沮喪せしめない。その享ける抵抗は如何に悍猛であつても、彼れは泣言一つ出さず、益々彼れを激勵する動機となるのみである。故に平時にありては社會有用の材となり、非常時にありては英雄の資を有する。此の如く、教育法宜しきをえて彼れを玉成せしめたならば、一世の視聽を奪ふやうな偉人、烈婦となり、人類の發展、福祉に貢獻するやうな大運命を荷ふ人たる可能性を具ふるに至るであらう。

### 第三節 鬱性兒の精神生活

鬱性兒の特徴、何時も牙えない、澁面して居る、神經性の眞面目な兒童である。一言以て蔽へば、陰氣であつて、浮性兒の如く、外出や人の附合などを嫌

ひ、愚痴と取越、苦勞とは、その性格を通ずる特色をなして居る。

彼れは顔面に晴々とした生々たる所がないと同じく、何時も晴々しない考を持つて居る。世の中には愉快悦樂といふ者が少く、不快にして嫌らしい事が多いと思ふ。故に本來の意味に於ける兒童といふ名稱を冠らせるには餘りに相應しからぬ。彼れは終日其早熟せる顔を振りうごかしつゝ、見たり聞いたりするあらゆる者を考へては、小さき胸を痛めて居る。言葉數も自然少なく、高高度で否とか應とかいふ類の極く手短かな挨拶を、しかも氣兼ねするらしき態度で發するが常である。思ふに彼れと正反對の地位に立つものは例の浮性兒である。即ちこれは快活無邪氣であるが彼れは陰鬱遠慮勝ちである。之は世事萬端は諧謔であるとおもふのであるが、彼れは一切の事物を極端に眞面目なものと考へる。これは萬象を薔薇色なせる輝きの眼で眺むるのであるが、彼れは一種黒色の凄味を以て見るのである。此の如くにして彼れは常に猛烈なる防禦戦線中の人として立ち、武裝的態度を取つて居る。即ち外圍に對して警戒をさく／＼怠らず、終始自己

の安全や、名譽や、小なる所有物や、身體やに危害を與へはしまいかといふ視  
 點から眺めるのである。彼の人は自分に對して如何なる事を思つて居る  
 かといふ風の事をば、絶えず探求し、思索する。彼れは、人が心を許して眞に  
 己を愛して呉れるといふ事を考へる事が出来ないのである。故に成るべ  
 く他人との接觸をさけて孤立しながら、之を邪推し、批難し、あらゆるものを  
 罵倒する。共同遊戯の仲間入をして衆と共に樂むといふことには氣乗りが  
 せず、友人も亦不景氣なる彼れの加入を望まない。かくて仲間外れをし、又  
 されつゝ、自己固有の道を歩まうとする。従つて彼れは人の精神に觸れて  
 引きつけられるとか、肝膽相照らし、意氣相投ずるとかいふ事は稀である。  
 彼れの冷かにして排他的なる自己の兄弟と雖も、猜忌と不機嫌との眼を以  
 て迎へる。若し他處から賁物の分配を受けた際などは、先づ異様の視線を  
 兄弟の分け前の上に注ぐのである。かゝること稍、暫くしてはじめて自分  
 のものを觀察する。これその數の多少や量の大小やを自己のと比較して  
 價値の優劣を批判せんが爲めである。他人に物を呉れて喜ばうとするや

うな事は、彼れにとりては非常の難事である。止むを得ず、梨子を兩分せな  
 ければならぬ機會に遭遇せんか、正しくその手にする小刀は果物の頭部に  
 於て正中線に加へられるのであるが、下部に行くに隨つて方向變換をする。  
 而してそのより大なる一半は誰れの手に落ちるか、豫想しえらるゝので  
 ある。彼れは、打算的の念極めて鋭く、その知覺する何物であれ、先づ自己と  
 如何なる關係に立つかを見る。詳言すれば彼れは自己に快であるか、不快  
 であるか、利であるか、不利であるか、好意があるか、敵意を持つかといふこと  
 を考へる。この方面に關しては彼れは迅速にして犀利なる知覺を持つて  
 居る。而して此種の見地から物事の評價を爲し去らうとするかたむきが  
 ある。

彼れは、情の人に、あらず、又意志の人に、あらず、寧ろ、知の方面に優れて居  
 る。心理的に言へば、刺戟に應ずることが遅くして強い。

彼れの感受性は遅緩ではあるが、其ものの根柢を掴む。彼れの目は見る  
 所は少ないが、見るものはジロリと凝視する。彼れの聞く所は多くないが、

知的生活

感受性



記 憶

聞くことは耳をすまして傾聴する。故に印象は頗る深刻なるものがある。印象が深刻であるから、一旦精神裡に根を下せば、深く強く把持して失はない。殊に感情の記憶に至りては恐るべきものがある。例へば人から一寸した詰責を受けたとするに、先方では何時の昔に忘却して頓と意識に残して居らぬにも拘はらず、當人はながく念頭に存し、思ひも寄らぬ所に其鋒を露はし來りて、江戸の敵を長崎で討つといふ類のことをする。故に此種の兒童に怨まれたが最後、その鬱結せる感情を釋然たらしむるは容易の業ではない。

思 考 力

思考力は静かではあるが、深く終日同一事に就いて好んで思索し、探索する。彼れは多種多様に想像を運らすといふものよりは、寧ろ非常に眞面目に精思する類のものに興味を捧げて従事する。一般に歌舞や音曲やの派手なことを避けて、それよりは室内に立て籠つて齷齪と計算なりしようとする。故に、詩人藝術家などよりも、哲學者、數學者向きである。古來此種の側から詩人を輩出した例は比較的少いが、哲學者、數學者、天文學者には類例

思想の色彩

が多い。是同一の思想をながく省察し、續けて穿鑿する特性の然らしめる所である。夫のアリストテレスの如きはこの色彩を帶べる代表的の天才と言つて善からう。此種の性質が如何程健態の精神生活に浸潤せるかは、兒童に就いては一寸透徹せぬ所もあるが、成人するに従うて益々輪廓が明瞭となり、觀察を容易ならしむるのである。

疑心と不信任との結果、彼れは常に惴々焉として安からざるものがある。若し人が笑へば己の事を言ふではあるまいかと思ふ。若し人が賞讃すれば、彼れは己を愚弄し、翻弄するのではないかと思ふ。若し人が狂々しく笑談でも言ひ掛くれば、自分を苦める積りだと思ふ。極言すればあらゆる親切も、友情も、彼れには一の反語としか取られぬ。彼れは容易に笑はぬのであるが、若し偶々笑ふとしても一種の苦笑であつて、不安なる微動が仄かに唇頭に浮ぶに過ぎぬ。洪然破顔坏といふ事は彼れには到底期待することの出來ぬ藝當である。

情 意 生 活

彼れは感情に支配せられることが少ないから、従つて、熱烈、光焰、の高潮を

見ず、又斷乎たる鐵石の意志力もないから、從つて乾坤一擲の壯圖も期し難い。多くは孤獨にして引込思案の人である。去りながら堅實にして一點操守する所があるから、獨善家、潔癖家、精進修行の高僧などは、此種性情の所産である。

社交性

社交は彼れの短とする所である。同感する場合があるにしても、他人のさも樂しげに行樂を恣にする群などには入るを好まぬ。かゝる様を見ては何が樂しいか片々たる輕薄兒奴と冷眼視する。併し何れかと言へば他人の苦痛に對しては同情する。かゝる風だから學友同輩中にも友人は少なく、進んで友達をも求めず、又遊戯にも加はらず、強ひて勧めらるれば、やる事もあるが、かゝる際にも自己意識を失ふとは稀である。若し友人が彼の室内に入れば、先だつものは疑心である。故に友人が彼れの玩具や書物やに手を觸るれば、或は取つて行きはしまいかと氣遣ふ。喇叭の一端を友人が握れば、他端には自分の手を着けて、彼の注意を他に向けようと苦心する。かくて心安からず、只管友人が一物を齎らさずして室外に立ち去らんこと

激情

を祈つて居る。懷中常に心の鍵を離さぬから、兄弟に對してすら、人知れず、氣を兼ねるのである。言はば哀むべき兒童である。

内心の不平燃え立つ斗りであつても、彼れは外面和平を裝うて居る。激怒しても勃發することは稀である。此の如く容易に喜怒を顔色に見はさぬのであるが、一旦見はさんか、恐るべき事も爲し兼ねぬ。浮性兒は口では死ぬ／＼と言つても能う死に切らぬ子供であるが、彼れは黙つて居て死ぬ事をも敢へてする。彼れは堪へずして切齒しつゝ、突然家を飛び出すことがある。この時は恐らく再び家に歸らじとの考を持つか、但しは少くとも晩方まで身を隠して兩親などに搜索せしめて、心配させようと心掛くるからである。彼れの計畫がマンマと圖に中り果して兩親等が大騒ぎでもすれば、仕済ましたりと彼れは横手を拍つて満足するのであらう。大體子供といふものは何かブツ／＼小言を言ふもので、多少憂鬱的性質を帯びて居るのである。中にも此種の兒童は有力な手段に訴へて滿々たる不平を漏らさうとするのであるが、さりとて適當なものを見出すことが出來ぬ。そ

こで家を逃げ出すとか、表に居て入口の戸をガタ／＼叩くとか、自分の無力を證するやうな手段、言はゞ意地の悪い女性的のことをする。若しこれが思ふ坪に當り、所謂負けて勝つたと信ずる頃に至つて、始めて罵倒し壯語する様は、犬の逃げ吠えに類する。此等を仔細に觀察することは頗る興味のあるものである。

此種の兒童は頗る執念深く、我意と怨恨と嫉妬との結果、終日食はず、終日語らぬ位の執拗さを示すことが往々ある。此際彼れは父母等が優しい言葉掛けてなだめて呉れるのを衷心期待して居る。故に教師や両親の方から折れて出づれば、彼れの満足此上なしである。ヘルツァヒ氏はこれに就き面白い一例を擧げて居る。即ち氏の知人で今は立派な紳士となつて居るウ・ヘルムといふ人の幼時の回想談である。彼れが父から痛く叱責せられたので、例の鬱性兒の本性を見はし、最う一生食はず談るまいと決心した。第一日目彼れは兄弟と共に食卓に呼ばれたけれども行かず、食はず、語らずの裡に過した。第二日目も同様であつた。第三日目は左様は行か

執意

身體的生活

鬱性兒の取扱

ず、生理的の要求に驅られて食堂に連なつたのである。然るに父母兄弟は昨日も一昨日も加はりつゝあつたと同様な態度で少しも隔てなく取扱つたのみならず、父母には哀願的の様子さへ見えるので、心中甚だ得々として、勝利を得たる感があつたと。此性癖が嵩ずれば、鬱憂病其他精神上の疾患を來すことがあるから、取扱上注意せねばならぬ。

上述せる所を一括すれば、一方には憂鬱、不機嫌、猜疑、批難、好臆、病的、孤立的、婦女子的消沈、因循、不活潑、不實行等、他方には、精思、眞面目、堅實、操守、獨立、忍耐、沈深、寡黙等がその長所短所となる。

生理的に言へば、神経系統の發達の良い兒童である。多く細長にして瘠せたる體軀、うなだれし首、蒼白なる皮膚の色、鈍くして光澤なき眼光、徐々であるが確乎たる歩態、靜脈血の多いこと等は其顯はれである。

一體教育者が此種兒童の心を牽きつけて之を動かすやうになれないのは、教育上の恨事と言はねばならぬ。彼れは教育者を以て自己を苛める者、自己の生活を苦しむるやうな面倒な仕事を課する者位な考を持つて居る。

故に教師の言などに何等感謝の念を持たないのは遺憾千萬である。若し教師が彼れに親しまうとすれば欺くのであると思ふ。彼れに接近すれば五月蠅い煩はしいことをすると思ふ。さりとて彼れを遠ざくれば益々其間疎隔して感化を及ぼす事は出来ぬ。彼れが教育者を喜んで迎へぬといふ事も慥かではあるが、かゝる事情から教育者も亦喜んで彼れを見ぬといふことも稀ならぬ事實である。この障壁を打破するのが教育の第一着手であつて、又至難な點である。

教育者の態度

故に教育者は何よりも愛の眼を以て臨むといふこと取り別けて大切である。教師は根氣負けをせず、彼れをして彼れの爲めにする以外何等夾む所がないといふことを充分鋭く意識せしめねばならぬ。元來児童の爲めに教育者があるので、教育者の爲めに児童があるのではないといふ思想は教育者の心得の重なるものである。その委託せられたる児童が富んで居ようが貧しからうが精神上優れて居ようが、身體上故障があらうが、それ等には頓着なく、以上の根本思想から教師の活動は生起せなければならぬ。

指導上の主眼點

これは如何なる時代にも、亦如何なる場所にも、該當することであるが、就中此種児童の取扱に於ては教育者の用意を新にする必要がある。

教師は彼れに對して温き同情を有つといふことが、取扱上の主要なる動機でなければならぬ。此種児童の常として懷疑の念深く、普通に考へたならば、取るに足らぬと思はるゝやうな事についてすら種々疑を持つて居るから、此等の質疑に對しては、左様な事は詰らぬと一言の下に却けるやうな事なく、親切に之を取り上げて、彼れの納得する迄、諄々指導すべきである。従つて彼れに掛り合つて愚弄する様な語氣や態度はゆめ／＼示してはならぬ。かゝる事があらば、彼れに對する教師の信任は全く地に墜ちて、之を恢復することは容易でない。

時間の活用

活動の爲めに時間を用ひ、しむること、が肝要である。彼れは爲すことななくして床中に横はるとか、手を懷ろにして樹下に佇立するとか、運動場の隅に潜んで居るとかして、とかく其陰鬱な思索に耽るを樂しむ癖があるから、教育者は彼れの手を取りて運動するなり、或種の仕事を與へるなりして、彼

れを活動せしめ、沈思に没頭する餘地なからしむるやうに仕向けねばならぬ。同じ遊戯でも、此種兒童には精神を使ふものよりも、主として肉體を活動せしむるものを取るがよい。

友人の選擇

友人としては、出來うべく、多血性兒と接觸せしむるやうにするに、若くはない。無邪氣なる快活は、眞面目の學校の仕事に於ても、決して矛盾するところはないのであるから、浮性兒と相配すれば、自然長短相補ひ、彼れは潑刺たる活氣を得るに至るであらう。就中好ましきは固執する癖を他に轉向せんがために、旅行日曜遠足等を獎勵することである。

教誨上の注意

心すべきは彼れを訓誨し又は責罰を加ふる際の用意である。此等は成るべく別室に於て膝と膝と相接する所、物柔かに行ひ、決して公衆の面前に於てしてはならぬ。若し這般の用意にして缺くる所あらんか、彼れは長へに教師を怨んで、其心裡に交渉することを不可能とならしめる虞がある。

良教育の結果

以上の教育法が着々其の効果を收め得た、とすれば如何であらう。彼れは孤獨と獨善主義とが他日恐るべき害惡の報を齎すべきを知り、無氣力

概説

と退嬰とは彼れを進展せしむる途ではないことを認め、漸次良好な傾向を取らざるであらう。長じて後、彼れは時好に投じて、虚名を博しようとする風な、軽浮な點はなく、品性高潔にして、意志堅實、別けても其精緻にして、透徹せる識見は、思想界の先覺者として珍とせられ、社會上有力な地歩を占むる人物をも、此種兒童中から輩出するのであらう。

#### 第四節 冷性兒の精神生活

冷淡にして、粘液に富める兒童である。恰好なる措辭を求めたならば、吞氣とか、無神經とかを當つべきものであらう。彼れは容易に物事に周章狼狽しない。四周の事情に對しては極めて冷淡である。従つて何事にもさう熱中することもなければ、又刺戟興奮せられる事もない。彼れと正反對の性情を有するものは熱性兒である。活力とか活動とかいふ類のことは、彼れの殆んど與り知らざる所である。その理想とする所は、安靜であり、無爲である。何等の要求を持つてもなければ、心配もなく、特殊の愉快を追求

するやうなことをすらない。彼れはブラ／＼と手を拱きながら、上下を見まはしつゝ、茫然として立ち留るのであるが、さりとて特に觀察し注意するためでもない。彼れは如何なる時に於ても、又如何なる場合に於ても、常に綽綽たる餘裕を存し、胸中閑日月ありといふ體たらくである。無頓着なる彼れは如何なるものにも満足する。自分に利であらうが、又害であらうが、美服であらうが、垢衣であらうが、一向御構ひなしである。彼れの書物は室中此處彼處に取り亂されて居る。何れの書物を眺めても、墨汁點々でなければ引き裂かれたり、亂雑に書き入れられたりして居て、殆んど満足なものはない。若し清潔とか整頓とかに就いて注意を與へても、笑ひながら「その様なことは如何様でも善い」と言はんばかりの顔附で取り合はうともせぬ。浮性兒は樂觀主義といふべく、熱性兒は精力主義といふべく、鬱性兒は悲觀主義とも言ふべく、沈むでもないが、何れかといへば、矢張り陰氣である。さりとて鬱性兒の如く心ありての陰氣ではなく、唯何とはなしに愚圖／＼して

意氣更に揚らぬのである。故に無主義とも言へよう。強ひて主義を標榜させる必要があれば、事勿れ主義に屬すると見て、差支へがなからう。彼れにはホットリとした温い情の流れがなく、其生活は如何にも無味乾燥にして散文的である。彼れの精神的な生活は遅緩といふ語に盡きて居る。

彼れは刺戟に應ずることが遅くして、且つ弱い兒童である。

感受性は極めて狹隘である。彼れの目は開いて居るけれども、何物をも見ず、彼れの耳は明いて居るけれども、其實何物をもきかぬ。何等彼れの感興を惹くに足るものはなく、總ての事が彼れには無頓着である。新奇と思はれるものですら刺戟とはならぬのである。

判断力判断力は遅くして、冷靜であるが、比較的的確である。是喜憂によつて、さしてその心を動かさるゝことの少なきに因るのである。

彼れの感情生活は喜ぶことにつけ、悲しむべきことにつけ、感動すること、が弱い。他の兒童が小躍りして喜ぶ如き際にも、彼れは高々で笑ふに過ぎぬ。他の同情や哀傷に心を奪はれる場合にも、彼れは猶全く平生の態度を

知的生活

感受性

判断力

情意生活

失はない。その乾燥無味にして散文的なる、面憎き程落付拂つて冷靜なる、これを最も鮮明に表現するは、觀劇の際などに於ける彼れの舉動や感想である。夫の忠臣藏の如き人心を鼓舞せしむるに足る時代物を名優が演じ其の一舉一動一言一句何れとして満場の觀客の感情を翻弄せぬはなく、或は泣かしめ、或は笑はしめ、宛ら醉へるが如き際に於て、彼れは果して如何なる態度をなすであらうか。無雜作に而かも平氣な顔付きでキョロ／＼俳優や觀客をとさまかうさま見較べて居る。能くも斯様に冷靜にありうる事よと、試みに彼れの感想を叩いたとすれば、恐らく次の如き答へを得るであらう。即ち第一演ぜられる事は何等自分に取りては無關係なること第二實際の事ではなく眞似事なること、第三然るに泣いたり笑つたりする觀客の氣が知れぬと。此の如き冷靜枯淡なる思考は彼れをして激越狂熱の判斷に陥らしむるを防止するの効はあるが、反面彼れの意志力を必要の緊張に齎らし、生氣あり、氣概ある行爲をなさしむることが出來ぬ。

彼れは師長から嚴しい譴責や感動すべき訓誨を受けても、熱性兒の如く

對他的關係

口答へをしたり、又は傲岸不平の態度を見はすことは至つて稀である。いとも從順に受けて居るから、對者をしてさながらに看過するの餘儀なきに至らしむるの徳をもつて居る。従つて師長も彼れに對して激怒し之を懲らしめようとする考は餘り起らぬ。さればとて其の訓誡責罰が如何程迄有効であつたかと言へば、結果は後日に於て歴然案外の感起さしむる場合が多い。友人關係に就いて見るも、進んで仲間を求めずともなく、さりとして敢て避けもせず、友人も亦彼れを疎外するやうな事は爲さぬ。蓋し彼れは至極平和な好人物であるからである。即ち彼れは同輩に特殊の要求をもなさず、何等の不平や小言をも竝べることが少ないから、彼れの存在は一向同輩の負擔とはならぬのである。悪く云へば枯木も山の賑はひ位に考へられて居る。

名譽心とか競争心とかは彼れにおいて最も缺如せる所のものである。級中の上席は何れも他の同輩の占むべきものであつて、自分は當然席末を汚すものと極め込んで居る。夫の遊戯に於ても、同輩は色々派手な役割を

名譽心

欲  
望

勤め意氣大に揚るのであるが彼れは一雜兵とか馬丁とか最も不景氣にしてミジメの仕事割り當てられる。それにも拘はらず唯々諾々として曾て抗議などを申込まぬ所に彼れの特色が窺はれる。

安逸を求め無爲を希ふは彼れの特性である。されば遊戯なども烈しい活力を要し額に汗する風なものに加入せんよりは寧ろ退いて木蔭に坐し無心に傍觀の地位にでも立てたなら彼れの最も満足する所である。何事であれ安靜を追求する彼れの思想と調和せないうやうな奮闘努力を要求するものは避けようとする。若し彼れをして志す所を率直に語らしめたならば、冬季には暖爐の下、夏季には綠蔭の邊、氣心の合つた仲間と悠々たる散步や、苦しからぬ遊戯をなす事や、充分なる睡眠や、美食やを擧げるであらう。彼れは特に強き飲食慾を有してゐるが、これとても彼れの遅緩と同情心の缺如とを語るのである。例へば家人が團樂して食卓に就く場合などにも、最も遅れて來り、最も遅れて去るのは彼れであるのでも察することが出来る。

上述せる如く、殆んど何物を以てするも彼れを興奮刺戟することが出来ぬから、従つて彼れの情意生活を通じて熾烈と犠牲的精神とを以て事に臨むやうなことは期待せられぬ。否當然爲さなければならぬ責務も、成るべく之を回避するか、若しくは最少限度に止むるかして心身上の平靜を求むるの念が切である。他人の危険や傷心の様を目撃しても感情が湧かず、無頓著である。これ彼れの天性に出づるのであると言へば解釋は附くが、この點に於て彼れは、氣概あり熱情ある人の靈感を買ふ所以である。何れかと言へば、彼れは何事にも後塵を拜して附隨することは出来るが、進んで世の爲め人の爲め魁をなし、乾坤一擲の壯圖を遂ぐるが如きは能くし難い性情である。

便安、怠惰、無氣力、冷淨、無性、等の短所を擧げ得られると共に、冷靜、沈着、平和、從順、寛弘、慎重、恒心、大度、等は、彼れの長所とする所である。

生理的には消化系統の發達の良い兒童である。引き締らざる弛緩の筋肉多量なる粘液、肥滿せる脂肪、表情なき顔面、重苦しげなる歩態は彼れに見

身體的方面



る處である。

教育上特に主要なるものを擧ぐるに止める。要求上の手加減は頗る必要で彼れに對しては別けて多大なる要求を提供してはならぬ。若し左様したならば彼れは堪へ切れずして、全く意氣を沮喪する許りである。仕事は部分的に分割して與へ、しかも着手幾何ならずしてその成績が見えることの出来るやうにするが宜しい。反言すれば全系列の中から一部分づつ抽出し來りて彼れに與へ、各部分部分の間には少休憩を設けてやる工夫が肝要である。かくすれば彼れは新なる部分に入る毎に、新なる氣分を以て事に當ることが出来ると共に、遲緩にして便安を求める彼れの心理作用に適合し、終始好調子を持続し、嫌惡の情を起さぬこととなる。

如何なる機會も教育的指導といふ眼光から之を捉へて事に當り物に觸れ啓發すべきは固よりであるが此種の兒童に對しては特に耐久持續の念を扶植するに腐心せねば充分効果を擧げ難い。此意味において彼れの指導者は、又非常の忍耐力を要するので、あつて事を氣長に考へ功を急ぐこと

冷性兒の取扱

捉ふべき機會

があつてはならぬ。教師は他の兒童の場合に於けるが如く、毎週若しくは毎日に學業進歩の迹を見て一種言ふべからざる快感を覺ゆるやうな事は彼れに對しては期し難い所である。若し他の兒童が一日で爲しおぼせたことを彼れに一週間掛つて一段落を告げたならば、教師は彼れに衷心満足の意を表さなければならぬ。尤も彼れと雖も時に才幹ある事を示す場合のないとも限らぬが、一般的に言へば斯様なことは極めて稀である。しかし彼れが緩やかな心裡に遅くとも一旦受容したるものについては永く其の精神的貯蓄となる點は頼母しい所がある。故に教師は年月の問題といふ風に考へて彼れの心田を開拓すべきである。次に指導上に於ける他の困難點は彼れの熱情の缺乏せることである。多くの兒童は賞讃、威嚇、約足、賤し等の手段によつて興奮するのであるが、彼れに對しては殆んど無力である。彼れはさりとて名譽心もなければ、責罰をも感じが少ないから、教師は此意味に於て二重の忍耐を要することとなる。

教材の提供方法

彼れに對しては教材を單に論理的系統を追つて授けるといふことは、無

効に終る場合が多いことを知らねばならぬ。先決問題として彼れは如何なる點如何なる事項に於て若干の興味を感ずるかといふことを調査し、之を出發點として相當の方法を案出し提供すべきである。

時間の善用

今日の學校に於ける多種多様の要求に副ひ、その實績を擧げんがためには、勢ひ休日や休憩時を最少限に制限するを餘儀なくせられるのである。爲めに過重なる負擔は児童の心身上に極めて危険なる影響を及すことに就きては、所謂疲勞問題として、近時醫家や實驗教育者側から盛んに提唱せらるゝ所である。これは大に傾聴し戒心すべき所であるが、冷性兒に取りては此等を餘りに神經過敏に考へてはならぬ。小人閑居して不善をなす譬へに漏れず、閑散無爲は概して惡徳に誘ふ機會を與へるから、彼れには出來る丈け其の能力と境遇とに相應する仕事を課し、時間の善用に於て遺算なからしむるやうにするが宜い。彼れは何の譯もなく無爲安靜を追求するのであるから、此種自然の惡傾向に對し、絶えず何等かの仕事に従はしめ、徒爾に時間を空費せざる習性を養ふは、彼れの意志教育上最も留意すべき

訓誨

良教育の結  
果

所である。

冷性兒に對する訓誨の言辭は成るべく物柔かに泌みくゝと與へるのを善しとするは上に述べたる如くであるが、冷性兒に對してはこれと趣を異にし、言々力あり句々骨を刺す底の強き調子を以て腦裡に浸徹するやうに出づるが宜しい。

教師は此種の冷性兒に對する教育法につき、幾多人知れぬ苦心を重ね、他兒童に比し幾倍の努力を拂つても、猶自己の教育力の無力なるを歎ぜずには居られぬことがある。唯彼れを導いて自己の最上最善とする所を盡さうとする自覺の境地に到らしめたる時、その勞は酬いられたりとして、自ら慰めなければならぬ。このごとくにして、彼れは好學の念、實行の意志、力をえたならば、社會關係に於ても、彼れの天賦に相應する地位に立ち、忠實その義務を盡す人となることが出来るであらう。古來運根鈍の三者を成効の要素と數へるが、彼れの鈍味にして大に發揮せられんか、海濶の量、鷹揚の風、天晴寛弘の長者有徳の大人として、一世の景慕推重する所となり、恐るべ

き、將來を爲すに至るであらう。

### 第五節 個性觀察の機會

性別の差違

個性を觀察して、劃然その異同を甄別することは、容易な業ではない。これを性別上から眺むれば、概して男子は女子に於けるよりも、はやく其性情の何たるかを知ることが出来る。實に女性の觀察は不幸にも頗る困難を感ぜしめる。これ女子は既に四五歳頃から、女性に特有なる或る虚飾を加へようとする傾向がほの見ゆるに因る。即ち彼れは當座限りの場繕ひをし、力めて自家の天真を赤裸々に露はすまいとする。内部にはさうとは思はぬ事でも、外面には知らざる爲ねして表裏ある見はれが多い。故に細心なる觀察を加ふるでなければ、往々にして誤れる判斷に導かしめることが少なからぬ。

機會の適否

男女兒共、彼等の全活動が非常に興味ある事物に集中して居る時は、最も觀察するに好都合の事情にあるものと言はねばならぬ。此意味において、遊戲などは最も適當なるものであつて、鋭い觀察眼を具へない人でも、遊戲の場合を幾回となく注意して居れば、誰れが冷性兒か、浮性兒かといふ大體の見當は附くものである。之に反し、兒童が他から觀察せられて居るといふやうな自意識が見はれて居る際などは、その程度に應じて、觀察の價值を輕重することを知らねばならぬ。

身體上の特徴

四性兒の各節中に説ける身體上の見はれは、又觀察者をして彼れが何れの性情に屬するかを假定せしむるに、相當役立つ者であるから看過してはならぬ。

同一の視點

此兒童は冷性か、鬱性かを一層確實に知らんとするには、彼等を同一事情の下に立たしめ、この際如何なる舉措を爲すかを見るに若くはない。此ことに關し、西洋の或哲學者は、次の場合を假想した。此處に四性を代表するに足る四人の兒童を睡眠中搔きさらつて、囊中に入れ、夜間密かに、とある森林中に齎らし、其處で囊の口を開けたとする。この時この際、四兒童は如何なる舉動に出づるか、を想像せんに、熱性兒は囊中から出るや否や、形相を變

へ拳を握り固めて、拐帶者に討つて掛り、血を見るまで決闘を續けることであらう。又浮性兒は同様逸早く囊外に突進し、最初こそ拳を固めて虚勢をも張れ、それはほんの一時の附元氣で、何時の間にもやら氣勢は抜け、終には韋駄天の如く其場を逃れ、一步も遠く逃げ延びようとする。鬱性兒は危険の身に逼つたことを感じ、恐怖の有様はそのただならぬ顔色にもしるく、おづおづと囊中を匍匐して出る。かくて注意深く四方を見廻はし、最も安全と考へる方向へ抜き足差し足這ふが如くに逃れる。冷性兒は最も後れて囊中から脱出する。不安と不快とは彼れをして敵手に討つて掛らんず氣合も出さしむるが、漸次元の冷静に立ち歸り、徐ろに道を求めようとする。さりとて夜は暗し、道は不案内なり、詮方なく、再び元の囊中に這入りて熟睡し、旭日が東天に懸る頃ほひになつて目覺むるであらうと。

上述せる注意に基き、以下の恰好なる視點機會の下に、性情の異同を比較し、對照しようと思ふ。

表現的關係

先づ表現的關係につき、彼等の異なる所を觀察しよう。浮性兒は實際自

時間的事務

己の内部に有するものよりも、より擴大せられ、より誇張せられて、現實に顯はれる。冷性兒は之に反し、事實己に存するものよりも少くなつて表現する。熱性兒は自己に存するものを悉く現出するのみならず、自己に存せぬもの迄包容し統合してそれ等以上に表現しようとする。鬱性兒はこれに關し、曖昧な態度を有し、物の中間を歩むが如き觀がある。彼れは自己に現存するものをさながら表現するでもなければ、自己に存せざるものの中に確實に這入るでもない。要言すれば、浮性兒の表現はあまりに理想的であり、冷性兒はあまりに現實的であり、熱性兒は現實的にして又理想的であり、鬱性兒は現實的にもあらず、理想的にもあらず、惴々焉として兩者の中間に浮ぶ。即ち坐らうか走らうかと思つて、何れもようせぬ兒童である。

更に、四性を時に對する、異なる事情に就いて觀察しよう。普通言ふ所によれば、老人は單に過去の中に生活する。彼等は常に青年時代を美化し、自分の若い時とは冒頭して、回想談を始める。かくて同じい過去を今日も物語り、又明日も繰返して居る。青年は希望の光彩を以つて飾られた將來の

中に住む。然るに兒童は單に現在に生き、彼れに取りては過去もなければ、未來もないと。之は果して眞であらうか。この言をば單に老人は全くてはなくとも特に過去に住み、青年は全くてなくとも特に將來に住み、又兒童は全くてなくとも特に現在に住むものであるとの主張とすれば、その通りで當を得たるものである。如何なる兒童も大抵は現在の中に住むとはいへ、浮性兒は好んで將來の中に住み、想像の翼を伸ばして黄金世界を夢みる。熱性兒の足は大部分は現在といふ根柢の上に立つのであるが、又希望の輝く將來に其手をひろげて居る。冷性兒は全くその瞬間瞬間に自己を置くのみで、未來については恐怖もなく、又希望をも持たぬ。鬱性兒は又未來に就いて考へるのであるが、併し未來は自分に快を齎らすか、はた不快を齎らすかを知らぬ。故に未來は彼れに取りて希望すべきか、すべからざるか、分らぬので、取越苦勞をする。過去につきては何れの性情の兒童も、さしたる別はなく、特に思を運ぶことは少ない。

感情の記憶

次に感情上の異なる見はれに就き、四性兒を比較しよう。浮性兒は快樂

を追求して始終その中に没頭し、且つこれに満足する。熱性兒は快樂を追求するの念深きものがあるが、さりとてこれに満足せぬ。鬱性兒は殆んど快樂といふものを認めぬ。冷性兒は快樂を要しない。若し彼れは苦痛を受けるやうなことをしなければ、幸福とする。即ち單に氣分が善く、何か缺乏して苦しいといふやうな感情さへなくば、彼れの願望成就である。

更に苦痛に對する關係上から、四性兒をそれ／＼観察したならば、さらに其異同が明らかとなるであらう。苦痛に對する記憶は愉快に對するものよりも早く忘失するものであるとは、通常よく人の言ふ所である。これ又大體に於て眞理であつて、特に熱性兒と冷性兒との場合には當てはまる。しかし鬱性兒に就いては、この言は眞でないことが知られる。彼れに對する苛酷な取扱は何時迄も消えない印象となつて荷はれる。直接何等の結果影響がないとしても、このため長い年間に亘つて毛嫌ひをする。故に一度酷しく彼れに責罰を加へたやうな教師が再び彼れの愛と信頼とを恢復する迄は容易でない。熱性兒も苦痛に對し比較的善い記憶を持つて居る

が、しかし鬱性兒のそれとは趣を異にし、自己がかゝる困難苦痛を受けても、千挫不屈の勇氣で抵抗し、壓倒し去つたといふ風に、過去の誇りとして忘失せないのである。この如く異なる性情の兒童をば同様な過失の下に、同様な責罰を課したりとせんに、浮性兒は之を受けて酷しく泣くが又直ぐ笑を浮べ、少時にして苦痛の印象は跡方もなく消散する。冷性兒は責罰中大なる感激をも示さねば、又餘響が長くもない。鬱性兒は上述せる如く後々まで之を忘れぬ。熱性兒は責罰を別段恐れもせず、寧ろ其際自分が反抗的態度を取つて教師を苦しめたことや、一向平氣で居たことや得意として忘れぬ。教師が冷靜に且つ細心に考へなければならぬことは加罰の手心である。

美に對する憧憬の情は、人心の自然に發するもので、誰れであれ幼時すでにその萌芽は認められる。繪本を好むのも、人形を愛するのも、草花を摘み取るのも、いづれか此情の發露でないものはない。さりながらその好愛の程度は千差萬別、わきても、音樂歌舞といふ方面に於ては、四性の相違較々顯

趣  
味

著なるものがあるから、それに就いて述べよう。浮性兒は天性音樂と歌曲とを好む。故に、歌詞を唱ふるか口笛を吹くかして仕事もするといふ次第である。熱性兒は歌も歌ひ口笛、芝笛などもこのんで吹きは吹くが、其程度に於て、浮性兒のやうに甚しくはない。鬱性兒は批評的であるから、自分の聲が異様で笑はれはしまいかと遠慮勝ちになり、全く歌はうとはしない。冷性兒は好むともなく、さりとて厭ひもせず、氣に向いた時か又は止むをえぬときかは歌ふ。聲樂や器樂やにつきても、熱性兒は多く其天才あるを示すが、好愛、傾向、享樂の上からいふも、浮性兒には一籌を輸する。此種兒童中驚くべき熟練で、芝笛を吹き、尺八や笛を弄び、其技の妙に入れるものあるを見る時、彼等に牧童などをさせるより、藝術家として立たせるならばと思はしむることがある。此際なほ一言して置くのは、多くの浮性の人には律動的の柔い音聲を有し、殆んどすべてのテノリストは此種の人から出るに反し、バスやバリトンの妙手は熱性の人より出ることが多い傾きがあることである。冷性兒は假令音樂的素質を有して居ても、彼れの怠慢なる、これを

熟達せしめようとは心掛けぬ。鬱性兒は良い聲も持たず、その歌も誤りが多し。

公會席上の  
舉措

儀式、學藝會、其他の集會の場合、公衆環視の中に立ち、或種の事を演じ、などする際に、其舉動によつて、その性情の如何を推知することは、頗る興味あることである。一體大人にでも公衆の視線を集めるやうな地位に立つときは、例へ恐怖といふまでのことではなくとも、少くとも一種不安か鞏直かの感を惹起するものである。まして兒童のことであるから、人怖をしたり、狼狽したりする。浮性兒は最初耳も頬も紅を潮して燃えん許りになる。其周章の最も明らかに見はるゝ所は手の措き所である。極り悪る相に帽子を或は右の手に或は左の手に持ちかへ、或は頭を手で抓き、或は袂を始終なぶつて之を紛らさうとする。しかしそれもほんの瞬間であつて、やがて落付きが取れると、今度は反對に、如何にも無遠慮な仕打をする。熱性兒はかゝる際にも己を忘れるといふ事はなく、自己の一舉一動につき明瞭な自覺をもつ風が見える。かくて少くとも、自己を狼狽の見苦しい様から免れ

共同遊戯

しめようとする。若しそれが意の如くにならぬ時は、大に焦つのである。冷性兒は最も落付き拂つたもので、善く形容すれば、神色自若、悪く言へば、盲蛇に恐ぢず」といふ觀がある。鬱性兒は俯目勝になり、如何にも小心翼翼、戦々競々として、極めて内氣の様子を見はすのである。

共同遊戯は兒童の創作力、活力、秩序、協同、堅忍、進取、名譽心、機敏、勇氣等の如何を最も自然の状態に於て見はすものであるから、教育上逸すべからざる觀察の機會たることは、先に述べた通りである。

共同遊戯に於ては、如何なる兒童も、自己の性情相應の役割を勤める。浮性兒は愉快なる滑稽家の役を爲し、熱性兒は遊戯の豫定や規約や實行の監督やをし、鬱性兒は自己の思はしからざる位置にあることを悶へて、不平顔をする。冷性兒は他の兒童の希望のまゝに加はり、或は除外せらるゝ。併し何れの場合たるを問はず、常に其地位に甘んじて働くのである。

浮性兒は自己の愉快悦樂の分量を増大せんがために、友達を求め、彼れに取りては如何なる滑稽も、さほどに滑稽には感ぜぬ。如何なる愉快も

さほどに愉快とは思はれぬのである。熱性兒は仲間の交際といふことをさ程の必要と感じては居らぬ。蓋し彼れは獨立獨行他に依らずして立ちうるからである。それにも拘はらず友達を求めるのは自己の長所を發揮して同輩の賞讃を博する機會を作らうとするからである。鬱性兒は他人との接觸を必要とは感ずるがまたそれによりて損害を蒙りはしまいかといふことを心配する。彼れは友達が無ければ無いとして之を求め有れば有るとして之を避けるといふ妙な風がある。冷性兒に至つては有るも可無きも可その與へらるゝがまゝに處して不足を言はぬ。以上觀察の機會の重なるものにつきて述べたのであるがなほ偶發的の機に際會して彼らの性情を示す場合も少からぬ。たとへば今一珍事出來したりとせばこれを全生徒中に逸早く告げ知らすのは浮性兒である。直ちにこれに對する相當の處置法を取つて寸刻も休まないのは熱性兒である。とやあらんかくやあらんと批評的立場を取るのには鬱性兒である。而して冷性兒に至りては與り知らざる態度を取るであらう。

偶發的の機會

四大個性の  
内的價值

最後に以上四性の内的價值に就きては何れが最も優れて居るであらうか。換言すれば吾人は四者の何れを選ぶべきかといふ疑問が湧くことであらう。しかしそれに對しては單に何れの性情にも長所あると共に短所があるかと答ふるの外はない。若し之を善用すれば皆有用の材たることが出来ることが弊所に伸びたならば何れも取るに足らぬ。要は長所の發揮如何に存することと思ふ。夫の幕末憂國の志士橋本左内先生が十六歳の時書かれた啓發錄といふ書物の中擇交友といふ條下に記して曰く「さて益友の見立方は其人(1)剛正毅直なるか(2)溫良篤實なるか(3)豪壯英果なるか(4)俊邁明亮なるか(5)濶達大度なるかの五つに出でず」と。思ふに先生は人の性情の粹はこの五者に盡きて居るとせられたのであらう。而してこの五者を同一人で悉く具へざる以上いまだ此等に割當する五人の代表的人物を拉し來つて甲乙を判定せよと言はれても何れも弟たり難く兄たりがたく、其何れを取つて他を捨てるといふ譯のものではない。さてこの五者は偶然にも上述せる四性の代表的特質であるといふことは奇とすべきことで先



生の警眼と卓識とは單にこの點より見ても敬服に堪へない。即ち温良篤實は冷性、豪壯英果は熱性、濶達大度は浮性、剛正毅直と俊邁明亮とは鬱性の長所が各別に遺憾なく發揮せられたものと見做すのは決して牽強附會の解釋ではあるまいと信ずる。

### 第六節 指導者の個性

指導者たる兩親、教育者も亦個性を有して居る。而してその有する個性は、児童に對して良好有害兩面の影響をあたふること勿論である。此場合に於ても指導者の個性の片的なることは、學校に於ても又家庭に於ても憂ふべく且つ危険なるものであることを疾呼せなければならぬ。即浮性の人は浮性的に、熱性の人は熱性的に教育しようとする。一體個性といふものは必要に應じて或は之を收め、或は之を放つといふ類のものとは異なつて居る。即個性は家庭に於ても學校に於ても公生活に於ても私生活に於ても、隨時隨所に隨伴して吾人のあらゆる行爲、不行爲の上に紛ふべく

自己個性研究の必要

人生各期性情の特色

兒童期性情の特色

もあらゆる痕跡を留める。兒童の個性を認めて之に應ずる正當なる取扱をなすことが指導者の任務であるとすれば、又自己の個性の何たるかを知つて、兒童取扱の上に參考にするのは又重要缺くべからざることである。前節迄に兒童の個性に關して言及したるものゝ多くは、同様に又指導者の個性の上にも充て嵌るのであるから、茲にはそれ以外の事につき二三の注意を喚起するに止めようと思ふ。

人生は若し尋常の経過を取るものとすれば、心身の素質や能力の生々發展に始まり、それが漸次低減衰凋して遂に死に至る迄の一大圓周を畫くものと見られる。特に肉體上の不斷の變移が各人生期に於て著しきものがある如く、個性も亦左様である。同一人は生時より死去に至るまで通じて純一の浮性に止まる事がある。併しながら、彼れの兒童としての浮性と、青年壯年若しくは老年としての浮性とは頗る趣が異なるのである。人生の各期は、浮性、熱性、鬱性、冷性に該當する觀がある。各兒童期にありては、その見たり聞いたり或は感じたりするあらゆることが、其精神裡に物新らしくし

て興味がある。故に彼れは愉快に、清新に、現在の瞬間を楽しむ。しかも知覚は早く變化するから、今迄甲の表象情調であつたものが直ちに乙の表象情調となる。一言すれば、兒童の性情には固より主たる流れが明かに認めらるべしとしても、常に浮性の色彩を帯びて居る。熱性の兒童も浮性的熱性であり、冷性兒も浮性的冷性である。

約十四歳と共に兒童は新なる生活期即青年期約廿五歳迄に入る。此期に於ては、兒童に見たる如き浮性的の傾向は漸次減退し始める。而して將來に關する考が、漸く青年子女の頭腦を支配するやうになる。彼れの富麗なる想像力は非常の遠距離から愉快なる將來の中を覗き込む。即想像は彼に理想を與へ、之を實現するやうに努力せしめる。略言すれば、青年の性情は浮性的熱性となる。重ねて言へば、この生活期に於ては、純一なる一片の性情ですら、なほ浮性的熱性の着色を呈する。而して此期の指導者は、その性情の必然から、兒童の知的道德的教育に對し、責任を負はねばならぬやうな過誤や誤解やを招くことは全く避けることが出來ぬやうに起つて

青年期性情  
の特色

來る。此期に立つ兩親や教育者は非常に腐心努力しても、なほ人生の眞味を理解し、且つ兒童を教育の眞義に到達せしめることは難い。かゝるがためには、猶久しき間人生に於て試練を受けねばならぬ。見よ、年若き兩親は好んでその兒童を慰み物扱することを。若し面白い可笑しき事を兒童がすれば満足する。しかも此際兒童を惡傾向に驅るやうな事は看過する。畢竟其兒を取扱ふに人を以てせずして、一種の御雛様視する所に、危險が潜む。従つて彼等の教育は殆んど演劇的である。華美とか壯麗とかが、不知不識の間彼等教育の目的となる。夫の惣領の甚六といふ社會上の事實は、多く青年期の兩親の教育の結果に歸することが出來るであらう。此期の教師は、職務を執るに忠實ではあるが、その任務事業をば未だ全範圍に於て捕捉し、通觀することが出來ぬ。従つて教育上の諸問題を愉快に、敏速に、且つ遊戯的に、處理するけれども、斯様に單純な考の下に成れるものは、年月の経過するにつれて誤れるを發見するは日常遭遇する事實である。

廿五歳以後約五十歳頃までを包容する壯年期は心身の完成期である。

壯年期性情  
の特色

男子も女子も人生に於て確乎たる地歩を占め人生の責務要求をば、全精力を以て解決しようとする。今や青年期の理想憧憬の夢は破られて、眞面目なる理性の方面が優位を占め、人生に對する考は一層正當になり、實際的になる。彼等は職業上に於ては、勤勞し、製作し、行爲上に於ては、他の動かす所とならず、斷乎として、主義主張を貫く風がある。略言すれば、此期の性情は熱性である。普通壯年期の兩親や教育者の手に成れる教育の成績は最も安全であり、確實である。彼等は御雛様を教育せずして人を教育する。全力を注いで自己の目ざす所に向ひ、眞一文字に駆け付けようとする。しかし危険も亦此所に存し、彼等の兒童に對する要求が過大であり、時に冷酷と思はるゝ仕打を以て兒童を鞭撻しようとする。

五十五歳以後の時期を含める、晩年、即老年期は普通鬱性的冷性の傾向を帯びて來る。學校教育、家庭教育を指導するに足る能力機能は急速の退歩と衰弱とを來すのである。即ち肉體力は衰へ、感官の作用や、記憶や、想像や、指導者として缺くことの出來ない精神力もその強さと範圍とを退減し始

老年期性情  
の特色

める。思考力の範圍も狭くなり、外部に向ふ活動力も弛緩し、精神は多く自己の内部に集注し、道德的宗教的の感情が主としてあらはれ、其眼を現實世界以上の境地に向ける様になる。即此期の性情は眞面目にして、嚴肅なる鬱性的の色調を帯び、來り、青年時代の滿々たる活氣、活力は最早認めがたく、感情の熾烈意志の剛健も失せ、たゞ身體の衰へたといふ感情と一種悲痛の豫感とは、その行爲を畏縮せしめ、臆病ならしめる。晩年、即老年期は教育上多くの危険を含んで居る。固より老人は經驗に於て遙に青年を凌駕し、個々の場合に於ては青年や壯年の表範たり、時には此等を忸怩たらしむる如き活力を發揮することすらないとも限らぬ。夫の生涯身を學校教育に委ねて雪を戴く老教育者中には、その豊富なる經驗と長年月の從事とによりて年齢が必然結果せしめるやうな缺陷から免れ、光焰を擧げ氣を吐くものもある。しかし此等は到底普通の事ではない。老人は時代の要求するやうな新傾向などに對しては、理解と同情とを缺き勝ちである。彼等は自分で極め込める教育の系統中に籠城し、當代の人は如何なる試みを爲し、つゝあ

るかには頓着なく、只管に自己の黄金時代視する微臭き當年のことを賞讃して措かず、萬事に之に近寄らうとする。焉ぞ知らん、彼この間には大なる溝壑が生じて、殆んど隔世の感があることを。彼等は又兒童の生々したる舉動や快活の態度や、最早兒童の自然性に基くものとして、は考へることを忘れ、兒童としては到底爲すことの出来ぬ否なすことを欲せないやうの眞面目さを要求し、兒童の言行は一々氣に入らずしてこれを批難し譴責する。この結果、兒童の信頼と好愛とをうる事少きにつれ、益々この缺陥に陥る。又老年の後半期に見はるゝ冷性的傾向によりて、他の缺陥、即兒童の實際不良不善なることを全く不問に附するといふ過度の寛容に陥る。老いたる兩親は動もすれば、兒童の如何なる希望に對しても寛大であり、最早これを壓服すべき力を内に持たぬ。即彼等の教育は優柔の系統をなす。故に夫の最年少の兒童教育は、惣領の甚六に比するも、なほ一層悪いといふ現象を生ずるに至るのであらう。

以上人生各期が性情の上に及ぼす着色を述べたのであるが、此等は各個

兩親の性情

人性情の根柢に觸るゝものではなくて、單に共通的色彩に過ぎぬ。故に兒童としても、青年としても、壯年としても、又老年としても、浮性はやはり浮性であり、冷性は矢張り冷性である。指導者は各年齢期に於て變改あることを知らざるわけにはゆかぬが、それ以上に自己に固有なるもの、その本來的なるものは何であるかにつき、犀利なる眼光を有せねばならぬ。

浮性の兩親は、假令如何なる年齢期に屬するにしても、其子弟をば思考生活に於て、輕快に育てる。行爲は愉快であり、言語は饒舌にして、色々の物識りとする。ことはその教育の所期する所である。根柢的の知識は自分等のことでもなければ、又兒童の事でもない。その特色とする所は、一見目に映ずる様な外形的、表面的、浮華的な所にある。

熱性の兩親は、非常なる教育の熱心家で、根本的の知識と、合理的の行爲とを要求する。自分の兒童は、その地位年齢の兒童中第一流の地歩を占めて、勢力と名譽とをえしめようとする。名譽心に富み且つ活動的であることは、其教育の特異點である。

浮性の兩親

熱性の兩親

靜性の兩親

靜性の兩親は、自己の兒童が未だ其時期に到達せぬにもかかはらず、非常に子供らしからぬ眞面目さを要求する。かくて憂鬱にして詩的でない自分と等しく、懷疑の眼を以て世を見ようとする早熟的人を作るのである。その特色は自己中心で悲觀主義である。これは第一に親子の關係に見られて來ることである。

冷性の兩親

冷性の兩親は萬事に無頓着なるが如く、又兒女の教育に就きても同様である。彼は何物をもその欲するがまゝに繁茂生長せしめようとする園丁にも類する。其特色は無主義といふにあらう。

教育者の性情

教師の性情は教育教授の際、兩親に比すれば更に大なる影響を與へるとも言へる。蓋し兩親の教育は同様に自己の兒童の教育に關係を有する兩人即父と母とによつて營まれる。故に一は他の補充者となり、緩和者となる。従つて兩親の教育に對する共同的の働きは、片片的の性情となつては見はれずして、少くとも二性の配和の結果と見るべきである。兩親が全く同様の性情の方向を有することは極めて稀である。假令所謂似た者夫婦

浮性の教育者

があるとしても、それが異性であることは著しき意味がある。即兩人が同じ浮性であるとするも、一は男性的の浮性であり、他は女性的の浮性である。然るに教育に於ては、一が他を補ひ、他が一を制するといふ風の特徴を有たぬ。彼れは學校内に於て全く自己の判斷傾向に従つて行動する。故にその性情が片片的であつた場合には、善い方面も悪い方面もいと顯著に兒童の上に反影する。

浮性の教師は學校に於て幾多の長所を示す。彼れは爽快なる精神と、清新なる元氣とを以て職を執る。彼れは愉快に教育し、感化しようとする。無邪氣にして快活なる兒童に取巻かれるといふ事は、彼れの大なる愉快とする所である。彼れの言語機關は流暢にして且つ爽やかなる響を有つて居る。彼れは理解も早ければ喜んで服従もする。單調といふことは其關知せざる所で、彼れの講義や教授やは活潑にして機智に富み、温か味を有して他を己と共に運び去る。その感官の作用も敏速にして、包容する所が多い。彼れの目や耳やは學校の隅々まで行き届いて居る。これは教授上訓練上

大に役立つ方面の特徴である。それと、共に又、惡しき側面を有する。彼れは巧に且つ流暢に話すが故に、餘り圖に乗り過ぎて得意になる。生徒をして語らせるよりは、自分一人で語り立てる教師は、即この種の人にある。彼れは鋭い目と精緻なる聴覺とを有するから、彼れは總ての物の注意を要求し、もし兒童が一寸して騒ぐことでもあれば甚だ氣にする。かくて突然教室にて未曾有の靜肅を要求し、爲めに口喧しく、批難し、嘲罵し、理由を喋々する。しかも兒童から交ぜ返してもさるれば、彼れは俄かに悄氣けて來る。爲めに教職を厭忌する情が動いて、頻に同僚に訴へる。併しかゝる苦情も速に忘失し、翌日は相變らずの元氣と愉快とで再び壇上の人となり、昨日と同様な態度を繰返すのである。此性情の人は、失敗や損害によりて、左様滅多には利巧とはならぬ。彼れの好機嫌の舉動、身まわり、仕こなしの愉快なること、服装に凝ることなどは、外觀人を引きつけて快適を覺えしめる。さりながら、ともすれば、教職にある人には如何と思はるゝ程華美に身を窶すことがある。彼れは知的方面に於ては理解の深さと鋭さといふ事よりは、

寧ろ善くして早い記憶を以て、徹透深遠といふよりは寧ろ物識りといふことを示す。しかも嚴密にして細心なる思考を要する風な事を厭ふ。音楽、唱歌、圖書、習字等は好むのであるが、他の科などには、最少の勞力をも惜しむのである。

熱性の教育者

熱性の教師は、浮性のものに比すれば、その眞面目さ、理性、耐久力、活動力等の點に於て凌駕する。彼れは困難なる故を以て容易に意氣を沮喪せざる人である。併しながら、彼れは浮性の教師の如き温かなる情愛を持たぬ。彼れは兒童の思想界の中に身を下すこと、浮性のごとくには、ゆかぬ。其理性は餘りに冷たく、その活動力は餘りに烈しく、その耐久力は餘りに一徹で、彼れの兒童に對する要求は餘りに自己中心的であるも、彼は兒童や教職に對しては、自己の爲めに愉快に且つ利用的態度を取る。兒童が彼れを好かないとすれば、彼れは少くとも、彼れを恐れしめようとする。彼れの冷酷なるが故に、兒童の愛を受くる事が出來ぬとすれば、益々威嚇嚴峻の中に己を示さうとする。彼れは一旦所決せし上は、善にも惡にも之を貫徹するにつ

け如何なる犠牲を拂ふも辭せないとする。故に其教室内にのぞむや恰も大雷雨の一過するが如き観がある。児童の過誤などに對しても黙過せず、児童としては有り勝ちなる些細な缺陷にも彼れを激怒せしめ、冷酷粗暴な處置を取りて快とする。彼れは學校に於て時間の善用をする。若し彼れが今少し優し味を加へたならば、間然する所はあるまい。彼れの教授は徹底的であるから、その受持の學級の児童の成績は夫々見るべきものがある。併しながら其爲す所の凡てを見るに、彼れは児童の爲めといふよりも、寧ろ自己の絶えざる活動の下に、人目を惹き異色を放たうと力む。學校は自己の能力を發揮する機會を與ふるもの位にしか考へて居らぬ。彼れは己に近き總ての人に對して、自己の精神上の優者なることを感得せしめようとする。執拗なる彼れは、自己の意見を唯一の眞理と公言し、自己の學校を以て最良なるものとする。同僚でも平和を好むものは敬遠的態度を取るのである。

者 靜性の教育

靜性の教師は、冷靜にして眞面目の思想と行爲とをなす人である。彼れ

者 冷性の教育

の學校に於ける態度は眞面目に過ぎて、殆んど御儀式的である。その動作は威嚴に充ち、且つ當を得て居る。その表出は物靜かにして、言葉少なに、且つ考へ込んで居る。彼れの教授は乾燥無味であつて、児童の感情を惹起せぬ。一體生徒は自分の考の中に取り入れて高い知識慾を感じしむる時に興味動くのである。彼れは自分を本として判断するに、傾き、児童風に物を考へ、若くは爲すといふ事には相應しからぬ。彼れは児童の地位に身を下して、自ら児童となることを解せぬ。彼れは児童を待つに信用的態度を取るといふよりは、むしろ不信用的態度を取り、その銳利なる眼光をば、物事の善い方面よりは悪い方面に注ぎ、児童の中心思想には觸れないで、却つて児童は學校の厄介なる負擔といふ感を懷いて居る。

冷性の教師につきては、多くを言はぬ。先きに冷性の兩親について言つた事は皆あてはまるのである。萬事に無頓着冷淡にして安靜を欲する所の彼れは、又學校に對しても冷淡である。彼れ自ら秩序規律等も認めぬから、従つて児童は、此等を彼れから學ぶことは出来ぬ。彼れは自己の内部か

ら如何なる要求壓迫も感ぜぬ。兒童の考査なども極普通一遍のことを知つて居れば足れりとして満足する。

併し此所に述べたる様な全く純一にして配和せられない性情の教師や兩親は非常に稀であるといふことは被教育者にとりて幸福とする所である。教育や経験や年齢や意力や性情の稜角を破つて緩和するから本來は單一な性情の人でも多少他の性情の幾分を着色せぬものはない。純一な性情は到底社會生活にとりては有害であるが殊に指導者に於ては危険である。性情が多様に且つ強く配和せらるればせらるゝほど其人は教育上有用であるがこの配和が少く且つ弱い程用度乏しく危険である。あらゆる四性を配和し統一して特種の事情に應じて或は冷性或は熱性の特色を見はすことは兩親としては最良であり教育者としては最善であるといふべきである。

## 第五章 兒童の道德意識の發達

### 第一節 兒童社交性の發達

社交性の本能的表示

兒童研究家の觀察に従へば兒童は生後二ヶ月間はその反應が甚だ不明瞭で殆んど物と人との區別も附かぬ有様である。殊に生後の數週間は自己の四周のものに對して少しも善惡の區別をなさない。しかし追々進歩して來れば次第に自己の保護者たる兩親又は嫁姆に對しては他の所謂物との間に多少の差違あるを辨ふるものゝ如くである。三ヶ月位になれば兩親嫁姆等が相手になればニコ／＼と笑つて受け答へをする。それは全く無邪氣にたゞ本能的に傍に人が來るといふ事自身が嬉しい様に見える。漸次進めば誰かその傍に居らねば機嫌が悪い様になる。この事實は子供には全く純粹なる社交性が存在するものであることを證するものと見られる。かくて子供は誰か側に相手がなければ不機嫌なることは漸次



進化論者の  
説

著しくなり、六ヶ月頃になれば殊に左様である。かゝる見はれの中には甚不明瞭ではあるが、臆氣ながら同情の芽が含まれるやに考へられる。進化論者は多くこの見はれを以て遺傳に歸して曰く、これ子供が他人より保護を受け又は物質的利益を與へられるに際し、當人に對して持つ感情が積りて遺傳せるものであると。成程物質的利益を享ける際喜ぶといふこともこの場合重なる働きを爲して居るには相違なけれども、單に傍に居るといふこと自身が嬉しく感ぜられるといふことも、亦看過することの出來ぬ事實であるから、進化論一點張では説明がつけ難い。もつと廣く見て、これ人類の過去の生活に於て發達せる社交性の然らしむる所と考ふべきであると思ふ。斯様にはいふものゝ子供の示す笑顔の中には、全く自利的の要素が含まれぬと言ふものではない。無論周圍の人より物を與へられたり又は保護を受けたりして、自分自身では出來ぬことを他人が手傳ふことを嬉しく思ひ、又他の助力を求めんがために笑顔を見せるといふも勿論あるに相違ない。それは子供が自身に別に保護或は助力の必要を感ぜぬ

場合には比較的に愛想が好からず、我儘であるに拘はらず、保護を求むる必要に迫らるゝ場合、例へば兩親に伴はれて他に出づるとか兄弟と共に外出するとかいふ場合にありては態度一變して優しみが増し著しく依頼する様が見ゆるにも知られる。疑ひもなくかゝる場合には馴染のなき場所は何となく恐ろしいといふ遺傳的の恐怖心も大に手助けをして居るのは勿論である。

社交性の最  
高形式

斯く社交性は本能でもあり、又利用的態度によりて發達を助けられても居るが、要するに社交的感情の最良の形式は、青年期に達する迄は充分に見はれない。女兒にありては十五歳位男兒にありては一二年後れて見はれる。この年輩になれば他人に對してその人格の上一種の愛を持つやうになる。それは多くの場合に於て一種の宗教的態度と考へられる。宗教的感情が盛んになればなる程、他人に對する愛情も亦盛んなる様である。始終教會に出入する間の人々は特別に社交性の發達して居るにも知られる。これは勿論人類は互に相愛すべきであると教ふる所の基督教の主義も與

りて居るのである。

一體幼兒より少年の男女兒になれば、單に誰か傍に居れば嬉しいといふことは漸次なくなつて來る。これ他に原因もあらうが、又想像力の發達によることが多い。蓋し自分の眼前に人が居らぬからとて、想像の力でその人を思ひ浮ぶることが出来るからである。五歳位になれば、主として自分の目論見を助けて呉れる人を喜ぶやうである。中にも自分と共に遊び自分を助けて呉れる人を喜ぶ。而して三歳から青年期に達する迄の兒童は一般には自己と同じ様な經驗、同じ様な傾向を有する相手を好むものである。大人に對しては餘りに愛情を示さない。但し大人が殊更に力めて子供の仲間入りをし、其れを相手とする場合は、この限りではない。大人は自分の性格とは相異なる人を友として欲求する傾向があるが、兒童はこれに反するやうである。クロリーの説によれば、兒童は全く自分と同じい力のものよりは一二歳年上にしてしかも自分に幾分かの助力を與へうる友を喜ぶものゝ如くである。大人の中にも自分の分る仕事をする人を喜ぶ。

兒童に好ま  
るゝ仲間

社交に於け  
る平等性

例へば大工とか庭男とか料理人とかの如きものである。一般に兒童は快活にして敏捷の仲間を愛する。唯大人しくして居る靜的なものは餘り喜ばれない。自分より幾らか年上で言葉使も荒々しく、亂暴にして時々自分に戯れる如きものは却つて之を喜び、上品にして内氣なものは仲間より嫌はれる。これは男女兒を通じて見得る共同の情である。

又茲に一種異なるタイプの兒童がある。それは剛愎にして利己的の性質を有するものである。自分の容貌服裝が美で、家金持とか身分が高いとか、或は學問が出来るとかを自慢し、他よりも自分は一段上であると考ふる兒童である。斯様な傾向は餘り早くは見はれず、多く青年期に至りて著しく目立つて來る。しかし十二三歳にして見はれることのないでもない。概して社交性なるものは最も多くの點に於て平等なるもの、間に發達するものである。故に技能とか名譽とか階級とか、著しく異れば自然その間には社交性の助長しがたい傾がある。故に兒童の仲間にも追々其の結合が固くなれば、自然に上述せるが如く、高慢なるものは仲間か

ら排斥せられるやうになる。斯様なものが偶々ある時には總ての人が寄りたかつて其の鼻を折り、自分と同じうさせねば止まぬものである。公立の學校について見るも、かやうな仲間は男女兒によりて多少程度は異れど、苛められるのである。先に子供は活動的のものを仲間とし、非活動的の者を嫌ふと言つたが、これには又面白い意味がある様である。總じて兒童は自分自身が活動的で絶えずその周圍者より、自分の簡易にして原始的具體的の生活を營むを助けうる人を發見せんとする。故に活潑なる兒童は自然他の仲間より手本とせられ、従つてそれが自分等の指揮者となる。

社會階級は兒童の社交性に對して如何なる影響を與ふるか。兒童は社會階級に對しては極めて無頓着である。金持も貧乏人も市長の子も勞働者の兒も互に手を携へて遊び合ふ。これ日本や米國やの小學校の組織が平民的であることも大に關係があらう。オーシャ氏は長期間米國の西部の都市に於て此點の觀察をなしたるが、この學校は生徒の家庭に於てあらゆる種類のものを包容し、軍人あり、商人あり、官吏あり、醫師あり、かゝる研究

社交性と社會階級

服装と社交性

上には好都合であつた。それによれば小學校兒童の間にありては、社會階級は全く省みられず、運動場にも、教室にも、平等關係である。但しその間に自ら親しきものと親しからぬものとの差を生じ、金持の兒は金持の兒と共に遊ぶといふ傾向を認めぬではなかつたが、能く原因を探り見るに、父兄相互の間に交際があり、兒童も自然知り合へる所より、學校でも遊び友達となるのであつて、自分達は金持である、他の貧兒と違ふとの感を有したものでないことを知つた。尤も階級は女兒の間に於ては稍々關係を有するものゝ如くであるが、男兒は全く斯様な事は考へず、甚しきに至りては、人種の區別すらも念頭に置かざる有様である。

學校の兒童には、兒童の衣服の美であるか否かは、社交上に力なきが如くである。即ち粗美共に快く遊んで居る。女生徒の相互に話し合ふことを聞くも、遊戯が出来るとか、圖畫唱歌が上手であるとか、につき友達の批評はするも、衣服の美醜につきては餘り言はぬ。これらは青年期に至りて始めて兒童の頭に浮ぶ様である。常識に考ふる如く、女兒は子供の時より衣服

學業成績と  
社交

につきてさして苦心するものではない。

學課の善惡につきて見るに成績の良い兒は人望があるといふは能く人の言ふ所である。果して然るか寧ろ子供の見て出来るとするは快活敏捷にして常に活動的なる子供の意味で、單に學科の出来るといふ意味ではない様である。故に學科は出来ても不活潑の兒童は排斥せられる。他面から眺めて席順は最後であつても快活なるは仲間の氣に入る。かくて運動上手でさへあれば假令年齢は違つても相手とするが書物がよく讀めるといふことだけでは人望を得る所以とはならない。たゞ女兒にありてはやや趣を異にし九歳十歳頃から往々學校の學課の上に優れたるものを尊敬する様子があつて、自分達が一生懸命に勉強してもようせぬ事を爲し果す仲間には眞に敬服する如くに見える。しかしそれも何か賞品でも得る場合ならば却つて嫉妬の原因となり激しき争を起すこともある。

如上の事はオーシャ氏が主として米國の兒童を觀察して言つたものであるが、英國佛國又は以太利等では様子が餘程異なるものがある。蓋し此等

青年期と社  
交

の歐洲の國々では大人の仲間存する種々の階級をば子供の上にも影響を及ぼす様にと始終兩親が仕向けて居るといふことである。巴里や羅馬では階級が異なるに従ひ學ぶ學校も異り、兩親或は教師は絶えず下等社會の兒童と共に遊んではならぬと言つて居る。しかしそれにも拘らず何時か兒童の仲間には自然階級の差別がなくなり、家庭の方にて兩親又は家庭教師等により喧しく言はれし區別も漸次分らなくなり、貴族の兒も平民の兒も共に遊ぶといふことである。要するに兒童は青年期に達する迄は階級の區別には餘り重きを置かずして活潑の子供が愛せられるといふことに歸着する。それが青年期に達すれば様子が變り、異性に對する應對の模様などが著しく異つて來るのである。

又青年期の初期より一般社會に存する階級に目を着け、初め殊に女子にありてはこの傾向が著しい。自然に自分等と同じい身分のものと交際する様になるが、其の中でも富の差は大なる影響を與へる。比較的貧家の女兒は遠慮勝ちになり、富家の子の仲間入をせぬやうになつて來る。又金持

の子が學校内に勢力を認めらるゝもこの時期にある。かくて幼年時代に結ばれし交誼が解けて、新しい友達を生ずる。又此頃より漸次何組ともいふべきものが出来て、友達の範圍は明らかになり、組の仲間のものとは親密であるが、他の組とは交際せぬやうになる。この如く、女兒が社會階級の區別を認めるやうに至るには、兩親の干涉の力の大きなものあるを認めねばならぬ。

男兒は女兒に比すれば、比較的以後迄幼年時代の交際は續くものである。青年期になれば、漸次運動上手といふことの外に、學課の出来るものが勢力を占めて来る。此等は英國のイートン、ラタピイの諸學校に於ても、往々見る所である。

小學校を終りて中等學校に入る頃になれば、小學時代の友の多數は、退學し、比較的少數なる身分宜しきものが中等學校に入り、自然他の者とは引き離されることになる。かくなれば、自然兒童同志の交際の状態も變つて來、同境遇のものが仲間となる。併しこれは、兒童自身の精神より出でたるも

のではなく、寧ろ社會の組織の然らしむる所である。この場合良家の兒童が互に親睦する譯ではあるが、決して貧家の兒童を輕蔑し、仲間より省くといふのではなく、境遇の相違が此處に至らしめることが多い。

元來女子は新しい組を作ること、に於て男子よりも遙かに早い様である。故に假りに男子のみで女子が居らぬものとしたなら、社會階級は今日の如くに多種多様にはなりて居まいと思はれる。夫の鑛山地方の如き、獨身者の多く集まれる所にては、社會階級は殆んど平等的であることを見ても知ることが出来る。

青年時代に見はれる交友選擇の一標的となるものは、富である。概言すれば、比較的新しく開けたる土地にては、血統はあまり注意せられず、殊に兒童間には全く省みられぬものである。漸々と年長ずるに従ひ、土地が舊くなるに従ひ、それを考ふるやうになる。一般に青年期になれば、男女共に自分等と同階級を認め、これと結びつき己の地位を出來得る丈け高めんと努力をする。

富の外に青年期交友の條件として如何なるものが見はれるかと言ふに餘り甚しく貧ならざる以上は賢いものが人望を得るといふことが往々ある。しかし學科の出来るといふことのみが人望を得しむるといふは餘り稀なことである。これ等は田舎と大都會との如き状態の如何によりて大に差がある。

又富家同士の子供が金持との故を以て親密となることは往々ある。中以下の社會に屬するものにして學校に於て勢力を得んには、個人として大に傑出して居なければならぬ。中等學校専門學校等に於て相當に出来るものでも貧なれば友なくして寂しく生活するといふことは屢々見る所である。これも運動家とか音楽家とか又は文學的天才があるとかいふ場合は別である。

社交に見る  
児童の特質

一般的に言へば児童は利己的の行動を示す場合が多い。友達が寂しく獨りて居るとか或は何かによりて苦しんで居るとかいふ場合にこれを尋ねるとか助力を與ふるとかの如きことは餘りなさぬものである。却つて

大人から促がされる場合が多い。唯友人の病氣の場合などには多少同情をもつことも少からぬが其の見はれたるや多くは一時的で他に新しい友達に代りとして出来て來ると最早念頭に上らぬものゝ如くである。

### 第二節 児童の言動に見はるゝ推移

児童好談性  
の推移

児童は満一歳にならざるに既に自分の悲しみ喜び等の關心事を親とか兄弟とかの親しきものに通じようとのことを示すのである。長ずるに及びこの傾向が著しくなり喜びあれば他に聞いて貰ひ悲みあれば救ひて貰はうとの意が見ゆるのであるが殊に苦ある時に助力を求めめることは頗る大である。児童は何か爲る事にも人が見て賞める迄は何時迄も止めようとはせぬが又全く人の見ぬ所では爲ようとせぬ事は幼時より見ゆる。積木板並べ等の遊戯に於て皆左様である。この傾向が増大すれば何か不幸のありし場合には他の同情を求めんがために殊更に自己の悲を誇大に見せることがある。人が見附けると一層大聲で泣き出すとか痛い／＼と叫

ひ出すが如き類である。斯様にして九歳十歳頃迄は續くのである。青年期になれば、小き事は人に言はず、し之を他に示すとすも、直接に之を訴へず、間接に訴へ、出來得る限り、殊更に自ら同情を求むる様子を避ける。此頃になれば自分は堂々たる男兒である、英雄であるとの考が起り、他より彼れは英雄であると賞められたいといふ様子が見はれる。故に倒れても泣かぬのである。然るに女兒は何時迄も他人の同情を求むることが續き、自己の腹中に藏することが難い。これ等に又男女の差異が見はれる。

兒童が何か禁制せられし時は之を守ること比較的固く、且外の人にも左様にせしめようと力めるものである。故に違反者を見附くれば、直ちに教師に告口し、己の禁制を一般に勵行せしめようとする。

兒童は如何なることを多く言ふかといふに、五歳位のものには重に自分が走るとか、木に登るとか、玉を投ぐるとかの事柄を他に見て貰ひたがる様に見え、かゝる事のみを言うて居る。十歳位の女兒は重に遊戯等について、己の友達と共に爲しし事等につきて話す。同年輩の男兒なれば同じく運動

兒童話題の  
推移

の話をして、負けとか勝ちとかいふ競争の考が著しく見はれ、殊に勝つた時には激しく語る。青年期に近づけば、男兒の言ふ事は段々自分や友人やが或は知識的に或は社會的に或は筋力の上に於て、優れてゐる事を多く語る。殊に筋肉的の事については左様である。女兒は此頃になれば多く社交的のこと、知識的のこと、或は審美的のことを言ふ。青年期と共に男女兒何れも、男女兩性間のことを口にするやうになる。而して誰れか或る男兒と女兒とが特別に親密の様子が見ゆれば、好んで之を吹聴して歩く。

成熟期に従ひ個人が成功が漸次、兒童の口に上らなくなり、其代りに題目廣くなり、或は社會的、政治的の事、或は一般の業務に關することの如き世間の事が話題となる。殊に此頃は社會の人を評するに仕事の遣り方の立派とか、卑しきとかいふ様な評を爲し、それに自分の所感を附け加へて話す。多數の人の話は、大抵此位の處に止るが、或特殊の人は此後漸々進み、話題は自分の特別なる業務の上のみ限られて來る。此等の人は自分の仕事の範圍内に於て何か新しき事でも發見すれば、他人がそれに興味を有するか

人と語らぬ  
兒童

否かに關せず、盛んに吹聴して歩く。かゝる人は餘り交際上手とは言はれず、遂には一切世間の普通の話には耳を傾くるを欲せぬ程になる。中には内氣にして餘り人と語らぬ兒童がある、その重なる原因は臆病より來るものである。しかし斯く内氣の子供でも總ての人に對しては同様に控目であることは比較的に少い。學校他處などにては控目に無口なる兒童も自家又は知人のみの席では思の外話することがある、よく探れば眞に話嫌の子供といふものは殆んどないものである。この如く兒童には話しをして思想を交換する慾望があるが、これが爲めに社會も個人も發展するのである。蓋し各個人はこの話によりて自分に對して周圍の人が如何なる反應をするかを知り、それに應じて自身を外圍に適應せしむることが出来るからである。兒童は多くその場合々々に於て如何様にすれば自分に最も幸福であるかを考へるために、自分を發表するのである。之に反し大人は寧ろ自分の意見を一般の人に承認せしめ、他人をしてそれに従はしむる目的で話すのである。兒童は容易く新生

活の標準に適應することが出来るが、大人は大部分可塑性を失ひ老年に至れば益々著しい。

時として社會的の團體はそれに屬する各人に對して行爲の標準を守らしむることが出来る場合を生ずる。殊に一般に群衆となれば屢々家又は學校に於ては絶対に禁ぜらるべき様なことを行はしむる心理状態に人を驅るものである。概して幼年の兒童は自分の行爲に對して一般の人が如何様に考へるかには注意せず、寧ろ自分の好む所に従つて事をする傾向がある。唯明らかに自分の好む所に従へば失敗するといふことが目に見える際は格別である。時に兒童は殊更に自分の友人の明白なる意志に反對して見ることがある。その動機を尋ねれば別に深い理由もなく、唯友人に逆つて見る、或は自分は雷同者でないことを示すためにしたものであることが分る。大人にても時としては殊更に自分を特別に顯著ならしめんが爲めに、人の注目する所とならんが爲めに、衆人の意に反して反對に出づることもある。しかし大人にはかゝるは極めて稀である。兒童或は大人中に

兒童の行動  
の推移



も或者は常に自分の眼前に人の居る處でなければ仕事を爲さず、少くとも誰れか人の前に居るものと想像して仕事をする者がある。成熟期に近づけばある特種の人即ち自分の行爲の判断者、自分の意識の中心、自分の尊敬する人が漸々と定まつて、畢竟は一般の人の賞讃とか批難とか無頓着とかいふことが、自己の行爲を支配するやうになる。即ち一般の社會の感情を認め、それに對して己の態度を定むることが成長するに従ひ著しくなる。兒童は最初の中は左様ではなくて、或特別なる個人例へば父とか母とか教師とかいふ人の感情に従ひて、多く行動するものである。漸次社會的の經驗の増すに従ひて、一般の人々が種々の社會問題に對する態度を知つて來る。而して種々の異なる人も、或事情に關しては皆一樣の考を有するといふ事から各個人は次第に時代精神とか社會精神とかを自分に受け入れるやうになる。しかし斯様な場合に際しても、非常に特別に勢力のある人格は、各個人の社會意識の中に於て自ら獨立の地位を有ちて、往々輿論よりも強大なる威力を揮ふことがある。

### 第三節 兒童と從順

小兒は一般に自分に遊戯を教ふる人、或は自分が非常に興味を有する仕事を助ける人々に對しては、從順の態度を取るものである。故に運動に巧みなるものとか、音樂に堪能なるものなどは直ちに子供仲間の大将となり、自分がその周圍に集まつて來る。而して何時かそれに同化せられるやうになる。子供は他人の中に交れば年長者や保護者やに對して從順である。自家にありては、必しも左様ではない。兒童は概して行儀作法を責め立てられるを嫌ひ、時には故らに反抗するものである。即ち兒童は社會の習俗に従はない。それに従ふ様になるは多少長じて色々の場合に遭遇し、作法を守ることが自分に取り最も安全の方法であるとの事が分つてからの後である。その分る迄は常に作法習慣に對し、態と反抗的の態度を取るのである。大人と雖もよく考へて見れば、自發的に作法を守るといふことは寧ろ稀有で、内心はともかく外面上は社會の慣習に従はねばならぬと感

兒童と習俗作法

ずる故、これを守るといふが多い。然るに兒童は大人に比すれば率直であるから、自分の感情を詐り、強ひて世の習はしに從ふ事を爲さず、欲するが儘に行爲する。それが青年期に近づけば漸次様子が變り、自身で己の行爲を檢束し、社會の習慣に從ふやうになる。若し強ひて兒童をして習慣作法を守らしめようとすれば、彼等は如何にかしてこれを免れんとして口實を設けることが、益々上手になる。加之自己の周圍の者に對しては自分と同様に、其習慣を守らしめざるやうとするに力め、冷笑を加へる。故に食事の際とか、應接の際とかに行儀よくさせようとするには、青年期に達する迄は、絶えず日に／＼これを守らしめるやう、餘程腐心せねば、百日の説法も一朝にして破壊せらるゝのである。

兒童にして一旦社會の習俗に從ふ様になれば、今度は自分の仲間には、悉くこれを守らしめようとする。故にこれをする場合は大切である風に見せ、遂には自分の周圍の人をして自分同様にせしめねば、承知せぬものである。即ち兒童は長上の者より自分に教へられしことは、直ちにこれを目下

の者に教へようとする。故にかゝる場合目上に對しては從順であるが、目下に對してはなか／＼我儘亂暴である。

元來兒童は目上の者が自分よりも經驗に富み總ての事を巧みに處理するからと言つて、それに對して從順なるものではない。故に大人が子供に教へる場合などには、畢竟兒童自身がそれを勉めるやうに暗示を與ふるに過ぎないのである。

兒童と不從順

兒童は又健康に對する注意、又道德的行爲に對する注意を拒むが普通である。かゝる事柄については、始終自分の考を大人に對して言ひ張るのである。ために屢々大人と子供との間には衝突が起る。これ畢竟子供と大人との經驗の差の然らしむる所であつて、彼等が長じて充分にその利害得失が明らかになる迄は合點が行かぬのである。これに反し、兒童の製作的、構造的の活動を指揮する人に對しては、甚だ從順である。しかしその他の事柄については容易に他の言を聞かぬ。又自身がある仕事をする方法技術の一端を會得すれば、最早大人しく、人の言ふことは聞いて居らず、自分の

好むことをやり出すのである。学校にてもそれと同様に何かある技術を教へらるゝ場合には先生の言を聞けど一般の學科に於て教師に従順であるといふは寧ろ稀である。

学校の仕事にても極めて具體的に目に見える物を作り出す様な場合の外は容易に教師の命を聞かぬ。若し強ひてそれをやらしめようとするには罰にて威すとか賞詞を與ふるとかして鼓舞獎勵せねばならぬ。しかし漸次年長ずるに従ひ何時か學校に於て學ぶ種々の科目を充分に修めて置くことが畢竟自身の利益であることが分つて來る。かくなれば教師の教訓を拒まず大人しく受け入れる。しかしかゝる時期に至つても學校の授業の或者が児童の實際生活に遠ざかり何等實用的の意義を有して居らぬやうな場合にはこれを受け入れずもし何等かの方法で強制せられねば常にこれを避けようとする傾向がある。

模倣なるものは恐らくは兒童期に於て物を學ぶ所の重なる方法と見るを妨げない。而して兒童には芝居氣があつて大人に至る迄繼續するもの

であるが殊にそれが幼少の時期に於て著しい。これあるが爲めに兒童の周囲のものを學びて體得するを助くる様である。故に此等の心理を察せずして徒らに外面的の服従を強ひんとするが如きは大に戒むる所がなくてはならぬ。即ち兒童の自然性を教育的に利用すれば期せずして従順たらしめ得るものである。

#### 第四節 児童と義務觀念

幼稚な兒童は全く自分の事ばかりを考へて他人の事は殆んど眼中に無きものゝ如くである。少くとも生後八週乃至十週間は自己以外に何物もなき有様である。十二週目位に至りては始めて人との接觸例へば母の抱くことなどに對して愉快を感じ微笑又は一種の聲を揚げて喜の意を表示するのである。併し畢竟兒童の間は他人のことは餘り省みない。兒童の行爲を律すべきものは人間の方にも物質の方にもその周囲にはない。換言すれば環境中兒童の行爲に決定を與ふるものがないのである。しかし

兒童と同類意識

滿一歳の終頃になれば兒童は時として兩親或は乳母の言葉に従つて泣くことを止めたり又は玩具を人にやる様のことをし始める。これも常に起るわけではなく、何れかと言へば極めて稀な場合である。滿二歳頃になれば幾らか社會的關係の考が表示するやうに見える。即ち漸々他人が自分に對する反應に依り、兒童は人間と物體との差別を明らかにする。人間に對してはいくらか自分に近きものとして接する如く見える。この差別をさせるには單純なる模倣のみではいかぬ。それよりも切なる經驗が必要である。漸次他人と接觸する間に自然それを經驗し得らるゝもので何時とはなしにギッヂングスの所謂同類意識なるものが生じて來る。これもその始めに當つては時に範圍が漠然として廣さが故に自己の愛するものは皆この仲間に入る。犬とか猫とか小鳥とかの如き皆これである。年齢が進むにつれ此等のものゝ自分に對する反應は兩親朋友等のそれとはその性質や程度に著しい差違あることを感じ、此同類意識の範圍が明白となつて來るのである。種々の經驗によつて人間と物體との區別が明白にな

人との交際による二様の態度

るのは滿五歳位であるとは兒童研究家の言である。  
或は賞せられたり或は叱られたり或は褒貶せられたりする事は、兒童をして次第々々にその態度を二つに區別するに至らしめるのである。即ち利己的と利他的との態度はこれである。概言すれば夫の他人との接觸によりて起る經驗は兒童をして利他的の行爲は自然に自分の利益となり利己的の行爲は結局自分の不利益となることを悟らしめる。共通の利害を有し又共同に働くことにより次第々々に他人と協力することを知り他人を自分同様に考へるやうになる。この如くにして利己と利他的との區別が立ち、こゝに義務の考が起るのである。

兒童は眞の反省を経た意味に於ての自我觀念が未だ出來ぬ以前から自我として働くものである。子供に對しての自我といふ考は本能的の態度及傾向の一部を指すに外ならぬ。漸次發達するに従つて自分自身が同じ様の場合に於て爲す態度を本として他人の爲す所の動作の意味を考ふる様になる。即ち子供が大人の顔附態度を見て喜悲等を知るのは、これ自分

の泣き怒る時は、これに似よつて居るから、この自分の感情態度を移して他人のを知るのである。かゝる投觀的傾向に於ても猶常に兒童は他人の利害に反して自分の勝手我儘を働くものである。

普通の人の考によれば、自我と非我とは始から對立せるもので、利己主義と利他主義とは正反對に立つものである。故に人は利己的にして同時に利他的なることは有り得べからざることである。又多くの學者の考は社會は一の有機體を形成して居るので、利己も利他也畢竟は一致する所がある。即ち自分を發達せしむるのは、結局全體を發達せしむる所以であり、又全體に利益を與ふるは自分もその利を受くる所以であるといふ。しかし、兩者共皮相的の考に過ぎぬ。少くとも人生の發達の方面より觀察すれば、部分的のもので誤つて居る。子供の動作の大部分は利己的でもなく、さりとて利他的でもない。彼等は他人の利害に反して自己の利益を計る目的で萬事を爲るといふ事はない。又その反對に自分の利益を捨て、他人の利益を計る考で仕事を爲ることもない。言はゞ兒童の動作は中性である。

兒童の行動  
の眞意義

段々年齢が進むに従ひ、多くの場合自己を犠牲に供する仕事は自然自分の利益になることを悟り、又自己の利益をのみ計らんとする時は、却つて損害を招くといふことが分つて来る。されば年齢の進むに従つて、仕事は之を他より眺むれば如何にも利他的の行爲の如くである。しかし、當人の内面的から言へば、段々利己的になるのである。それと同時に一方に於ては如何なる發達の程度にも純粹に利他的の行爲と見らるべきものも存する。自分の愛者の爲めには自分の勞苦を厭はぬ様の如きは、屢々幼兒にも見受けらるゝ所である。これは畢竟本能に基くものと考へられる。他人の利害に反對して自己をのみ進めようとする傾向は、個性によつて著しい相違がある。それに就いては色々のタイプが存して居るのであるが、當面の問題ではないから言及せぬことにする。

要するに幼年時代の行爲は反省的ではない。唯自分の欲するものを取り、自分の爲したきことを爲し、所謂直情徑行である。併し正當に發達をすれば、何時か或種の行爲は全體の利益の爲めに必要であり、又は有害である。

義務の觀念  
の生ずる過  
程

といふことを辨へて來るのである。かゝる時期に到達すれば他より與へらるゝ道徳的教訓に従ひ之に同化するやうになる。而してその間他人との接觸によりて次第々々に善良の行爲は他人の賞讃を受け、不良なる行爲は他より排斥せられることより、次第に正邪の區別が立つのである。児童はかくなつて來れば始めて義務といふ考を有するに至る。しかしその義務の觀念なるものも當初は所謂自然的不可として感ぜられ、稍々後に至りて道徳的不可として感ぜらるゝものである。

子供の良心なるものは社會的經驗から起つて來る。蓋し或種の行爲は周圍の人から何等の抵抗を受けずして行ひ得るに反し、或種のものには拒絶せらるゝといふ様な關係が分つて來る。段々と年長するに従ひ、その具體的の要素はなくなつて、唯一般的抽象的の感情が残されて來る。猶これに加ふるに歴史、文學、藝術、宗教の如きものを教へられ、それより生ずる考又は感情なるものが子供の良心の發達を助けるのである。かくて自分の行爲の導きをなすものが出來、その教に背くことをする場合には、良心の咎めを

児童の良心  
と經驗

理想の構成  
に力ある宗  
教

受けることになる。更に一步を進めて一般に人々は如何なる心事態度をなすかといふことが分れば、或は自分の知己の中から、或は書物の語の中から、如何なる行爲が理想的のものであるかを考へるやうになる。斯様になれば自分の理想と實際の行爲とがうまく調和せねば一種の不安を感ずる。これ良心の苦悶である。故にこの社會的の方面に對する意識は一種の演劇の如きものであつて、自身がその舞臺に立つ。而して自分の知合、或は書物中、歴史中の人物、或は文學書中の假設的の人の如きは、観客として常に一言一行を監視し、或時は賞讃となり、又或時は批難となることを想像に畫き、以て自分の行爲を律する標準とし、これが集つて良心の聲となるのである。オ、シヤなどによれば、宗教なるものは、子供の理想を立つるが、上に餘程都合の宜しいものである。子供は、宗教上の事については、頗る現實的である。完全なるものとして見はされたる宗教上の人物、乃至全智全能なる神は一方に於ては子供の模範を示し、一方に於ては絶えず監督者となるのである。殊に全智全能の神は如何なる場合に於ても見ざるものなく、聞かさ

るものなく、善良なるに福德を授け、凶悪なるに責罰を下すとすは、兒童の意識の上に極めて有力に働くのである。宗教教授の最も有力なる處は正に此點にある。然るに歐米に於ける宗教を子供に教ふるものは、如上の要諦は第二義に置き、この全世界は神によりて造らるゝとか、或は神は天上に在すとか、或は天國は如何とか、或は基督と神との關係とか、或は神と人の關係とか、動もすれば理窟めいたことを教へようとする。かくなれば宗教も他の歴史、地理、博物等と同じく、一種の知識的の學科となり、道德的感化の力を失ふことになる。本末を誤るこれより甚しきはあるまい。我小中學校に於ける修身教授の現況果して如何。その枝葉に馳せて本領を没却すること、恰も歐米に於ける囚はれたる宗教教授の如きものなしとせば、大幸である。

又宗教上の儀式なるものも、その神秘的なる處が神の隠れたる賞罰に、一種の力を與へ、價值があるのである。しかも餘り屢々この宗教上の儀式を行へば、それに慣れて、神秘的の處がなくなり、平凡のものとなり、却つてその影響等は、果して如何なるものがあるであらうか。單に儀式の爲めに、儀式を行ふといふ没意義の境地を脱し、如上の方面からも眞摯なる教育實際家の熟慮と反省とを求むることが切である。

### 第五節 兒童の正義に對する考

兒童正義感の發達

兒童が成長して、兩親、仲間、或は他人と數多く接觸するに、從ひ、漸次、人々は權利を有するものであるといふことが分つて來る。この權利なるものは、兒童には最初の中は犯すべからざるものとして感ぜられ、後には進んで犯してはならぬ、犯しては宜しからぬものとして感ぜられるのである。かく兒童が社會的に發達を遂げる終局點は何れにありやといふに、他人を取扱ふに自分自身を取扱ふと同じきに至るにある。こは他人の自分に對する取扱方、即ち他人より報酬を受け又は叱責せらるゝが如き場合もまさにと同

様である。

この如くにして正直にするといふ正義の考が作り出され漸次發達するに従ひ形式益々複雑となり範圍益々廣汎となり廣く見れば社會の習慣となり或は法制となるのである。理論的に言へば社會の總ての人間はこの正義の法則に従つて一切自分の功過に相當する公平なる取扱を受くべきである。併しながら其處に又多少の變改が行はれる。何ぞや即ち慈悲といふ考の入り來ることである。この考によりて純粹の正義の考は屢々緩和せらるゝを見る。この傾向は特赦情狀酌量などいふ風な形になつて多少兒童の間にも見られぬではない。

法律の前には總ての人が平等であるといふことは最初の間はなか／＼一般には行はれないのであつて正義の行はれる範圍は先づ一の仲間を限つて居る。大人に就いて之を見れば紳士間に行はるゝ作法は必ずしも他の階級に對して行はるゝものでなく又多くの人は自分の友人と家僕とに對しては同様の行をなさないのである。昔の希臘人は自分の國人を害す

兒童の正義  
の觀念の範  
圍

るは罪惡と考へたけれども他國人に損害を加ふるは不正の所爲と見做さざるのみならず時としては夫によりて國人に賞讃せられる場合もあつたのである。現時の國家や宗教各派の間にも同様の事實の認められることが往々であるが兒童の間にもこの正義の觀念は狭き自分の遊び仲間に限られるものゝ如くである。腕力に任せて遊び仲間を苛める者は憎まれるけれどもその暴行が他の遊び仲間に加へられる場合は却つて賞讃せらるるは有勝のことである。斯の如くにして正義の觀念なるものは變化の乏しい社會に於ては往々これがその社會階級を持續する一の力ともなることがある。之に反し複雑なる社會にありてはこの正義の觀念の範圍は漸次擴張してこれに依りて絶えず社會階級を打破し一切を平等にしようとする傾きがある。この點に於て歐洲邊の古き國と米國の如き新らしき國とでは著しい相違がある。米國にありては富とか門閥とかは多少社會階級の差別を立てるに與つて居らぬことはないけれどもしかし歐洲諸國に比すれば米國に於ける社會的位置なるものは比較的公平にして社會に



對するその人の功勞によりて定まる様になる。

兒童は元來我儘者にして、それが社會と旨く調和するに至るは、一朝一夕の事ではない。それ迄には終始周囲の人々と接觸し、揉れ／＼て圭角が取られねばならぬ。漸次人に接すれば、何時か我儘をすれば他人に排斥せられ結局自分が苦しまねばならぬことを發見する。而して自分が幸福安全なるが爲めには、矢張り他の爲る様に自分も我儘勝手をしてはならぬことを知るのである。併し嫉の届かぬ粗野な育ちの兒童は何でも自分の欲しきものは勝手にするといふ様な我儘の傾向がある。これが色々経験を積む間に他人と衝突し、或は排斥せられたりして自分の物、他人の物を理解する様になる。故にこの所有といふ考の發達するのは、極めて徐々たるものである。

兒童は何か欲しき物を取らうとするに際し、或場合には他人が之を妨げず、或場合には之が拒まれるといふ事が度重なるに従ひ、他人が自由にすることを許さぬものと自分の自由に於て差支へなきものとを區別して來る。

兒童の經驗  
と正義の觀念

終に人より貰へるもの、自分が貰へるもの、自分が先きに發見せるものは、自分に屬するものであるといふ事を知る。又自分に屬するものを他人が取らうとする場合には、嘗つて自分が他人の所有品を取らうとせし際に、他人から自分に言はれし言葉を其儘鸚鵡返しに、これは私のである、人から貰つたのである、或は買つたのである、と言ひ張る様になり、次第に所有權といふ考を作る。故に所有權の始めは玩具に起るのである。この如くにして作られし所有權の觀念なるものも、漸次經驗が廣くなるに従ひ、多少變改を受けなければならぬ様になる。蓋し人から與へられた物でも、自分が勝手にすることの出來ぬ場合もあり、その場合／＼毎に、必らず何等かの衝突が生じ、結所有に關しては絶對的に動かすべからざる法則は存在せず、絶えず周囲の事情によりて異なることが分る。ゆゑに變化の多い社會程所有權の思想は絶えず移動を爲すものである。米國の如きは此種の事情の變化の著しい社會状態である。

正義感を催  
進する内外  
面の事情

上述せる如く、我儘をすれば、他から排斥を受けるといふ風な、消極的の教

訓を補ふに茲に積極的方法がある。それは児童がその両親或は兄弟から絶えず當り前にせざばならぬ無理我儘をなしてはならぬといふことを教へられることである。これは極少時から成人に至る時まで続く。かく外部から與へられる教訓は、児童の社會に適應することを促すのである。又茲に正義に關しては、先天的の本能的要素も加はつて居るといふことを知らねばならぬ。それは児童は終始弱者に對して同情を持つ傾向があるといふことである。仲間の喧嘩の場合には殆んど常に弱い方の肩を持つ。児童は何か友達同士の喧嘩の場合は、一々その原因や成行やを尋ねこれが是非曲直を判断する暇なく、直ちに兎も角その當事者の中何れが年下にして身體の小ささかを見これに味方する傾がある。これは絶えず児童を觀察する人の心附くことである。畢竟これはその児童の所持せる正義觀念が知らず識らず其處に働き來りて弱きを助け強きを挫くに至るのであつて、其處に先天的の傾向のあるは否定すべからざる事實である。

児童は正義の特例を認めず

織的に理解するに先だち何處にても如何なる人にも又如何なる事情にも、總て規則は一樣に行はれねばならぬといふ如き感じを有して居る。但し自身自身に利害の關係ある時は往々にしてその如くではない。年齢が特別の性質を有し、年長者は児童と異るといふが如き事は、児童の考には容易に浮んで來ないのであつて、兄弟三人あれば三人とも同じ事を要求する。かく年齢の差別の児童の頭に浮ぶことは、社會の事情によりて著しい相違がある。例へば獨逸の如きは一般に老人の尊重せられる國である。故に児童は絶えず大人の先に立つてはならぬ、兄弟に譲るべしとの事を教へられるから、年長者を尊重する考が比較的早い。然るに米國にてはその點に於て頗る異り、年齢は社會的位置を定むるが上に一向力を有しない。故に米國の児童は年長者は特別といふ考はなかく出來ない。此等によりて之を見るに、正義の觀念は、年齢によりて斟酌せらるべしとの事は、畢竟社會の方面より生ずる事柄で、児童の天然に存する自然の性質ではないといふことが分るのである。

兒童は始めは或行爲の動機乃至意向といふが如きことは全く考へず、唯行爲の外に見はるゝ結果についてのみ考ふるものである。併しそれも漸次經驗を積むにつれ、他人に對する自分の態度の上より行爲に甲乙の差別の生ずることを自覺する。この如くにして同一事にも人は結果についてとはなく、内部に潛む動機について賞讃し、又は批難することを知る。初め兒童は全く他人は自分の行爲についても結果の上よりのみ判断を下すものと考へて居たのであるが、それが動機によりて差別あることを知るや、今度は如何なる事にも誤りて爲したるにて態となしたるではないと言譯すれば、罪を免れるものとして盛んに之を濫用する時期が見られる。しかしこれも經驗の積むに従ひて變化し、例令不用意になしたる事でも、若し注意さへして居れば左様には行かぬのであるといふ事に氣附き、不注意に關して自己に責任があるといふことを感ずる。この如くにして責任の感が明瞭になると同時に、それに關する條件も明瞭となつて來るのであるが、その充分に熟するのは青年期にある。

責任の考が漸次明瞭となるに就いては、世人も臆げにその標準を立て、年齢の進むにつれて漸次責任を負はしむる程度を加へるのである。責任の感はかくて漸次發達するといへ、兒童の考は具體的な自我以外には及ばない。故に青年期に達する迄は、兒童は何か失策せる場合には、事情止むをえず、或は自分は天性愚鈍故止むをえず、或は天性微力故止むをえずといふ類のことを口にしない。併し青年期に達すれば、多くの場合に自分の失策の原因を周囲の事情、或は自分の天性、或は造物主の罪に歸し、幾分自己の責任を軽減しようとする考が見える。他人に對しても、之と同様で十二三歳の兒童は成績不良の同級生に對しても、決して假借せず、彼れは勉強しても出來ぬのであるとの事は、なかく、曉らず、従つて自分の能力には、元來限りがあつて、此事は到底出來ぬとの考は、起り來ぬものである。青年期になつても起らず、努力して自分の理想と現實とが甚だ遠きに對して、苦悶を感ずるは、二十歳前後の常態である。それが四十歳頃になれば、これは自分の力に合はぬ事と斷念し、煩悶が無くなるのである。

### 第六節 兒童と尊敬

概言すれば人はその公私の生活に於て、社會の慣習に従ひてその規律を守り、團體の思想を尊重する時は、公衆より尊敬を受けるものである。若し一般の風習に背いても、尙他から尊敬を受けるといふ場合あらば、それはその他の點に於て傑出した所があつてあの人ならばと、他より是認される場合に限る。

個人が社會に適應する態度の中で、社會より尊敬を受くるといふ事は、餘程不確實であり、間接的であつて、例令或行爲があるにしても、それが直接に明瞭に衆人の注意を惹く場合でなければ、餘り尊敬を受け、批難を招くに至らぬものである。故に盜賊殺人等は人の注意を惹き易く、屢々その一地方の人をして不安の思ひあらしめる。之に反し商人が暴利を貪り買占をやるといふ類はその害毒を流す點より言へば、その範圍甚だ廣汎に亘るも、さして目立たぬがため、人の噂にも上らぬ位である。又戦争にて殊勳を立て

長者に對する尊敬

たとか、火事の際人命を救つたとかいふが如き事は、非常に世人の賞讃を博するに足るが、教育者などの様に數十年間獻身的に努力しその功績測るべからざるものあるに拘はらず、世人には一向省みる所とならぬのである。

この如く世の名譽尊敬なるものは甚だ不確實であるといふことが出来る。或國人例へば支那人、伊太利人、獨逸人等は頻りに年長者を尊敬すべきことをその子供に教へる。中には之を以てその國の教育に於ける唯一の目的であるかの如くに重視する所もある。唯に年長者のみに止らず、國家の教會寺院及其の代表者たるべき人は之を尊敬せねばならぬと頻りに教へて居る。かく年長者を餘りに尊敬するに過ぐる社會は何れかと言へば、固定的であつて安固といふことは出来るかも知れぬが、變化に乏しく、單調であつて、潑刺たる所がない。獨逸、英國の如きはこれに近い。此等の國民間に於ては、米人などよりも一層多く兩親教師或は教會の牧師といふものに對して尊敬を見はして居る。併し一步立ち入りて考察すれば、尙其處に疑ふべき點のないでもない。蓋し、兒童が此等年長者に對して尊敬の意を表